
見えない雪が積もる時

hisasi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見えない雪が積もる時

【Nコード】

N3391I

【作者名】

h i s a s i

【あらすじ】

路上でおじいさんに売られたカラーコンタクトをつけた下田岩男は、翌日誰にも見えない雪を見る。

どんどん積もっていく雪。ビルがどんどん埋まっていき、東京が見渡す限りの雪原になる。誰も理解していない雪を唯一理解できている美女の登場。そして、美女は岩男を誘って、柔らかな雪原に飛び込んでいく！

そこから若男はありえない世界に行ってしまうのだ！

ダメダメサラリーマン（前書き）

見えない雪が東京を埋め尽くしたら！超高層ビルからそんな雪原に飛び込んだなら！

そして、新しい世界に行ってしまったなら！

その新しい世界は誰も想像したことのない世界である事は間違いないでしょう！

さあ、見えない雪の向こうにあなたは何を見るのかな？

ダメダメサラリーマン

誰だって自分の生きる世界に不満を持っている。そんな余裕があるのはもちろん平和だからだ。そうじゃなきゃ、そんな生き方出来やしない。まあ、それはいい。

平和に満ち足りたら、次に目指すのは快樂だ。当然のことだろう。誰だってそうだ。

まあ、そうなれば、人は混沌から平和を勝ち取った事などついと忘れて、現状の不満をまき散らしながら、より刺激を求めて生きてしまふ。そして、自分が今ここにいる現状を当たり前感じて、強い刺激を求めて、また混沌の世界を作り上げ、漂ってしまふ。そうやって、今まで世界は同じ事の繰り返しを続けて今の今まで生きてきた。

世界が同じ事を繰り返しているという事は、そこにいる人間が同じことを繰り返ししてきたという事だ。そして、その人間はそれを望んでいたからこそ、それを行ってきたのだろう。どの時代にも、どんな体制の時も、どんな思想のもとでも、人は同じ事を繰り返してより刺激を求めて生きてきたのだ。

そして、ここにもそんな人間の一人がいる。

名前は下田岩男しもた いわおと言う。

彼の生活は単純だ。都会に暮らす普通の男である。

いや多少ひねくれ者で、孤独な男と言う事は言えた。だから、むしろ何もない男とも言えた。

そんな人間、都会にはごろごろしているから、取り立てて彼を特別視する事はないのだけど、始まる物語を止められるものはこの世にはいない。それは、彼が望んでいたのもあるけど、正直別に期待していた訳では無いと思う。ただ、不満があったただけだと思うのだが、そんな彼にでも、何かが起これば、やっぱり変化が起こる。

当然の成り行き。

しかし、偶然の出来事。

人が紡ぐ物語ってそんなものだ。

だから、話は唐突に始まる。岩男の日常からだ。そこからしか始まらないだろう。

彼は、頭に並ぶのが「退屈な」「平凡の」「ありふれた」と言う、そんな日々を過ごしていると、こんなにも何も無い日常があつていいのか？なんて、まるで平安貴族みたいな心情になつてしまつていた。

朝来て、決まつた仕事をこなし、社員食堂で代り映えない昼食を取り、また仕事をして、誰も待つていないアパートに帰る毎日。経済危機の影響で仕事を求める人をニュースで見ると、仕事があるだけましなんて口に出したりはするけど、本音では、何か起こらないかと期待している自分がある。別に今の仕事に不満がある訳ではないけど、自分から求めてやつている仕事じゃない。仕事なんてそんなもんだろう。自分から求めて出来る仕事は、もつと出来のいい奴がかつさらつていき、残りはどうでもいような仕事が振り分けられるわけだ。だから、誰も自分に期待もしてこないし、そんな責任のある仕事を任される事もない。会社の歯車として、小さな、小さな一角を当てはめられているだけだ。誰でも出来る仕事を、毎日厭きもしないで何年も続けていれば、誰だつてそんな心情になる。岩男はそんな事を思いながらデスクの上を整理していた。

まあ、そんな文句を並べても生活は出来ている訳だし、仕事をそつなくこなしておいて、プライベートを充実させられていたら、日々をこんなにも退屈に感じないのかもしれない。彼女がいたら、岩男だつて頭の中は花びらで埋め尽くされ、むしろ時間が惜しいくらいに感じるのは間違いないだろう。どこかに遊びに行つたり、二人で旅行に行つたり、記念日やイベントを待ち遠しく思つたりして、先にある楽しみを思いながら日々を過ごす事も出来るだろう。それがどんなに楽しい事かは、岩男にだつて分かつていた。そして、結婚をして子供なんか出来たら、きつと自分は子煩悩な父親になるはず

だ。そんな自分の姿は容易に想像で来たりする。結婚している人からは、もつとよく遊んでから考えても遅くはないと言われたりするけど、自分としてはもうそれを受け入れる順にはしっかり出来ていないのだ。結婚願望はある。

しかし、社会人になってから五年、ただの一人の彼女も現れやしなかった。一人寂しく、仕事場と六畳一間のアパートの間を往復する日々。恋する事もなければ、声をかけられる事もなかった。

もちろん、職場に女性はいる。何しろ大きなビルなのだから、幅広い年齢層の女性がいる訳で、適齢期の未婚女性は数えきれないほどいる。適齢期を過ぎている人も範疇はんちゆうに含めれば、岩男にも数え切れないほどのチャンスが転がっているとは言えた。

だが、その機会は未だ訪れてはいない。

岩男にだって言い分はある。大学を卒業するまでは付き合っていた彼女がいた訳で、そりゃあ、岩男にとつてその人が初めて付き合った人とは言え、男の能力に問題がある訳ではない。女性経験が豊富な男には遠く及ばないだろうけど、自分だってそれなりに普通の男だと思っているのだ。背は低いし、あまり明るい方ではないし、運動もそこそこだし、皆の中心となつて何かをする事もないけど、それでも、街にいる他の男と比べてもそこまで劣つていないとは思えない。だから、街で自分みたいな男が彼女を連れているところを見ると、何とも言えない複雑な心境になってしまう。

ただ、これは自分だけに問題があるとは、岩男は思っていない。大抵、今自分の周りにいる女性は、全くそんな気を起こさせないのだ。小さい頃はそんな事なんて露とも感じなかったが、大学入学の為に上京してから女性と知り合い、話をしているうちに、あまりのギャップにとつても付いていけなかった。周りの友達は様変わりしたかのように生き方を変えていったのにもかかわらず、岩男は取り残されたかのように置き去りのままであった。その時付き合っていた女の子は、一つ年下で同郷の優しい娘むすめだったが、岩男が就職をするのを機にすれ違ってしまい、彼女がまだ大学生だった事もあるが、

年下の男と浮気されて別れてしまった。五年経った今でも悔しさに心がざわつく事がある。岩男の女性不信は、そこからも影を引きずっているのだろう。

ただ、岩男だつて何時までもめそめそしているだけではないし、もう時間も経っているのだから、新しい恋をしたいという気には十分なっているのは間違いない。しかし、社会人として過ごして感じたのだが、職場で会う女性はどこかとつきにくいオーラを放っていると云うか、仕事をしている女性とそれ以外の話をする切っ掛けがうまくとれないのだ。職場となると、どうも畏おそまってしまい、普段の自分とは感覚が違うからうまく自分を出せない。彼女達の纏まとう、見えないけど分厚い鎧よろいを貫くほどの武器は、岩男は持ち合わせていないのだ。それに、悲しいかな、周りの男友達も同じような状況であり、それを伝つて手に女の子と知り合うと言いう事も出来なかった。類は友を呼ぶのだろう。

まあ、そうは言っても、向こうから誘ってくるならまんざらでもないし、いつでもお相手願ねがいますけど、なんて、自分勝手な感情でいつも誤魔化しているわけだ。自分に自信がある訳ではないけど、岩男にだつてプライドだけは人一倍あるわけで、どうしても女性にへりくだれない自分がいる。背が低いのもその一因になっているかもしれない。男友達の前でなら自分をさらけ出せるのに、女性には心を開けないその原因は、今の女性の方にある、そして時代がそうさせたんだと持論をぶつて、女が強くて、自分が受け入れられないのだと納得させている訳だ。

ただ、それを理解してくれた異性は、一人もいないのが現状と言えた。だから、岩男には彼女がいないのだ。

パートナーがいなくても人生を謳歌おっかしている人は、男女とも数多くこの世界にいるのだろうけど、そんな人はたいい打ち込む何かを持っていてるものだ。それは仕事かもしれないし、山登りだったり、一人旅だったり、慈善活動や宗教、またはペットに愛情を注ぐことかもしれない。しかし、岩男にはそのどれもが当てはまらなかった。

まっさきに仕事は置いておいて、慈善活動なんて募金すら一度としてやったこと無かつたし、宗教を思い浮かべてもあやしいとは思えない。一人でいるくせにどこかに行こうだなんて面倒くさくて考えもつかないし、ましてや山に連れて行こうとも思わない。一人暮らしで、面倒くさがり屋の岩男とペットの組み合わせなんて、混沌こんとんしか生み出さないだろう。岩男も嫌いではなかったが、それをよく理解していたので、動物を飼おうとは思わなかった。

だいたい、岩男には趣味と呼べるものがない。趣味は何？と聞かれても即答出来るものがないのだ。歴史が好きだったり、カラオケが好きだったり、映画を見たりするのは好きだけれにのめり込むほど没頭している訳ではなく、なんとなく好きという程度なのだから。たまにギャンブルもするし、お酒だつてよく飲む。最近はお酒ばかり一人酒だ。一人で行きつけのバーに行く。連れはない。何と言っても、岩男には友達が少ない。だから仕方無く一人だ。同じ職場の人間と連れだつて飲みに行っていたのは、勤め出してから二年目まで。最初は上司に連れていかれ付き合わされたが、岩男の乗りの悪さとかたくなに打ち解けない態度に、次第に誘いも少なくなつた。同僚とも仕事以上の付き合いなどもつた事無かつたし、幼馴染はこつちには出てこないで田舎にいるし、大学の同級生は卒業して働き出してから大分疎遠になつてしまった。

だから、いつも一人と言えはそうかもしれない。まあ、今となつてはその方が楽であるし、それ以上の関係は煩わしく思つてしまう。だから、酒を飲みたい時は仕事帰りに、アパートと職場の中間地点にある小さなバーに行く。そのバーに行くと、もつぱら飲むのはバーボンだ。会社とは駅を挟んで反対側にある、歌舞伎町に近いそのバーには年の割に渋く見えて、寡黙だけどそつがないマスターがいた。彼は岩男より一回りは年が上なのだが、こだわりの人で店にはバーボンしか置いてない。ビールすら置いていないし、カクテルなんて作っているのを見た事もない。強い酒の店かと思うと、ラムや

テキーラ、ブランデーやウツツカなどの蒸留酒は置いていないし、ましてや焼酎もない。今ならどこの飲み屋でも一本は置いてある、流行りのワインを見かけた事も無いし、ソフトドリンクもミネラルウォーターすら置いていない。

そこにあるのはウイスキー、それも、ほぼバーボンだ。

初めふらりと店の外観に惹かれては入った時に、マスターの後ろにずらりと並んだ様々な種類のバーボンに圧倒されて、もうすっかり魅了されてしまった。その雰囲気しびに痺れてしまったのだ。こだわりの逸品ばかりなので、来る度に驚きを与えられる。だから、岩男の様な何かを求めているのに、満たされないような男に、こんな店に来たいと思わせてしまう魅力があった。しかし、高い。じゃないとやっていけないのだろけれど、それでも岩男みたいな人間が毎日のように通ってしまうのだから、立派に成り立っているのだろ。

客はやはり男が多くて、だいたい決まった人間しか来ない。それも、岩男と同じように喋らない連中だ。一人でカウンターに座りながら、グラスと琥珀色の液体を眺めて、それに心を通わせているのだ。酒と会話するのだから、他の人間は邪魔でしかないのだろ。だから、岩男がそこで知り合った人間なんて、一人もいやしなかった。もう二年も通っているが、顔を知っている人は何人もいるけど、軽く会釈する程度だ。他の店だったら、酒の力を借りて話なんかするだろうし、それを目的に足しげく通っている人もいるのだろけれど、この場所にはそんな男はいなくて、ただ、自分と向き合うために酒を飲みに来ている訳だ。もちろん、岩男もそのうちの一人である。誰とも会話しないまま、酒を喉のどに流す。

口をきくとしたらマスターくらいだろうか。その茶色い髪を伸ばした口髭の彼は、おべんちゃんとも言わないし、客を持ち上げもしない。冗談も言わなければ、作り笑いすらしない。彼は彼の基軸きかくで動いている訳で、客に合わせようとなんてまったくしない。

ただ、喋る時は対外たいがい、相撲すもうの話をしてくる。趣味が変わっているとしか言いようがないが、淡々と力士の名前を口にして、抑揚よくようも付け

ずに取り組みの感想を漏らしてくる。興味のある人は別だが、ほとんどの客はそれを右から左へ聞き流して、ただ酒を味わう。まあ、音楽がかかっているかないこの店のBGMみたいなものだろうか。もちろん、岩男と話が合う訳ではないので、マスターともそれ以上の関係にはなりえ無かった。たまに来る相撲好きのおじさんなんかとは会話をしているようだが、マニアック過ぎて何を言っているのかは理解できない。相撲で酒が飲める感覚になるには何が必要なのだろうか？酒の肴になりえるのか？まあ、酒飲みには何でもいいのだからうけど、岩男には到底理解できない事だ。確かめた事はないけど、他の常連だっそうだと思う。

店と客の相性なやはりあるもので、酒と相撲以外は興味がないであろうこのマスターの店に居着くのは、やはり変わった人間が多い。まず、女は皆無だ。一見の客ならいるが、常連にはいない。偏った思考は男の特性なのだろうか？まあ、岩男自身はそんなことあまり興味が無くて、ただ美味しい酒が飲めればそれで構わないのだ。ただ、マスターが仕事をキツチリとこなしてくれて、自分の領域に不用意に踏み入れずに酒をついでくれば、岩男に文句はなかった。

ここの氷は最高なのだ。それで十分。その日も、岩男はその店に来ていた。風が強く寒い日で、珍しく初雪が降りそうに思えるほどだった。こんな心細くなりそうな日は、誰もいない冷たいアパートにまつすぐは帰れない。酒で体を温めなければ、とてもいられやしない。

緑のカラーコンタクト（前書き）

老人は色々な物を売っています！

緑のカラーコンタクト

とは言っても、予定がなければ、いつもそのバーに寄っている。会社帰り近くの牛井屋で一人腹を満たした後、家に帰る前にここに来るのが日課で、その時間に行くと丁度カウンターの間が空いているので都合がいいのだ。変なもので、自分の席が出来てくると、そこじゃないと嫌になってしまう。まあ、常連客の来る時間帯や、彼らが座る席は暗黙の了解がなされているから、ほとんど同じ場所に陣取る事は出来る。だけど、たまに一見の客が来ると、自分の席に座っていて、非常に腹が立つ事はある。瞬時に、俺様を差し置いて、お前如きがなんで座ってるんだと、感情が沸騰してしまう。年上だろうと、女だろうとそう思うし、機嫌が悪い時なら尚更だ。

だからと言って、そこでその感情が顔に現れる事はまずない。小心者の岩男に、強い自己主張を求めるのは酷なものであるからして、それとなく違う席に腰かけるのだけど、やはりそこには決まった人が座る事が多いから、彼が来てしまうのではないかと思って一向に落ち着かない。マスターの気分が良くて、そこに座っている客によつては、岩男の事を思つて声をかけてくれる時もあるが、そんな事はめつたにない。別に、この店は岩男を中心に回っている訳では無くて、むしろマスターを中心に回っているのだから、当たり前だ。この店に来たての頃は、自分もよく席をどかされたものだが、それは岩男が彼にとってそう言いやすい客だったからだろう。都合のいい客と言う事だ、今のところ。

まあ、その日は問題なく自分の席に座る事が出来ていて、岩男は肘をつきながらバーボンで喉を痺れさせていた。一人顰め面しながら彼が考えていたのは、その日に会社で上司が大目玉をくらった事、そして、同じフロアーのアイドル、朝比奈楓あさひな かなでの事だった。

上司に怒られたのは、完全に岩男のミスである。大事なプレゼンの資料の一部に不備があり、相手と自分達の立場が逆に示された資料

を渡されて現場に向かった上司は、相当な恥をかいてその場を終えたらしい。岩男から言わせたらミスはミスだけど、そんなの自分で気がつけとは思ってしまふ。けど、もちろん口には出せなかった。全部任せつきりにしてくる上司だから、本当に気を使うし、資料作りは嫌になつてしまふ。たまに、そんな仕事を振ってくるから、こちら準備を整える事が出来ないんじゃないか。最近では自分を差し置いて後輩と上司との関係がいいのも、まったく面白くない。だから、同じ課の女の子達の態度も、自分を見くびってくるように感じてしまふ。だけど、悲しいかな査定を決めるのは上司である彼なのだし、色々と言いたい事はあるのだけどそれを押し殺して謝っておかなければ後が怖い。サラリーマンの弱いところだ。岩男の会社は組織がでかい分、人間関係がうまくいかない会社で日の目を見る事はまずない。小さい所よりも、必要とされる割合が分散されてしまふのだ。嫌なら他がいると言つて訳だ。

そんな事があつた日だったから、酒が進まないわけがない。いつもよりピッチが速いのは否めなかった。マスターもそれに気が付いているだろうが、声をかけてくるほどお人よしでも無いし、むしろ商売、商売、飲んでくれる方が助かるというものだ。岩男としては、うるさい事言ってくるマスターよりも、この店のマスターみたいに黙って出してくれるのは、その時はありがたい。後で、恨みたくなるのだけだ。

その時も間を開けずに、バーボンのロックを五杯は飲んだだろうかとぶん、その四杯目位だと思ふ。

仕事のミスの代わりに、朝比奈楓が頭に浮かんで来た。

彼女は同じフロアーだけど、違う課で働く女性で、年は二十三らしい。容姿端麗、性格冷血、要するに高根の花だ。見た瞬間、自分とは縁のない人間だと分かる、彼女はそんな女であり、他の女子社員とは比べ物にならない存在だ。岩男は課が違う事もあって一緒に仕事をした事も、話した事もなかったが、会社に来れば彼女の事が気にならない事はない。むしろすぐ、自然に目で追ってしまう。明らか

かに、会社のマドンナであり、アイドル。だけど、それに甘んじなくて、媚びないところがまたそそられる。

岩男以外の男性社員だってそう思っているのだ。彼女は彼らの話題の常連はだし、憧れの的であるのは間違いない。自分に自信のある男達は、妻子がいようが、彼女がいようが、よくアタックを仕掛けているらしい。

ただ、会社内の色っぽい噂には疎い岩男も、彼らのその試みが成功したという話は聞いた事がない。そんな事があれば、すぐに広まってしまうのに、一度も聞いた事がない。それどころか、彼女は付き合っている人がいない、と聞いた事があつた。不思議な話だが、そうらしい。

しかし、それがいけない。まったくまずい事だ。要するに、彼女がそんなフリーな状態だからこそ、岩男みたいな男なんかでも、もしかしたらなんて淡い期待を抱いてしまう。傍から見たらバカげた話であつたとしても、岩男みたいな男は一パーセントの可能性でもあれば、黒と考えてしまうのだから仕方がない。むしろ、いてくれた方が期待しなくて済むと、そう考えてしまうのが岩男だ。

こんな日みたいにアルコールが回った頭に彼女の姿が浮かぶと、いつい変な妄想をしてしまう。自分と彼女がつきあつて、そして、裸で抱き合うのだ。もちろん、彼女は自分にぞっこんだし、艶っぽい言葉を投げ中てくる。子猫が甘えるように膝の上で転がる彼女を、岩男は余裕の面持ちで撫でるのだ。時々、尻をたたいたりもする。そうすると、彼女は喜ぶのだ。岩男の頭の中では。

そんな感じだから当然気分がいいのだし、酔いが回っているから本人は気がつかないのだろうけど、一人カウンターでニヤニヤしている彼は、気持ちがいいものではない。簡単に言つと、気持ちが悪い。誰も話しかけやしないのも納得だ。マスターだってそう感じているけれど、口にはしない。

だから、岩男も気がつかないけど、そんな事はどうでもいいのだ。ただ、そうやって妄想を浮かべる事が唯一と言つていい楽しみなの

だから。どう考えても現実味が無いところが、逆にストーリーを立てやすいのだろうか？岩男が酒に酔っていない時に思い浮かべる妄想は、ドラマ仕立てみたいに筋書きがあったりする。もちろん、主役は自分で、ヒロインは朝比奈楓だ。例えば、偶然エレベーターで乗り合わせた時、後ろからはがいじめるのだが、彼女は嫌がらず、むしろ喜びに顔を歪ませて自分を求めてくるとか、偶然帰りが一緒になって岩男が何気なく食事を誘うと、彼女は当たり前のようにいい返事をして、しかも、会社から離れた所で自分の腕をとって寄り添ってきたりとか、突然訪れる彼女のピンチに自分がさっそうと現れて、スマートに、そうまるで007の様ななんなく助けに入るとか、そんなあり得ない話が彼の頭の中では整合性を伴って進められていく。大体、彼女のピンチが何かすら明確ではないし、自分にそれをカバーする実力がない事も分かっているのだけど、そう考えるだけでたまらない。

これを恋と言うなら、そう呼ばれても彼は心の中では否定しないだろう。むしろ、そう呼ばれる事を望んでいるかもしれない。ただ、口にする時は強がって否定するに違いなかった。酔っ払っていたらどう答えるか分からないが、そんな時に彼に声をかける人はまずいないだろう。岩男はそんな男なのだ。

その時も、いい加減酔っ払って、妄想の中でも酔っ払いだしたので泣く泣く重い腰を上げたのだが、マスターに珍しく「大丈夫？飲み過ぎじゃない」と声を掛けられても「れんれん、平気です！歩けますから」なんて言っただけ、よろよろと前に進むと、つんのめって植木鉢にぶつかりそうになった。あまりに酔っ払っている岩男に、店にいる他の他常連も怪訝な視線を送っている。

マスターはそれ以上何かを言わない人だから、岩男がちゃんと財布を取り出すのを確認すると、仕方ないなと言う顔をしながら入口までつきそってくれた。彼は仕事にそつがない。

千鳥足で手を振ってサヨナラする岩男の視線には、ぼんやりとネオンが感じられ、全ての世界がスローモーションだ。今年の冬は例年

よりも厳しい様だけど、そんな冬の寒さも、酔っている体にはそれほどこたえないものだ。岩男は白い息を吐き出しながら、ふらふらと歩きだした。

地下鉄でたった三駅の所にある家までは、歩いてだつて帰れない事もないが、終電までには十分な時間がある。なにもこんな寒い日にわざわざ一人で暗い夜道を歩く事はない。岩男の意識は迷わず通い慣れた駅への道をたどっていた。明日も仕事だ、早く帰らないと。頭がぐらぐらと揺すれながらも、岩男の意識は間違いなくそこに会った。しかし、もうすぐ地下鉄乗り場のある大通りに出ると言う時に、不意にその意識の行き先を遮られてしまった。

路地裏から誰かに声をかけられたのだ。

「ちよつと、その人」

岩男は反射的に振りむいた。酔つ払つて無かつたら、こんな所で声を掛けられても無視するのだけど、アルコールが気分を大きくさせていた。見ると、髭を生やした老人がいる。酔いのせい、彼の顔は二人にダブって見えるけど、確かに年老いた男がそこにいて、自分の方を見ていた。西洋的なのか、東洋的なのか分からない風貌で、街灯の照らし具合のせい、元々肌の血色が良くないのか、老人の顔は粘土のような色をしている。岩男には、それがまるで人形の様に見えた。表情もどこか動きが無い。しかし、彼は口を開いた。「あなた、こつちに来なさい。いいものを見せてあげよう」

白い息を吐きだすその老人は、民族衣装の様なものを羽織っていて、岩男が見ても薄着であり着こんでいないようだったが、寒さに震えている様子はなかった。身なりは汚くはないけど、あやしい感じは十分するし、だいたい場所と時間帯も考えものだ。それに、いいものを見せると言われて、いいものを見た経験がない。

ただ、その老人の口ぶりは、酔つ払つた岩男の好奇心を震わせるのに、また何か面白い事を予感させるに十分ではあった。だから、岩男は導かれるままに老人の後を付いていった。そこで、冷静になれるほど、彼の飲み方は甘くなかつたのだろう。岩男は老人に導かれ

るままに後に続いた。とは言え、付いていったと言ってもほんの五メートルほどである。

老人はアスファルトの路地の隅に、赤ちやけた布をかぶせた木の机を用意していて、その前に岩男を手招きした。

「ちよつと見てごらんなさい」

老人はそう言うつと、徐おもむろにスイッチを押して、明かりをつけた。店の軒先らしく、その庇ひさしに付けられたむき出しの白熱灯が、岩男の目を照らし出した。すると、眩くらしさに目を顰しかめた彼も、徐々に視界を取り戻し、傍らたたずに佇む老人とその机の存在をはつきりと視界にとらえた。そして、思わず声を上げそうになった。

そこには、一對の剥き出しの目玉が、不規則に五組も並べられていたのだ。ケースに入れられた眼球は、明かりに照らし出されて不気味に光っている。岩男は思わず老人を見て顔を引き攣つらせるが、老人は笑みを浮かべるだけで意にも返さない様子だ。声も上げられない岩男をよそに、彼はその眼球の入ったケースを一つ手に取り、「びつくりしなくても、これは作りもの。それよりも、見てほしいのはこの目の部分ですよ」

そう言うつと、それを岩男に渡してきた。恐る恐る手に取ったそれはなるほどよく出来た作り物で、ちよつと眼球が二つ入るくらいの透明なケースの中に納まっていた。角膜の部分がはつきりとブルーになっっている。青い目の眼球と言うところか。

「コンタクトですよ。カラーコンタクト」

老人はそう言うつと、他のケースも渡してきた。赤、紫、茶色、黄色、緑のカラーコンタクトがはめられた眼球の入ったケースを見ながら、流石に岩男も頭ひねを捻ひねった。なんだこれは？正直そう思ってもおかしくはないだろう。

そんな岩男の顔を見て、老人は鼻から抜けるような笑い声を上げながら、肩を揺らした。

「びつくりしましたか？」

「そりゃあ、こんな気色悪いもの見せられたらな！」

「気色悪い？よく見てごらんなさい、綺麗でしょ？」

老人はそう言っつて、そのケースを一つ明かりにかざした。釣られて岩男もそれを覗き込む。目と目の間に赤い明かりが照らし出して、岩男は確かに綺麗だと思っつてしまった。

「うん、まあ」

岩男がそう言っつて軽く頷くと、老人は耳元でひそひそと声を出した。老人の声は、岩男の心にスツと染みてきた。

「あなたは、今人生に満たされていませんよね？そうじゃありませんか？」

深く刻まれた横筋の皺しわを額に浮かべる老人は、岩男の心を見据えるような眼を向けてきた。岩男は自分の待っつていたコンタクトを光にかざしながら、老人に横眼を向けた。そして、酔いのせいもあるが、岩男は自然にそれを受け入れると素直に頷いた。

いい買い物でした(前書き)

さあどうなるのでしょうか？

いい買い物でした

老人は言葉を続けた。

「このコンタクトをつけてごらんなさい。あなたの望む事が起きるはずですよ。満たされていないあなたに、きつと何かが起こるはず」

老人の言葉を受け、岩男は疑いの目を老人にぶつけた後、手の持っていた眼球ケースに視線を向けた。

「嘘だあ」

思わずそう声を出した。カラーコンタクトをつけて、いったい何が変わると言うんだ。そんな話聞いた事ないし、大体この状況がもうありえない。こんな怪しい言葉に惑わされるなんて、いくら酔っているとは言え引つ掛かるほど馬鹿では無い。なので、岩男は怪しさを感じて、緩やかにだが老人から離れようと体を逸らして、立ち去ろうとしたのだ。

すると、老人が素早く反応した。

「あなたの持つているそれ！」

老人は声を張り上げ、岩男は思わず自分の手を覗き込んだ。彼はケースをしっかりと握ったままだったのだ。岩男はすかさず、老人にそれを差し出したが、老人は落ち着いた様子で、顔と同じような血色の悪い色をした細い手で、弱弱しく岩男の持ちケースを指さしてきた。体を固まらせる岩男の耳に、甲高くしゃがれた声が響いた。

「これはヴァイオレットカラー。あなたの希望を導く」

俺の希望を導く？この紫色のコンタクトレンズが？真っ直ぐに自分を見つめてくる老人の言葉が、思いがけず岩男の心に響いた。

すると、老人は畳み掛ける様に、違うケースを岩男に差し出し、持っていた紫色のコンタクトのケースと取り換えた。

「これを見て！ルビーカラー。あなたの欲望導きます！」

岩男は真っ赤な眼球を持たされたかと思うと、導かれるままにそれを眺めた。透明な眼球に、透き通る様な赤いコンタクトがはめら

れている。これが、俺の欲望を？どうやって……。驚きと好奇心で黙ってしまった岩男に、老人は黄色の眼球のケースも、恭しく目の前にかざしてきた。

「これはイエローカラー。あなたの本能を導く。どれもこれもあなたが望む世界を見せてくれるはずですよ。本当ですよ」

老人の表情はそれほど変わらないが、その言葉には力が込められており、岩男には真実味を帯びているように感じられた。自分の望む世界を見せてくれるだなんて、荒唐無稽ではあるのだけど、老人の顔を見ているとそう信じてしまいそうになる。

しかし、コンタクトをつけるだけで、そんな事起こるか？

当然の疑問が岩男の脳裏をかすめたが、老人の言葉に嘘を感じられないのが不思議であり、その謳い文句には少なからず心が動かされていた。不信感よりも好奇心の方がうわまっていたのだ。これらのコンタクトをつけたら、いったいどんな世界が見えるのだろうか？一つ言えるのは、老人の言っている事は、うつぶんが溜まっている淀んだ心持である岩男が、今一番求めている事であるのは間違いない。だんだんと酔いが増してきた頭の中で、その興味は徐々に膨らんできた。気分が乗ってくる。岩男は口元を歪めながら、老人に座ったような目線を送った。

「それで、じいさんは俺にどうしてほしんだ？」

岩男がもつれた口調でそう言うと、老人は微笑みながらこくりと頷くと、しゃがれた声で岩男の手からケースを取り上げた。

「これ、一対五万円はどうだい？」

岩男は目を丸くして、体を震わせた。五万？何言ってるんだ、このじいさんは？頬の熱が一瞬飛んでしまい、俄かに体が震えた。ぼつたくりもいとこころだ。

岩男は否定を強調させるように、顔の前で手を振った。

「あほか」

そう言って、今度こそ立ち去ろうとすると、老人は岩男の腕を掴み、慌てて声をかけてきた。

「わたしや、お客は選んで商売する方なんだ。嘘は言わない、つけてみなさいよ。あんた、今の人生に不満なんだろ？もつと心沸き立つような時間を過ごしたいんだろ？あんたを見てすぐに分かった。これをつけたら、それがかなう。間違いない」

「そんな訳の分からんものに、五万も出すほど馬鹿じゃない！他をあたつてくれ」

岩男がそう言って、老人を睨むと、彼は少し考えを巡らすように眼を泳がせた後、何かを思いついたように手を打った。そして、岩男に縋りつくように近寄ると、耳元でゆっくりと口を開いた。

「じゃあ、試してみたらいい。そうじゃ、好きなのを試しに付けてみて、それで納得したら、後で代金を払ってくれたらいい。そうしたらいい！」

老人はそう言って、納得したようだったが、岩男の方はそうはいかなかった。今になってこの老人にのこのこと付いてきた事を後悔してきていたし、金の話が出た時点で面倒臭い事になりそうな予感はしていた。それに、タダより高いものはない。

ふらふらしている程酔っているとは言え、この頃には岩男も若干の冷静さを持ち合わせていた。

「そんな怖いもん、試す気になれないよ。金もらつても嫌だね」

岩男が顔を顰めながら、ふらふらと老人から体を話すと、酒臭い息をたつぷりと老人に吐き出した。すると、老人はめげる様子もなく、もう一度岩男をテーブルの上に導き、ずらりと色違いのコンタクトの入ったケースを並べると、それらに恭しく手をかざした。

「どれでも好きなものを持って行っていい。あなたにあげよう。一個だけ選んで、付けてみたらいい」

老人は、そう言って岩男の顔色を窺ってきた。彼が自信ありげに体を逸らしているのがなんとなく腹が立つが、綺麗に机に並べられたケースを見ると、やはり気になってしまう。彼が金の話さえ出してこなかったら、何の迷いもなくつけてしまえそうだ。暗がりに照らし出された色とりどりの眼球を眺めると、自分の眼につけなくて

も、オブジェとして部屋に飾^{かざ}っても御洒落^{おしゃれ}かもしれない。まあ、見せる人なんて誰も思い浮かばないけど、自分で眺^{なが}めていても面白いかもしれない。きっと、部屋の雰囲気も変わるだろう。

いや、単純に自分の眼につけても、顔の印象が変わるくらいはするだろう。どんな色を付けたって、派手な目の色になるのは間違いないのだから。仕事に行く時は考えられないとして、休みの日につけてみたら面白いかもしれない。誰も気がつかないだろうけど。

だが、老人の言うような、世界が変わるほどの事が起こるとは想像出来してもいなかった。そんな事信じられないし、いくら大金を積んでもコンタクト如きにそんな力があるはずがない。まあ、くれると言う様なものだから、貰^{もら}っておくだけ貰^{もら}っておくのもいいかもしれない。

そんな事を考えながら、岩男が老人の様子を窺^{うかが}っていると、ふと、老人の上着の胸ポケットから透明なケースが出ているのが目にとまった。老人は粘土色の手に白い息を吹きかけながら、自分の自慢の品物を岩男が早く選ばないかと待ち構えているようだ。

岩男はゆっくりと上半身を持ち上げると、うつろな目で老人のポケットからはみ出ているケースを見ながら、手袋をはずしながら口を開いた。

「じいさんのそれ」

「え？」

老人はとぼけたような声を出したが、岩男は構わず言葉を続けた。「いや、胸ポケットのそれ。それもコンタクトなんだろう？ちよつと見せてよ」

すると、老人はそれをポケットの奥にしまいこもうと、慌てて手を添えるそぶりを見せたが、ゆっくりと顔を上げながら岩男と目を合わせると、口元を歪めながら困ったような顔をした。

「これですか？いや、これは」

老人のしまったという気持ちだが、酔いのまわった岩男にも手に取るように分かった。それが、岩男の心を刺激しないわけがない。

「何それ？何、何、何？ちょっと見せるくらいいいでしょ？自分で俺が好きなの選んでいいって言ったじゃん」

岩男は勝ち誇ったような顔を見ると、老人の胸ポケットに指を突き立てた。

「俺はこれが気になる。見せて」

すると、老人は口ごもりながら、小さな声を出した。

「いや、これは、勘弁して下さい。その、ちょっとねえ」

その様子がなんとも苛立たしい。言いかけた事を途中で「やっぱり言わない」と言われている様なもどかしさで、岩男の気持ちが悪くなりそのケースに注がれてしまった。

「いいから見せてよ。別に、見たからってどうにもしないって」

岩男はそう言って、しつこく指を突き立てた。すると、老人は少し考えた後、おずおずとそのケースを胸ポケットから取り出した。

そのケースにはやっぱり、眼球が入っているようで、岩男の視線はそれに集中していた。老人の粘土色の手がそれを扱う様子は、他のものを扱う時とは違うように見える。

なんだ、このケースは？コンタクトだろうけど。隠しているだなんて、きつと特別なものに違いない。さてはじいさん、これだけは取られたくないと思つて隠していたんだろうな、きつと。

岩男はうつすらと笑みを浮かべながら、何食わぬ顔で老人に手招きした。そして、まだ渡し渋っている老人に、手を差し出した。

「もつたいぶるなよ」

老人はそう言われて、渋るように顔を揺らしながら、ゆっくりと岩男の手元にケースを差し出した。

すると、岩男は勢いよくそれをふんだくった。老人は驚いて体を震わせたが、目を丸くして岩男を見ながら、声をかけてきた。

「見るだけですよ。ケースから出したら・・・」

老人がいい終わらないうちに、岩男の手は動いており、しめしめと口元を歪めるや否や、得意な顔をしながらケースを開けてしまった。そして、老人が「あっ！」と声を洩らすのも構わずに、少し老

人から距離を取ると、有無も言わずに片方の目にコンタクトをはめ込んでしまった。

「ああ、そんな」

老人が力のない声でそう言うのを聞きながら、さっさともう片方の目にもコンタクトをはめ込んでしまうと、岩男は老人に向き直った。

「試すだけ、試すだけ。じいさんの言う様な事が起こったら、金持ってきてやるから。この辺にいるんだろ？」

すると、意外な事が起こった。話を聞かずに勝手な事をした岩男に、老人はコンタクトを取り返そうとも、岩男に抗議をする事もなく、もうその事には興味がない様子で岩男の顔を見ていた。

そして、彼は力無く肩を落としたが岩男にしゃがれて、甲高い声をかけてきた。

「それは、緑のコンタクトです。その・・・、あまりにも特殊だからお勧めしなくなかったけど」

言い含めた様な話しぶりだったが、岩男は有頂天に答えた。

「それって、特別って事だろう？」

「え？ええ、まあ」

老人はそう言つて、ため息交じりに頷いた。そんな老人の顔が悔しそうな表情に感じられて、岩男は少しだけ優越感を抱くと、嬉しくなった。特別な物をくれると言うのだから、案外拾いものなんじゃないかと思いいながら老人を見ていると、彼の気が変わらないうちに離れた方がいいと思つた。時間が経つと、惜しくなつて変なこと言つてこないとは限らない。

すると、やっぱり老人が話しかけてきた。

「それはセットになっていて、もうひと・・・」

そら来た！岩男は慌てて老人の言葉を遮ると、有無の言わず老人の手を取り力強く上下に振つた。

「いいから、いいから。分かった、分かった。サンキュ　！ありがとうー！」

老人はされるがまま、岩男に腕を乱暴に扱われたが、文句を言う事もなくそれ以上口を開く事はなかった。見た感じ、その顔は無表情だが、肩の荷が下りたように穏やかにも見える。

一方、岩男は老人が煩い事うるさを言つてこないのをいい事に、彼から足早に離れると、振り返りもしないで歩いて行つた。老人から顔を背けた途端、いいもの貰つちまつたとほくそ笑むのを抑えもしないで、元来た道を歸つて行つた。

一人その場所に残された老人の表情は窺うかがえないまま、岩男が立ち去ると同時に、その場所を照らしていた明かりは消えた。

コンタクトをタダで手に入れ有頂天うちやうてんに顔を歪ゆがませた岩男は、ふらふらとしながらも駅に向かい、通い慣れている地下鉄に乗りこんだ。終電の近いこの時間帯にしては、やけに空いていてすぐに席に座れた。外の寒さが嘘の様に暖かい車内にいると、自然と瞼まぶたが閉じてくる。酔いのせいもある。しばらくしないうちに、岩男はうとうとしだして、気がついたら寝ていた。

目が覚めると、自分の駅を四つも乗り過ぎしているではないか。慌ててホームに飛び出ると、真ん中に設置されているベンチに腰かけた。またやってしまった。寒くなると、いつも乗り過ぎしてしまう。アルコールと寒さと電車は、岩男にその答えを導いてしまうのだ。三駅と言う中途半端な距離がそうさせているのかもしれない。

気を落ち着かせようとスーツの胸ポケットから煙草を取り出そうとして、その手を止めた。地下鉄のホームで煙草を吸うなんて、何慌てるんだか。しかし、気を静めるのに、煙草はとても助かるものだが、外に出るまで我慢しておかなければならぬだろう。幸い、電車がすぐにやってきたので、今度は寝ないようにと思いながら岩男は乗り込んでいった。

出社したら(前書き)

何が起こるのでしょうか？

出社したら

次の日の朝、岩男は寒さで目が覚めた。

気がつくと、布団はすっかり自分から遠いところに行っており、自分もトランクスにＴシャツ姿なのに気がついた。傍に誰かいたら、優しく布団もかけ直してくれようものだけど、一人暮らしの岩男にはとてもじゃないけど叶わぬ事だ。ベットの周りには、漫画本や雑誌、ゲームのコントローラーや食べかけの菓子袋かしぶくろなど物が散乱しており、ほぼ足場がない状態だ。そして、玄関からベットに続く様に昨日来ていたコートやらスーツの上着、そしてズボンが落ちていた。脱ぎ散らかしたスーツがそのまま床に置かれているのを見て、大きく溜息をつき、誰か片付けてくれよと思いつながら目を擦こすると、自然な動きで目覚まし時計に視線を送った。

「まずい!!!」

岩男はそう叫ぶと、慌てて置き上がって風呂場に駆け込んだ。なんと目覚ましかけなかったんだ!と自分を罵倒はじつしながら、今日は朝から会議がある事を思い浮かべて、慌てて身だしなみを整えだした。ぎりぎりの時間だ。むしろ、目が覚めた事が奇跡的と言える。

岩男は起ききれない頭をフル回転させると、ぼさぼさの頭を水で適当に整え、リステリンで口を濯ゆすぐと、大急ぎでハンガーから新しいスーツを引っ張り出して着替えだした。床に転がった皺だらけのスーツでは出社できない。ネクタイは電車で結ぼう。飯も食う暇がない!

岩男はとりあえず身なりを整えると、玄関に転がっていたコートを手に取り、鞆を忘れそうになりながらも、玄関から飛び出して行った。

玄関を開けた途端、前を開けたコートの隙間に冷たい風が差し込んできて、頬を突き刺すような吹き下ろしに、岩男は体を震わせた。寒いはずだ。外には少し雪が舞っている。今年の初雪かもしれない

が、今の岩男にそんな事をゆっくり考えている時間は無かった。脇目も振らず駆け出すと、白い息を吐き出しながら地下鉄の入口に駆け込んでいった。

急いだ甲斐もあり、ギリギリの時間で何とか出勤には間に合った。岩男の勤めている会社は新宿の高層ビルの一つで、近くにある都庁にも負けないほどの高さのその建物には、岩男と同じような会社員が数えきれないほどたくさん出入りしている。この時間ほど異様な光景は無いかもしれないだろう。年齢もバラバラの奥の男女があらゆる方向から一つの建物に集約される様子は、もしかしたら見ていて面白いかもしれない。

まあ、岩男はそんな事興味もなかったし、今はそれどころではなかった。急ぎ足でエレベーターに駆け込みながら、一緒に乗ってきた同僚らと軽い挨拶をかわしながら、自分のフロアーに向かった。岩男は髭が濃い方じゃないからまだ助かっていたが、アルコールの方はまだ少し残っている気がした。公衆が気になって仕方が無くて、エレベーターの中で気がつかれないかとびくびくしていたが、周りの人間はそれほど気にもしていないように見える。まあ、彼らも本心ではどう思っているか分からないけど、すぐ口にしてこないところを見ると、取り敢えずは大丈夫みたいだ。だから、岩男は自分のフロアーに降りると、走ってすっかり熱くなつた体と息を整えて、何食わぬ顔をしながら自分の部者に向かった。

着くとすぐに朝礼が始まる時間だったので、お茶も飲めないままそれに参加しなければならず、少しも落ち着かないままだった。ただ、運がいい事に課長の話はいつもより手短に終わった。まあ、会議があるからなのだが、岩男は会議の準備よりもまず、お茶を汲みに行つて、給湯室で立ちながら一息ついた。飲み過ぎたせいもあるが、まったくやる気が起きない。いつもの事ではあるけど、モチベーションを上げる方法が未だに掴めていない。情けない事だけど、最近は、週二日気力のある日があればいい方だ。それでも自分の仕事がこなせるのが、ここで働くメリットと言えた。

世間では不況で厳しいしせいご時世とは言え、この会社の様に大きいと、そんな怠け社員でも抱えていけるゆとりがあるのだ。

こんな日は十五分はお茶を飲みながら、デスクの上で何も考えない時間を取りたいものだ。しかし、会議の時間は迫っていたので、岩男は無い力を振り絞ると、重い頭を揺らしながら自分のデスクに向かい、会議の資料を手を取った。

会議は全くつまらないけど、この三十五階の会議室からの眺めは素晴らしいものがある。新宿からの東京湾に至る景色が一望でき、そびえたつビル群の屋上の風景や、眼下に広がるに雑踏も、そこで蠢く虫の様に小さい自動車や人もなんとか確認できる。すぐ南に広がる代々木公園を見れば東京にも意外に緑があると分かるし、それと同時に本当に東京ってところは建物に埋め尽くされていて、天高く延びるガラス張りの大木が密集するジャングルであり、世界有数の都市だと言う事を再認識するだろう。

それに、空が澄み切っていて西の彼方に連なる山々にガスが掛かっているなければ、富士山の白い頭を見る事も出来るし、南に目を向ければ遠くのお台場の大きな観覧車や、目のいい人だったら横浜のランドマークだつてうつすらと見る事が出来る。この平野に建物が全く無かったら、いったいどんな景色が広がるのだろうか。

岩男は会議に出席するたびにいつもそう思う。

この会議室のつくりからしたら、窓際は末席にあたる。そして、いつもその席は岩男の場所になっていた。やる気がないと自然とそうなってしまうのだろうか。誰もそんなこと気にもしない様子だし、今日だって相も変わらず岩男はその席に座り会議は始まった。

課長が司会となって、会議は淡々と進められていく。岩男は話を聞くだけの事が多いし、意見を求められることは無かったけど、それでも普段なら会議の話はちゃんと聞いていたし、どんなに綺麗な景色だとしても、窓の外に見とれたりなんかする事は無かった。それが、仕事だという認識はもちろんあるわけで、自分の受け持つ仕事にも影響する訳だから話ぐらいいは真剣に耳を傾ける。

だけど、今日はどうしても外に目を奪われてしまった。

それは、雪が降っていたからである。

去年も今頃降っただろうか？いや、暖冬、暖冬と騒がれていたから、もう少し遅れていたかもしれない。年を越して、二月も半ばの頃だったろうか。岩男が雪国の生まれではないからかもしれないが、雪が降ると妙に嬉しく感じてしまう。そんな自分は子供っぽいのかもしれないけど、それは自然な衝動とも言えた。雪を研究する事だけに一生を費やす研究者もいる訳だし、非現実な世界を感じるのに雪ほどおあつらえ向きな気象現象は無いだろう。人類が幻想的と考える自然現象は、流星群や日食、オーロラだろうけど、それは、本当に特別な時期や場所に限定されてしまう。自分の目でリアルに見る事は難しいだろうし、ましてや触れる事なんて出来やしないのだ。その点、雪は身近な部類だろう。交通機関に多大な影響を及ぼすんだらうけど。

しかし、よく考えてみれば、こんな高い所から降る雪を眺めるなんてした事あまりないかもしれない。この会社には何年も務めているけど、今日みたいに目を奪われるほど眺めた事は記憶にないと思う。雪が降る日が数えるほどしかない事もあるけど、今日の雪は今まで見た事もないくらいキラキラと輝いていて、まるで、雪の結晶一つ一つがくつきりと見える。窓一面にダイヤモンドダストが起きているかのように岩男には見えた。今が会議中であるという事も、時間が進んでいく事も忘れてしまいそうだ。

この会議室にいる皆も、こんな綺麗な雪が降っているのには気が付いているのだらうけど、会議に集中しているせいか窓の外に目を向ける人間は一人もいなかった。まったく気にも留めていないようだし、そもそも窓に目を向ける人間がいない。まあ、会議中なのだからあたり前とは言え、こんなにも美しい光景に目を向けられないだなんてもつたないや、そんな事を思いながらも岩男は間が出来る度に、窓に目を向けた。

雪の粒が少し大きくなったらうか。さらさらとした粉雪になりだし

ており、それが少し灰色がかった空からハラリハラリと絶え間なく降り続いている。そのさまは、窓一枚隔てているせいかまるでスクリーンの世界を覗いているみたいで現実味がなかった。部屋に暖房が利いていて、寒さを感じないせいかもしれない。

これは本格的になつてきた、岩男はそう感じて同僚達の横顔を窺ったが、彼らは会議に集中しているのか、全く反応を感じられない。彼らだって遠くから来ているものもいるし、これから取引先に行くものだっているだろうに、まったく意にも介していないようだ。

世間では、交通機関が乱れたり、転んでけがする人もいるのかもしれない。毎年そんなニュースが流れているし、季節の風物詩的な扱いだ。昔は喜ぶ子供達の映像館ががよく流れたけど、今はどうなのだろう。まあ、きつと喜びやしないのだろうけど。

まあ、今日は外に出る予定はないし、地下鉄通勤である自分は帰る時だけしか関係ないので、まるで他人事ひとことではあった。しかし、少し雪が降っただけで、機能がマヒしてしまうこの街は、埃ほこりや塵ちり一つで動かなくなる精密機械そのものだ。そのうち、風が吹いただけで動かなくなるんじゃないか、そしたら滑稽こっけいなものだな。

そんな事を考えてにやけ顔の岩男は、なんとなく上司の視線を感じて、慌てて窓から視線を逸らした。しかし、上司は特に何かを言う事もなく、会議を滞りなく進行させているようだ。

岩男の頭の中には会議の内容が全て、正確に入ってはいなかったけど、ほかの社員ならいざ知らず、自分にとってそれは重要じゃないのは分かっていて。結局、今日の会議はそんな内容なのだ。自分の仕事内容に関わりがあるから出席している訳では無くて、何となく頭数に入っていて、なんとなく聞いていた方がいいだろう、と言う事で一緒にいるのだから、巖いだつて自然とそんな態度になつてしまふし、上司や同僚だつてそれは分かつている。しかし、はつきりとした事を表さないのが、まあ、日本的と言える。岩男はそちらの方が気分が楽だし、きつと彼らだつてそうだろう。

だから、また上の空の様子で窓の外に目を向けると、岩男は声にこ

そ出さなかったが、大げさに口を開いた。

なんだか、さつきより雪の粒が大きくなっているように感じられたのだ。粉雪から、細雪に代わっている。それに、雪が落ちる間隔と言うのだろうか、それが短くなっている時がするし、全体的な量も増えた様な気がする。遠くに目をやると、雑居ビルの屋上や、そのすこし先に見える住宅街の屋根とかがすっかり白く変わっているし、車が行き交う大通りもすっかりアスファルトが見えなくなっているみたいだ。

思ったよりも積もるのかもしれない。朝の天気予報なんて見ている暇なかったけど、昨日も一昨日もニュースで今日雪が降るなんて予報だしていなかったけどなあ。まあ、天気予報は予測なのだから、必ずしも当たらないとは言え、最近の精度は目を見張るものがあるのに。誰も分からなかったのだろうか？気象庁や天気に関わる人間はごまんというだろうに。

外の雪は別に吹雪く事もなく、ただ重力のまま落ちていているようなものだけど、確実にその量が増えているようにみえる。牡丹雪ぼたんゆきと言うのだろうか、見る見る内に一円玉サイズの雪の粒が十円玉サイズになっ

見えない雪がふってきた！（前書き）

誰にも見えないよ！しかし、自分にだけは見えてしまう、そんな雪！

見えない雪がふってきた！

岩男はこの段階になって、流石に皆も気が付いているかと様子を探ったが、誰も窓の外になんか目を向ける者はいなかった。ただ一人、岩男だけが雪を気にしているようである。岩男は首を傾げながら同僚達を窺ったが、彼らは窓の外はおるか、岩男の存在すら気にしてはいないようだ。

それはそれで、悲しい事ではあるけど、岩男の中では別の気持ちが大きくなっていた。

こんな雪が降るなんて思いもしない驚きを、すぐに分かち合いたい気持ちで満たされてしまったのだ。当然、会議中なので隣の同僚に話しかける事も出来ないからしかたないけど、きつと、岩男が彼らに窓の外を見るように促したら、驚くだろうし、困惑するに違いないだろう。嫌な顔をする人の方が多いだろうが、一人くらい自分みたいに心沸き立つ人もいるかもしれない。

その顔を想像したら、なんとなくにやけてしまう。すると、その顔のまま上司と目が合ってしまった、彼の眼が一瞬細くなったので、岩男は慌てて用意された資料のページをめくり、険しい顔を作った。急に心拍数が上がってきて、居心地が悪くなってしまふ。気をつけなければ、あくまで仕事地中なのだ。

しばらくして、なんとなく上司を窺うと、彼はもう岩男の事など見てはいなかった。ほつと、心の中で胸を撫で下ろし、息を吐き出す。昨日すっかり怒鳴られた手前、何となく居心地が悪い事もあるが、気が抜けてるんじゃないかと責められたらたまらない。たまに、そんな気の抜けたような失敗をしてしまふのが、岩男の今ひとつ閉まらなくて、しつかり認められない理由と言えた。ここぞという場面で、外してしまうのだ。それは、小さい頃からそうであるが、理由なんて本人にも分からない。

風が吹くままな生き方をしているからだろうか。

しかし、昨日の事があるからではないけど、今日はそれほど忙しくはなさそうだから、その点でまだゆとりがある。来週になればそんな事も言っていられないけど、まあ、嵐の前の静けさと言ったところだ。気の抜けたところや、やる気が出ないのはそのせいかもしれないけど、来週になつたつてモチベーションは一緒なのだろうから、結局は岩男次第な訳だ。風さえ吹けば、やる気にもなるかもしれない。

そんな岩男だったが、会議に参加する機会がないせいか、誰かの報告に耳を傾けるのも飽きてきた。話を聞いていないので、まったく何を言っているのか理解できないから、はつきり言つて詰まらないのだ。だから、また、集中が切れ、肘をつきながら、なんとなく窓の外を見た。

その途端、彼は思わず目を見開いてしまった。

いつの間にか、さつきまで十円玉くらいだった雪が、リンゴほど白い塊となつて空から落ちていたのだ。

こんな大きさの雪が降るなんてありえない！

だが、それは窓の外に広がる灰色の空から、まんべんなくゆっくりと舞い落ちており、次々に降り積もっているようだ。

しばらく様子を見てみると、次第に雪の塊は大きくなり、リンゴから大きめのグレープフルーツ台ほどまで大きくなっていった。

それを見て、岩男は思わず席から立ち上がってしまった。そして、声も出せないで、眼を見開きながらこの驚きを皆に伝えようと振り返った。

しかし、同時に会議も終わつたらしく皆は一斉に立ち上がり、思い思いに立ちあがってしまったので、彼はタイミングを奪われて声もかける事が出来なかった。当然のことながら、誰も岩男の事など気にもしていない。もし、会議中に彼が立ち上がつて声を出していたら、間違ひなく注目されていただろうけど、その惨事はまのがれたようだ。本人は、その事は気にもしていない様子ではあったが。

なので、岩男の行動は不自然ではなかったにしろ、その後に行つた

事は明らかに変であった。皆がぞろぞろと入口から外に出ていくのに、岩男だけは残って会議室の窓につきながら、外を眺めていたのだから。

ただ、その気持ちも分からなくはない。

何しろ、見渡す限りの土地を雪がすっかり覆っていて、いつもの東京の面影が全くなかったからだ。とめどなく走り回っている車の様子や、数え切れないほど蠢めしいている人の様子も全く見る事が出来ない。さつき見た雑居ビルや住宅街など見る影もないのだ。もう、ビルの四階ほどに雪が積もっていて、多くの建物が雪に埋もれているのが見て取れる。それに、雪は止む様子など露つゆほども感じられず、むしろその強さを増しているのだ。

信じられない光景に、岩男は自分の目を疑った。だから、頭で考えるより早く体が反応して、思わずまだ会議室に残っていた同僚の一人に声をかけてしまった。

「下がえらい事になってるよ！雪で！」

普段岩男とあまり話した事のないその同僚は、訝いぶかしげな顔をしながら傍に寄ってくると、岩男と同じように窓を覗き込んだ。

「雪がどうしたって？」

「だから、見ればわかるだろ？雪がこんなに積もるなんて！」

岩男は興奮しながら、唾を飛ばしながらそう言った。こいつはなんでこんなにも反応が薄いんだ？こんな状況になっているのに！しかし、同僚は首を傾かしげながら、まじまじと岩男の顔を見てきた。まるで、奇妙な者でも見る目つきだ。

「何言ってるの？雪なんて降って無いぞ」

同僚のその言葉に岩男は絶句せきした。どういう事だ？こいつには雪が見えないと言うのだろうか？建物が埋まってるんだぞ、この東京の！馬鹿にしたような眼をしゃがって。

岩男は興奮を隠しきらずに、声を荒げた。

「だから、雪が降ってるだろうって！見てみるよ、粒もでかいし！」
岩男は拳を握りしめながら、体を震わせると、その同僚を睨みつけ

た。本気の言葉であるのはその顔からピンピン伝わってくる。

しかし、相手はただ困っていた。普段、それほどの付き合いは無くても、岩男がそんなへんてこな冗談を言っつてこない事は分かっていたし、だいたい自分から喋りかけてくる事も珍しい。

雪？粒がでかいって何だ？

同僚はすぐに心配そうな表情を浮かべた。

「何にも見えないぞ。疲れてるんじゃないか？大丈夫？」

同僚はそう言っつて、岩男の顔を覗き込んできた。ストレスが貯まり過ぎたのだと思っつたのだ。岩男の心情を図ると、その答えが浮かんできたのだらう。哀れみさえ浮かんでる。

岩男は何かを言おうとしたが、彼にそんな顔をされて言葉にならなかつた。なので、息をのみ込むと、顔を歪ませながら顔を逸らすと「いや、いいんだ」と言っつて、手を弱弱しく上げた。

そんな岩男の様子を見て、その同僚は困惑したような顔をしながら、何も言わずに会議室から出ていっつた

一人取り残された、岩男は弱弱しく窓の外を見た。

ちよつと目を離れた隙に、雪はスイカくらいの大きさになつている。音は聞こえないけど、きつとすごい音を立てて落ちているはずだ。あんなのが人に当たれば、怪我どころじゃすまないはずだ。

しかし、分厚い窓から見る景色だから現実感がない。いや、ない訳ではないけど、そんな簡単には受け入れられない光景が広がつているのだ。見渡す限りの銀世界であり、寒さを感じないからか、いつまでも見ていたくなるほど幻想的で、大変な事態だとは思つても目が離せなくなつてしまふ。東京がまるで東北の豪雪地帯の様になつて覆われてしまつている。いや、豪雪地帯だつて、ここまでは降らないだらう。信じられないけど、もう十階建て以下の建物は見えなくなつているのだ。首都高はすっかり覆われているし、見渡す限り遠くの方まで白く埋め尽くされている。

これは事件だ！岩男は直観的にそう感じると、徐々に自分を取り戻していっつた。急に体が熱をもつたかのように、機敏に足を動かすと、

すぐに自分のフロアーの戻った。そして、窓際近くにいた人に声をかけた。岩男より年が若い、派遣の女子社員だ。

「君、外に雪が降ってるの見える？」

すると、彼女は岩男に無表情に顔を向けてくると、冷静に答えてきた。

「見えません」

首を振って、すぐに岩男から目を逸らした。そして、それ以上何かを言うては来なそうだった。まるで、相手にしたくないみたいだ。

岩男はしばらく彼女を見ていたが、すぐに諦めてその場から立ち去った。同じ課の女性は、皆そんな態度をとってくる。岩男が話しかけると、いつも無表情なのだ。この会社はそんな女性ばかり集まってくるのか、この課の雰囲気がそうさせるか知らないが、皆お難くて男を寄せ付けない感じだ。感じが悪いったらないのだ。とは言え、雪が見えていないのは間違いなさそうだった。

岩男は信じられない面持ちのまま、窓の外に目線を映して、またびつくりして思わず声をあげてしまった。

何と、二つの雪がくっついた雪だるまが降ってきているのだ。かなりの大きさの雪だるまが、いくつもいくつも降ってきては地上を埋め尽くしている。中には三つ直列で連なったものや、水分子の様な形をしたもの、それに鉄アレイみたいな形をした大きな雪の塊も落ちている。岩男はガラスに顔を張り付けて、それらが下に落ちるまで目で追った。

それを見ていた女子社員は、明らかに挙動不審な岩男を怪訝そうな顔で眺めて、あからさまに体を震わせた。たぶん、気持ち悪がったのだろう。だからか、窓にへばりついている岩男をその場に残してどこかに行ってしまった。

一方、岩男は彼女の事などすっかり頭に無くて、ただ驚愕で頭が真っ白になって、ただ落ちていく雪だるまを目で追うしか出来なかった。こりゃ、仕事どころではない。とにかく、外に出てみなければ

ば！そう考えると、足が反応してすぐに駆け出していた。慌ててエレベーターに乗り込み、早く早くと妙に焦りながらも地上階まで降りていくと、一目散に吹き抜けの広いエントランスがある正面玄関まで向かった。そこには、自分の会社の人間はもちろん、来客者も多数いたが、岩男は脇目も振らず駆け出した。

そして、受付嬢の目の前に立ち尽くすと、目の前の光景に思わず手で口を覆ってしまった。そこには、大きなガラスの扉が六枚で構成されている、二十人がいつぺんに通れるほどの入口があるのだが、それがすっかり雪で埋まっていたのだ。岩男は瞬間的に、入り口がふさがれた！と感じたが、他の人間は構わずそこから外に出ていき、雪の中に突き進んでいくし、外からも人が入ってきてはいる。岩男にはドアが開閉されるたびに入り込んでくる雪が見えたので、自分が外に出る気にはなれなかった。周りを見渡しても、そんな異常事態に気が付いている人はい無くて、パニックを起こしている岩男だけが一人浮いている感じた。

美女登場！（前書き）

自分と同じ物を見てくれるそんな存在ってとても大切ですよね！

そして、それは恋の予感を感じさせます！

美女登場！

可愛らしい受付の女性からの不思議そうな視線を感じて、岩男は汗だくの自分に気がつくのと、慌てて彼女の所に駆け寄った。

「ゆ、雪だよね?!」

岩男はそう言つて、すっかり雪でふさがっている玄関を指差した。すると、受付嬢は驚いたものの自分の胸につけている名札を見ながら、苦笑いしていた。

「私は、ゆすき 柚木です」

彼女はそう言つて、岩男を馬鹿にしたような眼をしてきた。噛み合わない会話に、岩男は一瞬キョトンとしたが、意味が分かると顔を赤らめてその場から離れた。そして、叫び出したいのを押さえながら、ゆっくりと元来た方に戻つていった。

いったいどうなっているのだろうか？ 誰にも見えていないみたいじゃないか！

理解出来ない事態に困惑を隠せないまま、岩男が自分の部署のあるフロアーに戻りエレベーターから降りてみると、窓の外はもうすっかり雪に覆われており、その階からは何も見えなくなっていた。岩男はパニックになりながら、ある事を思いつき、またエレベーターに乗り込んだ。

屋上に行くしかない！

真つ白な頭の中にはそれしかなく、すっかり冷静さをなくした岩男はただ屋上を目指した。直接屋上に通じるエレベーターなどは無いが、最上階から階段を使って屋上まで行く事が出来る。ただ、普段はドアに鍵がかかっているはずだ。

しかし、今の岩男にはそんな事関係なかった。

不安と恐怖心が心を覆っていたから、何としてでも上に上がらなければ、とそれだけしか頭になかったからだ。だから、最上階までたどり着き、ドアの前に立って初めてその事に気がついた。

しまったと思いながらも、とにかく開かないものかとノブに手をかけた途端、ドアがゆっくりと開いた。

鍵がかかってない!?

どうして?と思う前に岩男は駆け出していた。とにかくラッキーだ。汗が噴き出るのもかまわずに、白いペンキを塗られた鉄製の階段を駆け上って一番上までたどり着くと、半分祈りながら、屋上に通じる扉を手前に引いた。

ドアを開けた途端、強く冷たい風が岩男の頬を撫でた。

雪が堆く積もっているかと思っただが、さうでも無くて、目の前には一人が通れる道が出来ており、両端に雪の壁が出来ていた。岩男は見た途端、誰かが先にいる事を感じた。

岩男は警戒しながらも、雪に触れて、その冷たさを指に感じながら先を歩いていくと、細い灰色の空しか見えなかったのが急に視界が広がり、広々とした景色が広がった。

屋上のヘリポートだと思うのだが、緑色の大きな丸と「H」の文字のところを雪を掻き出されてはつきりと姿を現しており、その中心には誰かがいるのが見えた。誰かが大きなちりとりのような道具を使いながら、ヘリポートの縁に雪を寄せている。

女性だ。すぐにそれが分かり、そして、その女性がああ朝比奈楓だと分かると、岩男は言葉を失いながら、ただ導かれる様に歩み寄った。

何で彼女がここに?そう思っていると、向こうもこちらの存在に気がついたようだ。

「やあ!」

岩男がその声をかけると、朝比奈楓は軽く睨んだ後、また作業を始めた。雪を掻きだしている。間違いなく、彼女にはこの雪が見えているようだ。上を見上げると、このビルの上だけ雲が薄くなっており、日の日差しが出ている。雪もさつき見ていた雪だるまの様な雪が降っている訳ではなく、もっと粒子の細かい粉雪になっている。

ただ、周りには相変わらず雪だるまが降り積もっていて、その大き

さも二メートル近いものばかりだった。岩男はその様子を不思議そうに見たり、足元も確かめながら、ゆっくりと楓の近くに寄って行った。彼女は、ピンクのストールを纏い、黒いタートルネックのセーターを腕の部分でまくりあげ、白くきめ細やかな細い腕を出していた。腰元が細いからか、ポリウーームのある胸の膨らみがさらに強調されており、形のいい引き締まったお尻をインディゴ染めのスリムジーンズに収めていた。スリムで均整の取れた足の先には、何故か穴あきスリッパを履いている。慌ててここに駆けつけてきたのだろうか？

岩男は彼女を上から下まで見回すと、今度は絶対聞こえる位の大きな声を出した。

「君、この雪が見えるの？」

岩男がそう言うと、彼女は手を止めて、大きな声を上げた。

「何言ってるの！見たらわかるでしょ！」

彼女は顔を赤らめながら、そう言ってまた手を動かすと、掻き出した雪を端に寄せた。白い息が、少し赤らんだ顔から漏れている。長くてブラウン色の髪の毛が、彼女が動くことに靡なびいて光を放っている。岩男は少し恐縮しながらも、雪の事よりも彼女にドキドキしてしまった。

しかし、イントネーションが少し訛って聞こえるのは気のせいだろうか？いや、それよりも重要なのは、彼女もこの雪が見えると言う事だ。岩男は興奮したように彼女に近寄ると、嬉しそうに彼女に声をかけた。

「ほんとに見えるんだね！この雪が！信じられない！自分以外にも見える人がいたなんて！」

岩男がそう言うと、彼女は怪訝けげんそうな顔をしながら、

「見えるもなにも、こんなに積もってるんだから」

と言ってきた。他の人とは違う意味で、岩男を馬鹿にしているような顔をしている。しかし、本人はそんな事頭の片隅にもない様子で、ただ、この雪を見た驚きを共有できる喜びを感じながら、万弁

の笑みを浮かべて大きく頷いた。

「そうだよな！ただ、皆には見えないみたいだから」

岩男がそう言って楓の眼を覗き込むと、彼女の眼が綺麗な緑色をしているのに気がついた。「目が・・・緑」思わず岩男はそう口走りそうになったが、彼女も岩男の顔を覗いてきたので、恥ずかしくなって口をつぐんだ。

「そんなの知らないわ。だって私には見えてるんだもん」

「いつからいるの？」

「ついさつき来たばかりよ。いきなり雪が降り積もったから」

なんだかい感じじゃないか。俺が、まともに朝比奈楓と会話をしているだなんて。岩男は気分が良くなって、調子に乗った。

「だよな。びつくり」

岩男は笑顔になって、さらに彼女に近づいた。

「こんなに雪が降ったら下の人達は大変だね、朝比奈さん」

岩男がそう言って、大げさに笑みを浮かべると、楓は体ごと向き直って、腰に手をあてて睨んできた。

「あなた、この会社の人？」

「え？」

「私の名前知ってるなんて」

「え？いや、その」

岩男は突然そんな事を言われたので、戸惑ってしまった。まさか、顔を覚えられていなかったなんて。いくら人が多いからって、同じフロアーで働いていたら、顔ぐらい知っているはずだろうに。

岩男はあまりのショックにどう説明していいか分からなくて、ようやく自分の部署を名乗り出ようとしたが、それを楓の声が遮った。

「そんな事より、こっちに来てみてよ！」

楓は大きなちりとりを手放すと、岩男を手招きしながら歩き出した。嬉しそうな表情を浮かべて、まるで子供の様だ。普段、会社の中で今の様なしている彼女を、岩男は一度として見た事が無かった。だから、岩男は戸惑いながらも、楓の魅力にあらがう事が出来ずに、

導かれるままに付いていった。

彼女が雪を掻きだしていたため、低い雪の丘がヘリポートの周りに出来上がっており、岩男はまずそれを乗り越えねばならなかった。不思議な雪だ。服についてもしみ込みもしないし、やけにサラサラしている。いつの間にか、二人の頭上の空から日差しが差し込んできて、眩しく照らし出した。雪も止んできたし、聞こえるのは二人が雪を踏みしめる音と、ビルの上を吹く風の音だけだ。

楓は岩男とは反対側のヘリポートの丘の上に立っており、天使のような笑顔を浮かべながら、長い髪をなびかせている。そして、振り返って両手を広げると、やつとヘリポートの真ん中までやってきた岩男に少し興奮気味な表情で声をかけてきた。

「見てよ、この景色！」

岩男は肩で息をしながら、彼女に導かれるままに自分も丘の上まで登ると、その景色を目にした途端、あまりの光景に息をのんだ。そこには雪原が広がっていた。

雪が降ったのだから当然そうなるのだろうけど、一つ違うのは東京の街がすっぽりと雪で覆われており、見渡す限りの白い絨毯が遠くの方まで広がっていたのだ。すぐ近くに都庁の二つの頭が出ていたり、北は池袋のサンシャイン、南には六本木ヒルズ、そして、少し遠くに東京タワーの頭だけが顔を出しているのが見えた。ところどころ顔を出している建物はあがるが、他は全部雪に埋もれて見えないのだ。その雪原に、所々開いた雲間から何本のもの光の柱が射し込んでおり、それらの建物や純白の雪原を照らし出していた。

今までこんな景色は見た事がない。岩男の想像を遥かに超える美しさで、圧倒的な迫力になにも考える事が出来ないくらい魅了された隣にいる楓も同じような顔をしている。

それに、信じられないくらい静かだ。ここが大東京ビッグシティの中心街であり、一日中止む事のない喧騒の渦の中心部であるという意識は、すっかり吹き飛ばされてしまう。ビルや車の騒音や、人々の織りなす音は一切聞こえては来なくて、耳に入ってくるのは頬を揺らす僅かな風

の音しか聞こえない。まるで、二人を残して世界が沈黙してしまつたかのようだ。

異様なようで、必然とも感じてしまふ幻想が、二人の目の前に光のカーテンを浴びた白絨毯として、見渡す限り広がっていた。

「すごい」

しばらく見とれていた岩男は、一言それだけ口にした。それ以上の表現エクストワードを岩男は持ち得ていなかったし、あまりの事に思考回路シンキングサーキットは直結しか出来なかった。

「最高！」

楓はそれだけ言うと、二人が立っていた雪の丘を下り、さらに先まで歩きだした。誰も足を踏み入れていないまっさらな雪の上に、彼女は膝下まで足を踏み入れて、雪を掻きながら先に進んでいく。当然深く積もっていた雪なので、長く細い彼女の足はみるみる飲み込まれたが、彼女は気にもしない様子で先に先にと、這う様にして進んでいった。まるで、はしゃぐ犬みたいに無邪気だ。

岩男は「危ないよ！」と声をかけたが、彼女は聞く耳を持たない様子で、時折抜けるようなはしゃぎ声を上げながら、その場に立ちすくんだ岩男を置きっぱなしで、雪を楽しんでいた。岩男はとつさにそこまで出来なかったし、足元の見えないような状況を歩く気になんかなれなかったし、寒さのせいか徐々に冷静さを取り戻していた。白い雪の上を、楓の黒く長い髪の毛が舞っているのは十分にそられるのだが、いづどこで大きな穴があつて埋まってしまうかもしれないかと思うと、怖くて体が動かなかった。

「あなたもこっちに来なさいよ！」

彼女の声が聞こえたが、岩男はなかなか後を追えない。

何しろ、いくら雪が積もっているとは言え、ここはビルの屋上なのだ。何が起るか知れたものではない。ここから眺めているだけで充分だろくに、彼女はこれ以上何をしたいというのだろうか。

「は、早く帰ろうよ。寒いし、そっちは危ないよ」

巖がそう言うと、彼女の朝日みたいな笑顔に雲が差し、すぐに雷

交じりの嵐が吹き荒れた。

「え？聞こえない」

彼女の冷たい視線に岩男は体を固まらせて、違う恐怖を感じてこめかみに一筋の汗をたらした。

「来ないならいいわ。あなただけ帰ればいいじゃん」

そう言つて楓は背を向けてしまったので、岩男は慌てて口を開くと、恐る恐る足を前に踏み出した。

「い、いやそう言う訳じゃなくて、その」

こんなチャンスめつたにないと思いつながら、岩男は恐怖も相まつて決断出来なくてもじもじとしていた。

「来るの？来ないの？」

茜の高い声が雪原に響き、その背中からは目に見せそうな苛立ちが煙つていた。岩男は乾き切つた喉を震わせた。

「行きます！」

岩男の声が響いた。すると、楓は万弁の笑みを浮かべて「早く、早く」と可愛らしく顔の近くで手招きしてきた。まるで、猫を呼ぶようである。

岩男は瞬間的に胸を掴まれた様な熱に席卷され、周りの雪が解けてしまいそうなほど体中を赤らめると、尻尾を振るかのごとく楓の後を付いて行つた。雪の丘を下ると、しばらく平らな雪原が広がっているのだが、全てが雪で埋め尽くされて真っ白なので、ビルの切れ目と下の境目がはつきりと分らない。ただ、楓が先行しているの、岩男としてはその踏みならされた道を通ればいいので少し安心だった。だから、すぐに楓の隣までたどり着く事が出来た。岩男はかすかに漂う楓の香りを感じて、有頂天になりながら鼻息を荒げた。

ビルの上の緊張！（前書き）

美女は我が俤な者です。しかしそれが許される、それが美女なんです！

ビルの上の緊張！

この展開、もしかしたら、もしかして。手とか繋げちやったりするんじゃないの！？岩男は一人勝手に盛り上がった。すると、楓が岩男に顔を向けてきた。そして、愛くるしい笑顔で、白い歯をのぞかせると、猫なで声を出してきた。

「あなたが先に行つて？」

そう言つて、楓は前に手を掲げた。岩男は一瞬意味が分からなくて彼女と見つめ合ったが、全てを悟ると、頭を掻きながら苦虫をかみつぶしたような表情で、しぶしぶ先に立つて歩き出した。

なんだよ、まったく。可愛い顔してるからつて。仕方ねえなあ。

岩男はスーツの裾を気にしながらも、黒い革靴で足元を踏み固める様にしながら、楓を先行しながら雪の中を進んだ。

案外深いところもあるし、何度か足を取られながらも、二人はしばらく会話も交わさなまま歩いた。すると、視界が徐々に広がりだし、ビルの境目が分かりだしてきたので、岩男は慎重に足を運びだした。スピードが緩まったので、それはすぐに茜にも伝わり、背中越しに彼女が顔をのぞかせているのを感じる。

「そろそろ、気をつけないと」

岩男がそう言つて楓の方に向き直ろうとした時、途端に左足が深みにはまって、岩男は情けない叫び声を上げた。一瞬体中に恐怖を伴つた電撃が走り、顔も引き攣つて体を硬直させた。

「大丈夫？」

楓は軽く声をかけながら、ただ左足を膝下まで埋めてよろけそうになっている岩男の隣を素通りしていった。岩男は「だいじょぶでしゅ」と空気を漏らしたような声を出した後、体中から噴き出してきた冷たい汗を感じて、ゆっくりと足を雪から引き抜いた。

岩男がそうして、楓の後を付いていくと、すぐに雪が切り立っている所に出た。楓は腰に手を当てながら、ただその下の様子を窺つて

いる。岩男も覗いてみると、屋上に三メートルほど積もった雪がかなり急な傾斜を作りながら、ビルと空の境目の先で切れているのが見えた。一步でも踏み出したら、すぐにビルから転げ落ちてしまいうそである。

二人は並んでそれを見ていたが、恐怖で顔をひきつらせている岩男とは対照的に、楓はすっかり嬉しそうな顔をしていた。

楓は尻が濡れるのもかまわずに一番端の切れ間に腰かけると、岩男も隣に座るように促してきた。

岩男は遠慮がちに少し離れて座ると、少しだけひんやりしたが、スーツにしみ込んでこないのもそれほど冷たいとも感じず、深いにもならなかった。

「綺麗ね」

楓がそう言ったので、岩男も遠くに視線を映した。

いったいどれだけの雪が降り積もったのだろうか？今になって現実的にそう感じてしまう。何しろ、雪は二百メートル以上あるであろうこのビルをすっかり埋め尽くしており周りの他のビルもあらかた飲み込んでいたのだ。二人がいるところと雪原までは、三メートルあるかないかくらいだろうか。岩男達のビルより高い建物の窓に、人が動く気配もするが、屋上にいるのは二人だけしかいないようだ。岩男は高いところがあまり得意ではないので、そこに座るのが精一杯で、体を声バラして、思わず楓にしがみつきたくなった。しかし、楓が先に口を開いてきたので、岩男は寸でのところでそれをやめた。

「私、雪国の生まれなの」

楓のピンク色の血色のいい唇が、気分よさそうに開いた。

そんな事、初耳だ。大体まともに口きいた事無かったつけ。認識されてなかった位だし。

岩男は必要以上に体を強張らせながらも、それに返答した。

「そ、そうなんだ。知らなかった」

岩男は口に手を当て、わざとらしい咳をすると、何度も瞬きまばたしながら言葉を続けた。

「俺、同じフロアーで働いてる下田、下田岩男。よろしく」

岩男がそう言っただけで手を差し出すと、彼女は手を出す事もしないで遠くに視線を送った。

「子供の頃、よく雪掻きした。屋根にも上ったのよ」

「え？」

岩男は差しだし立ての行方に戸惑いながらも引つ込めると、彼女はそんな岩男を気にも留めなくて、自分の世界に入るかのように話を続けた。

「降り始めの雪は、柔らかくてふうわしてるの。こんなにさらさらじゃないけど、似てるかも。結構、豪雪地帯じゃない、うちの田舎って。だから、一階が雪に埋まる事もしばしばなの」

「はあ」

「それでね、二階に届きそうなくらい雪が積もった時は、そこに飛び降りて遊んだりしてたのよ。でもね、ふかふかしてるから全然痛くないの。あなた、したことある？」

楓はそう言っただけで無邪気な笑顔を見せたが、岩男は無言で首を振った。岩男は彼女の話の展開が、まったくチンプンカンプンだった。大体、岩男の田舎では雪は降らない。

エンヤの曲でもバツクで流れそうなロマンティックな景色が広がっているのに、この女は何を話し始めているのだろうか？

そんな、岩男の感傷はよそに、楓は話を続けた。

「私って無鉄砲だから、とんでもない事する事がよくあってね。一度だけ、自分の家の屋根に上って、降り積もった雪の上に落ちてみた事があるの。ふふふ、落ちた後、父親に散々しかられたけど、あれほど楽しかった事は無かったなあ」

楓は昔を思い出し、懐かしむように口元を緩めた。

なるほど、楽しい子供の頃を思い出していたのか。一瞬嫌な感じがしたのは気のせいだったか。

しかし、美しい。

雪が似合う美女と言うのは、間違いなく彼女の事だろう。

岩男は楓の横顔を見ながら、すっかりとその美しさに見とれていた。心を開いているかのように昔話を始めた彼女を見てみると、表面の美しさからは感じられない親しみも湧いてくる。結構、いい子なんじゃないか、岩男はそう思った。だから、相槌あいづちを打とうと口を開きかけると、突然彼女が立ち上がった。

「決めた！」

拳を握りしめながら、決意を固める楓を見上げながら、岩男はびつくりしたように声を出した。

「な、何？」

一瞬嫌な予感が背中を走った。すると、楓は緑色の綺麗な眼を見開きながら、体の前で両方の手を握りしめながら、形のいい唇を動かした。

「飛び込みましょう！」

「え？」

岩男は、楓の言葉が何を意味しているのか、まったく理解できなかった。飛び込む？どこに？

「うずうずしてきた」

楓は興奮したように頬をピンクに染めている。

「え？何しようとしてるの？」

「決まってるじゃない！ここから雪原に飛び込むのよ！昔屋根から飛び降りたみたいにな、ここからダイブして見るの。一緒に飛ぼう！絶対気持ちいいって！」

その眼は真剣そのものである。然し、岩男は驚きに口を開けたまま、岩男は恐る恐る下に目線を向けた。

ここから飛び降りる？正気か？三メートル弱はありそうだ。

「マジ？」

「当たり前じゃない！」

嫌な予感の中したようだ。岩男が明らかに拒否の表情を浮かべると、楓は岩男を、ひいては自分を鼓舞するかのごとく腕をぶんぶん振った。

「だって、最高じゃない！ここまで降り積もった雪に飛び込むのよ？こんなに誰もした事無いわ、絶対！こんな景色から雪に飛び降りるなんて！」

楓は興奮を隠しきれない様子だったが、岩男の体は震えあがっていた。絶対正気の沙汰じゃない！雪が積もってるって言っても、こはビルの屋上で、しかもその雪は他の人には見えないって言うのに。二人しか見えない雪なのに、何を根拠にそんな大それた事を言い出しているんだ？

もし普通に飛び降りたら、間違いなく命は無い！

なのに、この女は……。

「絶対、やめた方がいい！」

岩男は首を激しく横に振り、声を震わせながらそう言った。

美女と異世界へ！（前書き）

その向こうに何が待っているのか？
それはとんでもない世界なのでした。

美女と異世界へ！

すると、楓は目を吊り上げて腕を組み、岩男を見据えるように睨みつけてきた。視線が氷の女王そのものだ。

「何？きもやげるなあ。男なのに。私の田舎じゃ、屋根から飛び降りれて一人前だからあ。この、じくながあ！」

早口で、しかも方言交じりで、吐き捨てるようにそうやってきた楓に、岩男はあつけにとられたが、彼女の目は真剣そのものだ。

「じくながして？」

「はんかくさ！意気地無って事よ！」

そう言って目を逸らされて初めて、岩男は自分が馬鹿にされた事に気がついた。

「何だと！俺はビビって無いぞ！」

そう言っで立ち上がった瞬間に、岩男は目がくらくらして倒れそうになった。それを見て、楓は眼を細くして冷たい視線を送ってきたが、一つ溜息つくと腰に手をあてた。

「とにかく、私はいぐ！」

急に言葉が訛りしたのは、童心に帰ったからだろうか？

雪がそうさせた？

とにかく、今の楓を引きとめる術は、岩男には皆無に等しかった。ただ、黙ってそれを見ている訳にはいかない。

「じゃ、じゃあ、他の人に声かけてからにしようよ」

岩男の腰ぬけ度百パーセントの言葉には、楓が反応する訳がなく、彼女はただ下を覗き込むだけだった。岩男は居心地悪くなりながらも、下を覗き込むと、恐る恐る口を開いた。

「本当に飛ぶの？」

楓は無言で頷いた。

その眼は恐怖の色に染まっている訳でもなく、逆に嬉しそうな光を止めど無く放っていて、不安のかけらも感じられない。その眼を見

ていると、引き込まれてしまい、なんだか自分もその気になってき
てしまう。

だんだん、彼女がすべて正しいように感じられて来たのだ。

「君が飛ぶなら俺も飛ぶ！」

岩男は思わずそう口にしていた。楓は優しくほほ笑みながら「そ
う」と口にすると、もう一度下を見て口を開いた。

「じゃあ、行くわよ！」

「え！？もつ？」

岩男は腰を竦すくませた。

「当たり前じゃない、行くって決めたんでしょう？」

「だけど・・・その、そんな急になんて。もう少し・・・」

「ああ、煮え切らない！行くの？行かないの？どっち？」

岩男は恐怖心に体中が震えて、思うように言葉が出てこなかった。
命がかかっているから、当然である。

しかし、楓はそんな岩男の迷いを待っているほど気が長くは無かつ
た。彼女は岩男に顔を近づけて、耳元で叫んだ。

「どっち！？」

岩男は体を飛びあげて、泣きそうな顔を楓に向けたが、彼女には
そんな男心は通じていないようで、ただ、眼を吊り上げながら苛立
ちを露わにしていた。ただ、それでも岩男がぐずぐずして泣いてい
たので、楓はついに耐えられなくなった。

「行くわよ！」

「いや、でも・・・」

岩男は顔をひきつらせた。本心は絶対に行きたくない。しかし、そ
れが言葉に出てこなかった。

「ああ、もつ！」

楓はそう声を上げると、岩男の手を握り、有無も言わず引つ張る
と、思いもよらない行動になすがままの彼を傾斜につき落とす。そ
そして、自分もそれに続いた。

静寂を切り裂くような岩男の悲鳴と、楽しそうな楓の黄色い声が響

いた。

岩男が尻をつきながら滑り落ちていく隣を、楓は立って走りながら、すぐに追い抜いて行った。そして、瞬く間にビルの端にたどり着くと、体を大の地に広げて、突き抜けるような歓声を上げながら一足先に飛び降りていった。

一方岩男は、恐怖に顔を引き攣らせながら、悶える事も出来ずに、為す(な)術すべもなく傾斜を駆け降りると、今まで見てきた、小さい頃からの記憶が頭の中を駆け巡り、急に周りのものがスローモーションに見えたかと思うと、宙に舞っていた。

瞬間的に自分は死ぬと思った。
体が宙に浮き、その反動で一回転すると、茜と同じように体が大の字に広がった。

次の瞬間、目の前に真っ白な壁が！

そして、すぐに柔らかな衝撃が体を包み込み、それと同時に、自分の意識も薄れていくのを感じた。

岩男が目を覚ました時、一番初めに感じたのは、頬をさらさらと伝う冷たい感触であった。何かサラサラとしたものに倒れているようだ。岩男は反射的に指を曲げると、そのサラサラとしたものを両手で握りしめながら、ゆっくりと顔を上げた。

雪？

岩男は一瞬そう思ったが、すぐにそうではないと気がついた。

それは砂だった。正確には砂だと思う。

何しろ真っ暗であり、何も見えないのだ。しかし、雪とは違うし、岩男の記憶はこの感触から、去年行った砂丘を思い出させた。

辺りを窺っても、まったく視界が取れないし、音も聞こえない。岩男は慌てふためきながら体をまさぐり、安全を確認してみた。幸いな事に、特に痛みも感じないし、体に問題はない様だ。服もちゃんと着ているし、財布も煙草もそのまま身につけている。

自分の身の確認が出来て一応の安心を感じたのだが、その安心はす

ぐに周りの暗闇に飲み込まれてしまった。

どうする事も出来ない状態に、岩男は困惑と恐怖で体を縮こまらせた。いったい自分はどこにいるんだろう？雪の上に落ちたはずなのに。そこで、岩男はもう一人いるべき存在に気がついた。

そう言えば、彼女はどこかにいるのだろうか？

「おーい！」

岩男は立ち上がると、大声で叫んだ。しかし、声を出した先から、岩男の声は漆黒の闇に吸い込まれる。

「おーい！朝比奈！」

もう一度大声を出して楓を読んでみたが、まったく何の反応もない。すぐ近くにいる気配もしないし、聞こえるのは自分の荒々しい息づかいと、心臓の鼓動だけだ。

いったいどこなんだろう、ここは？

まったく見当がつかないが、地とも目が暗闇になれやしないし、とにかく不安が付きまわってしまう。岩男は肩をとして、力無く首を振りながら尻を砂に着くと、大きく溜息をついた。上を見上げて、星の一つも出ていない。

このままだと、目が見えているのか、いないのかさえ疑ってしまいそうだ。なので、少しでも心を落ち付かせようと、煙草を吸う事にした。火を持つている事が幸いである。

岩男は胸ポケットから煙草を取り出すと、慣れた手つきで一本だけ抜き取り、ポケットを探って使いこまれたジツポを手に取った。

寒くなんてないのに震える指先でやっと口に煙草をくわえると、右手でジツポを持って真鍮のふたを開けた。カチンと音をたててふたが開くと、その瞬間、ライターオイルの匂いが鼻をついた。そのせいか、何故か急に切なさが入り込んでくる。

岩男はそれを振り払うかの様にプリントを擦ると、落ち着かない手で煙草に火を付けた。

とにかく、大きく煙を吸い込む。そして、ゆらめくオレンジ色の火を見ながら煙を吐き出した。少しだけ気持ちが落ち着いてくる。寒

くないのに震えていた指先が、少しだけ治まってくる感じだ。

しばらく煙を吹かしていた岩男だったが、ふと思いついたように上体を起こすと、火が付きっぱなしのジッポを片手でかざして、辺りを照らしてみた。何か分かるかと思ったのだ。もっと早く気がつくべきだったと思いつながら、遠くに眼を凝らすと、十歩ほど離れたところを砂と違う何かが見えているのが見えた。

何だ？生き物じゃないみたいだけど。

岩男は警戒しながらも煙草をくわえて、四つん這いになってそれに近づいていった。ゆっくりと膝で砂を擦りながら、恐る恐るそれにジッポをかざす。

「何だ、こりゃ？」

目の前に広がる光景に、岩男は思わず声を上げた。

そこには、灰色でジェル状の海が広がっていたのだ。それは波となつて、不思議と音も立てなくて砂浜にゆっくりと打ち寄せている。

しかし、ジェル状だからか海のように深く打ち寄せては来なくて、ふるぶると震えているみたいだ。近づいても濡れる事もなさそうなので、岩男は立ち上がると触れるところまで進んだ。

岩男がライターを持っていない方の手でその波に触れてみると、髭そりジェルの様な感触が指先に絡みついていた。鼻先に持つてきて匂いを嗅いだ、特に匂いもしない。しかし、なんか気持ち悪くなつて、岩男は慌てて砂に指を擦りつけてこそげ落とした。

なんだか、不快な物質だ。触っているだけで気持ちが悪い。

岩男はそんな事を思いながらも、いい加減ライターが熱くなつてきたので、片手でふたを弾いて火を消した。

すると、再びあたりに闇が広がり、ただ一つ、もう短くなった煙草の小さな火が、心細く瞬またたくだけになってしまった。

波打ち際から少し離れた所に座つて、しばらく煙草をふかしながら、何も考えないようにただ煙を吐いていると、途端に心細くなつてきた。

なんでこんな事になつてしまったんだろう？

いったい何が起こってしまったんだ？

誰か助けてくれ！

そんな震えるような心の叫びは、やがて苛立ちへと変わり、岩男は「くそ！」と吐き捨てると、火のついた煙草を打ち寄せるジェル状の波に投げ込んだ。

すっかり短くなったタバコはクルクルと回りながら、その赤く消えそうな火を灯しながら、波打ち際に落ちていった。

その瞬間、とんでもない事が起こった。

何じゃこりゃ！(前書き)

燃える海！粘土人間！主人公は混乱気味です！

何じゃこりゃ！

ジェル状の海が燃えだしたのだ。その炎は風を起こすくらい勢い良く、空気を破裂させるような音をたてた。そして、その炎は見渡す限り瞬く間に広がっていき、海と砂浜の境目をはっきりと映し出した。

海が燃えだすと同時に、岩男の髪が風圧で後ろに靡なびき、頬にも熱を感じた。岩男は反射的に立ち上がると、予想もしていなかった現象に驚く間もなく、涙交じりの叫び声を上げると、本能のまま必死になつて逃げ出した。めり込んでくるさらさらとした砂に足をとられながらも、汗を吹き出しながら必死で足を動かして、燃え盛る炎から逃れるように反対側を目指した。

無我夢中むがむちゆうで、とにかく自分が燃えないようにしばらく走っていくと、砂浜から五メートルほど盛り上がった、傾斜のきつい丘陵に差し掛かった。炎の勢いが増したのだらう、目の前が明るくなり、海に沿って長く横に伸びている丘がはつきりと分かる。自分の影が丘に長く延びる。

岩男は砂丘を上り切ると、反対側に転がってすぐに身を伏せた。とにかく身を隠さなければと思ったのだらう。彼はしばらく頭を抱えながら震えていたのだが、もう特に熱く感じなくなり、自分が炎から逃れたのを確認すると、さっきいた波打ち際を見ようと、肩を震わせながら恐る恐る頭を突き出した。

そこには、信じられない光景が広がっていた。見渡す限りの海が、遠く見えなくなるまでオレンジ色の火柱を上げながら、燃え盛っていたのだ。

全てが燃えている。

さっきまで漆黒の世界だと思っていたその場所は、すっかり明るくなり、その世界がよく見渡せた。二メートルほどの炎が海面を余すところなく蹂躪しゅうりゅうしている地球上の海が、全部炎に包まれている様な

状態だ。その勢いは強く、燃え尽きる様子はとても感じられない。それと対照的に、灰色の砂浜が左右に永遠と見えなくなるまで繋がっており、今自分がいる砂丘も海岸から三十メートルほど離れたところに並行して広がっている。陽と暗の世界。

岩男は思わず立ち上がって、それに見とれてしまい、開けた口をふさぐ事が出来ないまま、体を動かす事ができずにいた。自分がこの光景を引き起こしたなんて実感出来ない。

一体、なんなんだ！

俺は何をしちまったんだ！

岩男の頭に、その二つの問いが目まぐるしく飛び交い、ぶつかりあって弾けた。普通これだけ燃えていたらこの距離でも熱を感じそうであったが、不思議とそれはなかった。しかし、風圧は感じて髪を揺らしているし、耳元では風が唸っている。

言葉も出ないし、ただ圧倒されてしまう。

美しいとはとても言えないけど、一度も見た事のない光景は壮大であり、岩男は心を掴まれてしまい瞬まばたきさえしなかった。

はつきり言って、楓の事も頭には無かったし、仕事も生活の事もまるで頭から吹き飛んでしまう。

それほど衝撃であったのだ。

しばらく砂丘の一番高い所で立ち尽くしながら、そんな心理状態であった岩男であったが、自分の後ろから何やら声が聞こえた気がした。空耳だと思っていたが、その声は徐々に大きくなっていく。だが、燃える海に意識を向けていた岩男には、そんなの今更どうでもいい事に思えた。これ以上の何が一体何が起こると言うのだ。しかし、その低い声は迫ってくるように大きくなってきて、岩男も

無視出来なくなり、すぐに後ろに振り返った。

そこには、いつからいたのかは分からなのだが、たくさん人間達がいいた。岩男のいるところから五十メートルは離れているだろうか。燃える海の明かりは、やっとのことその人達の所まで届いているの

で、岩男にもハッキリとその様子が見えた。

その人達は何かを取り囲むように座っていて、中心に向かって何やらお祈りでもしているかのようになり、腕をあげたり、頭を下げたりしている。目を凝らしてよく見てみると、中心には二メートルほどある大きな水晶の塊のようなものがあり、それが炎の明かりに照らされてオレンジ色に輝いていた。その人達は、それに向かって跪きながら、何かお祈りらしきものを唱えている。百人ほどいるだろうか、皆同じように声を揃えているので、轟くほどのかなりの騒音だ。

岩男はあまりの驚きに尻もちをつきそうになったが、近くに人がいたと言う安心に、無防備にもその集まりに駆け寄っていった。

これで助かるかもしれない、岩男がそう思いながら、その人の輪の一番端までほんの三メートルほどまで来た時、中心の水晶が急に青白く光りだし、地鳴りがしだした。

岩男は思わず立ち止まり、辺りを窺った。

すると、祈りをささげていた人達は、祈りを唱えるのを止め、一様に辺りを窺いだした。水晶は輝きを増し、小刻みだった地響きは、徐々に激しくなり、岩男は立っていられなくなった。近くにいた人達に目をやると、片膝をついて、天を仰いでいた。

すると、岩男とその人達を取り囲むように、砂の中から四本の大きな柱が、まるで植物の芽が生えるように飛び出して来た。柱は頑丈な岩で出来ているのか、灰色の砂とは違う材質の様だ。

岩男は尻もちをつきながらそれを見上げていたが、また、大きな振動が起こり、それと同時に、岩男とは反対側にまた地面から何かが生り出して来た。岩男には、それがはつきりと分かった。

それは、王座であった。

人が座るにはあまりに大きいのだが、風化した石灰岩の様な石で出来たひじ掛けの付いた荒削りの岩椅子が、四本の柱から少し離れた所に、二メートルほどの高さがある舞台を伴って現れたのだ。

大地の震えが止み、一瞬の静寂が訪れると、そこにいた人々は立ち上がり、一様に中心に視線を向けた。その視線の先には、未だ振動

を続けている水晶があり、大きく揺れ動くと共に、内部から亀裂が走って、透明だった水晶は全体的に白く網目状になった。

岩男は恐怖のあまり声も出せずに水晶を見ていたが、ゆっくりと立ち上がると無意識にその人の輪に歩いていた。傍にいた人間は、岩男が近づいた事に気がついた様子は無く、ただ、ひび割れた水晶だけを見ていた。

岩男は何が起こっているか話をしようと、彼らに視線を向けたが、そこで初めてしっかりと、オレンジ色の光に照らし出されていた人々の横顔を見て、思わず声をあげそうになった。

彼らは粘土の様な肌をしたおり、無表情な仏像の様な顔をしていたのだ。

どの人間を見ても、表情が変わらないし、眼も見開いているのかも分からないが、確かに動いているし、一樣に中心の水晶に意識が向けられているのは感じる。東洋的なのか、西洋的なのか分からない服装やその顔立ちは、まるで、コンタクトを売ってきた老人の様なも思えるが、岩男の近くににいる人はもつと若々しい感じた。背も岩男より少し高いし、^{たくま}逞しい体つきをしている。

今気がついたが、そこにいるのは男だけで、女はいないようだ。いったい何人なのだろう、岩男には分からない。

しかし、岩男は気を取り戻すと、恐る恐る一番近くにいたその若い男に話しかけようと、肩を叩こうとした。

その、時だった。

突然、真つ白に細かいひびが入った水晶が青白く輝きだし、氷河が崩れていくような音を立てながら、表面が剥^はがれ出して、次々と欠^か片を飛ばしていった。

それと同時に、粘土のような顔をした人たちが、一斉にあの燃えている海の方に顔を向けだし、すぐに一目散に駆け出した。

岩男は突然の事に付いていけなくて、彼らの勢いに押されて尻もちをついてしまった。彼らは岩男を避けながら、迷いもしないで海に向かっており、誰もが岩男を取り残して走り去っていった。そして、

彼はその勢いにのまれる様に、その後についていった。

岩男はその粘土色の肌をした人間達の後をついていき、さつき駆け下りてきた丘を戻るにつれ、青白い光が丘の向こうから放たれているのが見えた。

さつきまでオレンジ色の光を放っていたのに、何で青い光になったんだ？

岩男はそう思いながら、粘土の肌をした人達に追いついて頂上まで駆け上がっていくと、先頭にいた人達が丘にそって横に広がりだして、立ち止っていった。

岩男も肩を上下させながら息を吐き出すと、その人々の塊をかき分けて、前の方に進んでいった。

彼らの視線の先には、青い炎が燃えていた。

さつきまでオレンジ色に燃え盛っていたのに、今は炎こそ落ち着いたものの、海一面が青い炎に包まれていて、辺りを青白く照らし出していた。

それは息を飲むほどに、美しい光景だった。

青白い炎に照らし出された粘土の様な顔を見比べながら、岩男はいつたいどうしたのだろうと辺りの様子を窺ったが、誰も動く様子も、口をきく様子もなく、ただ燃え盛る海を見ているようだ。

若者や、少し年を取った者、あのコンタクトを売って来たような老人もいて、様々な年齢層の男がいるようだが、誰もが同じような、擦り切れてぼろぼろになったような服を身に付けていた。昔見た事のある、アジアの何とか民族の伝統衣装の様だが、岩男にはついに思い出せなかった。

しかし、女のような体つきの人は見当たらない。

場違いな自分の服装が急に不安になってきたが、他の人はそんな事を気にしている様子もなく、岩男に関わっても来なかった。

すると、突然岩男の隣の若者が、海を見つめながら口を開いた。

「来る！」

彼がそう言って、青く燃えた海に向かって指さすと、周りの人間

達がその方向に一斉に視線を向けた。

勢い、岩男もそちらに向く。

よく目を凝らすと、そこには青白く燃える海があるだけだ。

何が来るんだ？

そう心で呟きながら、岩男は不安を押し殺しながらも、首を伸ばして目を見開いた。

しばらくドキドキしながら見ていると、海の彼方から、何かが少しづつ近づいて来るのが目に入った。

それが何なのかはさっぱり分からないが、点ほどの大きさのそれは青い炎の海を割りながら近づいてきて、岩男達の方を目指しているようだ。

船か？しかし、それにしても大きい。

やがて、それははつきりと形を現して来て、岩男の目にも捉える事が出来るようになった。

それは、白い龍だった。

龍は燃える炎をものともせず、悠然と海上を進んでくると、浜辺の近くでその動きを止めた。かなり大きな体をしており、とても長い首を空高くそびえさせていた。それは、青白く燃える海辺から、岩男達がいる砂丘まで届くほどの長さだ。

ただ、龍と言っても、角があったり、鱗うろこがあったり、頭を緑の毛でおおわれている訳ではなくて、もつとすっきりとした感じだ。表面はすべすべと凹凸がなく、鼻先には鬚ひげが生えているけど、口に牙は無かった。頭の天辺に若干の白い鬚たてかみが見え、眼は大きい黒眼であったが、まるで女の子が描いた絵の様な眼である。

そんな龍は、青白い煙を吐き出すと、ゆっくりと岩男達のいる砂丘に首を伸ばしてきた。驚く事に、その頭の上には、一人の色白な女が乗っている。

岩男はもしかしたらと思い、そちらに一步踏み出してよく目を凝らした。朝比奈楓かと思ったのだ。

しかし、そうではなかった。

龍の頭の上に乗っていたのは、透けるような透明の衣をまとった、白磁のように真っ白い肌をしている、これまた男達と変わらないように無表情な顔をした女だった。彼女は龍の頭の上で、仁王立ちして、龍の頭の上から男達を見下ろしていた。

彼女は一見してとても美人であり、プロポーションも文句が着けようがないほど均整がとれている。しかも、その体はほぼ丸見えであるのだ。へそがあるようには見えなかったが、後の部分は全部岩男の視界にとらえられている。

しかし、岩男は一瞬興奮したものの、どうしても違和感を拭えなかった。それは、その女が、まるで、陶器で出来た人形の様に見えないからだ。よく出来た人形である。

ただ、その女は確かに生きているようで、男達の前に来ると大げさな身振りをしながら、衣を払った。そして、龍が動きを止めると、龍の首がさらにゆっくりと伸びて来て、彼女は岩男のすぐ近くまで近づいてきた。

近くで見ると、やっぱり美人だが、どう見ても人形である。

「火を付けたのは誰？」

陶器の女の、透き通るような甲高い声が響いた。

すると、粘土色の肌をした男達は顔を見合せながら、ざわざわと口々に何かを言い合っていた。動揺しているようでもあり、恐れているようでもあり、困っているようでもある。明らかに、その女に敬意を払っているようでもあるし、女もそれを当たり前に感じているようだ。誰もが犯人を探すかのように、お互いの顔を見合っている。女の問いかけが、男達の全ての様だ。

岩男はその様子を感じ取って、これは黙っているほかないと決め込み、そっと、男達の影に隠れようと後ろに移動しようとした。間違はなく、こんな事になったのは自分の責任だ。煙草をあの海に捨てたから、火がついたのだから。

新たな美女と白い龍（前書き）

何やら怪しい展開に！一体どこに連れて行かれるのでしょうか？

新たな美女と白い龍

やばい事をしてしまったんだと言う自覚で、すっかり汗びっしょりになった岩男は、彼らの足元に身を隠そうと四つん這いになった。そして、誰にも気がつかれないように、ゆっくりと体を動かした。ここで見つかったら、いったいどうなるのだろうか？想像しても、と目も悪い事になるイメージは浮かばない。もしかしたら、あの龍に食われちゃうんじゃないか！そうじゃなかったら、きつと、あの屈強そうな男達に袋叩きに会うかもしれない！とてもじゃないが、海を燃やした責任などとれないし、この日を消す術もないのだ。話を聞いてくれる連中なのかも分からないし、自分を許してくれるかなんて見当もつきやしない。

そんな事を思ったら、今にも駆け出したくなっただが、必死でそれを押さえて膝で砂を掻いた。すると、さっきの若者の声が出た。

「彼だ！」

その声に、一同が岩男に視線を向けた。瞳がよく見えないから、はっきりと言いつける事は出来ないけど、ここにいた皆が岩男に顔を向けている。岩男は彼らに尻を向けて、四つん這いのまま肩越しに皆を見渡すと、頭が真っ白になりながらも指で自分の鼻を差した。

すると、そこにいた男達が一様に頷いた。

岩男は激しく首を振った。

男達はゆっくりと首を振り、岩男を指差してきた。

岩男は大げさにびっくりしながら、もう一度自分を指差すと、男達が大きく頷いたので「やばい！」と口にする、その場から大急ぎで駆け出して逃げようとした。

しかし、男達の壁がそれを遮り、取り囲むようにしてきたので、岩男は仕方なく反対に駆け出した。すると、男達は道を開けて岩男が

ら遠のきながらも壁を作ると、岩男はちょうど龍に乗った女の前まで導かれてしまった。

龍に乗った女は、立ち尽くしている岩男に向き直ると、龍の頭ごと近づいてきた。

「お前が付けたのか？」

その女は、そこにいる誰にも聞こえるような声で、そう言い放った。その声は映画でしか聞いた事が無い様な響きを持っている。

まるで天女みたいな美しさだ。

しかし、岩男に向けられた冷たい視線は、まるで小動物を見つけた鷹の様だし、口調は宮廷につかえている人間のそれだし、その振る舞いもそう感じる。

どうしていいか分からない岩男は、おろおろとしながらその女と向き合つと、この状況でも誰かが助けの手を差し伸べてくれるのではないかと思い、周りでその様子を窺っている男達を見た。しかし、彼らは誰一人として表情も変えず、ただ岩男の事を見て微動だにしなかった。

女も同じように表情を変えずに、岩男の事を見下ろしている。

「お前が付けたのか？」

女がもう一度問いかけてきたので、岩男は恐る恐る女の顔を見つめた。彼女の表情は固まっついていて、怒っているのか、笑っているのかも分からなかったが、その声の感じからもう認めるしか出来ないと思つた。だから、岩男は一つだけ小さく頷いた。すると、思いもよらぬ事に、その女は白磁の様な手を差し出してきた。そして、表情も変えずに、同じようなトーンの甲高い声を出してきた。

「こちらに来なさい」

来いだって？俺が行くのか？行っていいのか？

岩男は瞬間的に、行つたらまずいと感じた。

よく言うのではないか、霊の呼びかけに答えて付いたら死ぬとその感覚だ。

だから、岩男はその場にしゃがみこみ、体を縮こませながら体を強

張らせた。そして、彼女から顔を背けると「助けてくれ、助けてくれ」と手を合わせながら、小さな声で祈るように手を擦り合わせながら呟いた。小さい頃、そうすれば霊は去ってくれると、おばあちゃんに教えてもらった事があるからだ。

岩男は必死に祈った。

しかし、その祈りは届くことなく、すぐに両腕を屈強な男二人に持ち上げられると、瞬く間に女の前に差し出されてしまった。

岩男は威勢よく叫んだ。

「放せ、馬鹿野郎！何するんだ！」

しかし、太く筋張り盛り上がっている腕を見るだけで、これはかなわないと感じると、すっかり力が抜けてしまった。だから、堪忍したかのように首を項垂れると、もがきもしないで大人しくなった。

しかし、隣の男達をそれぞれ睨みつけはした。ささやかな抵抗のつもりである。だが、男達は何の反応も示さない。

こいつらは、いったいどうしようと思っているんだ？

こ、殺すのか？このまま俺は殺されるのか？！

岩男は泣きながら、命乞いをした。

「殺さないでください。し、知らなかつたんです！まさか、海が燃えるなんて。もうしませんから、命だけは助けて下さい！」

岩男は情けない表情を浮かべながら、眼を瞑つむって拝おがみ倒さんばかりにお願いすると、必死になって手を擦り合わせた。命乞いなんて生まれて初めてだけど、体と心は自然と必要であるう動きをするものだ。この期に及んで、プライドもへつたくれもない。今頭に思い浮かんでくるのは、とにかく自分の命を守ることだけだ。

すると、女は無表情のまま、もう一度岩男に手を差し出してきた。その手は震える岩男の頬にゆっくりと触れると、今度はしつかりと腕を掴んできた。その手はとても冷たくて、体の芯まで凍えてしまいそうである。思わず、岩男は身を震えさせた。

この状況が理解できなくて、一気に思考が乱され頭が混乱した。全

ての感情が奪われてしまいそんな冷たさだ。こんなにも冷たい人間がいるだなんて。俺はこれから何されるんだ！不安と恐怖の嵐が岩男を取り巻き、絶望しか感じられない。

いつの間にか、二人の男も岩男から離れている。

岩男は女と二人きりだ。しかし、そこから逃れようと思っても、岩男は身動きが取れなかった。

何故なら、女に掴まれている両腕の触れたところが冷たさを通り越して痛くなり、感覚がなくなってきたからだ。まるで心までつかんでいるみたいだ。冷たさに、体全体が痺れ出して気力も体力も奪われていくようだ。もはや感情すら蒸発するかのようには抜けてしまい、自分が蛻もぬけの殻からになっていく様だ。

「乗りなさい」

女はそう口にする、相変わらず表情を崩す様子もなく、決まり切ったような動作で岩男の腕を全体に撫で廻した。そして、最終的に岩男の両手を取ると、力を込めないで自分の方に引き寄せた。

眼だけは自分を保っているからか、間近で女の体つきを上から下まで全部見る事が出来たが、体は全く反応する事もなく、岩男は女に操られるかのように、自分も龍の頭の上に乗ってしまっただけだ。

ああ、俺はもう帰れなくなる。

岩男はそう思いながら女の脇に座らされると、大人しくうずくまっていた。囚われの身になったのだからそうするのが当たり前前に感じられたいし、女がその冷たい手を体から離れた後も逃げ出そうとは思われない。女はそんな岩男を見ると、安心したような表情をして、小声で龍に何か言葉を発した。

すると、龍は首を持ち上げた。

一気に視界が高くなり、丘の上にいた男達が小さくなっていく。彼ら全てが岩男達に平伏しており、砂丘の上で頭を擦りつけていた。二人を乗せた龍は首をゆっくりと反転させると、音も立てずに体を動かして、そのまま岸とは反対に進んでいった。

思ったよりも振動が無く、龍はまるで滑るかのように青く燃える海

の上を進んでいく。女は龍の頭の上で何にも掴まらずに立っていたが、岩男は振り落とされないかと白い鬘たてがみを力強く掴んで、軽く触れられるほど近くから女を見上げた。

下から見上げると、彼女が透明な薄衣しか身に付けていないのもあって、裸の凹凸がはつきりと見て取れる。ケースに入った日本人形のような肌をしているが、顔立ちや体のつくりはまるで違った。顔のつくりは西洋人と東洋人のハーフのようであり、背は岩男と同じくらいだが、どちらかと言うと外国人の様な体つきだ。テレビの中でも十分通用すると思うほど、魅力的なルックスと体つきである。

しかし、岩男の気分が高まる事は無かった。

今はそれどころではないのだ。すっかり体が冷え込んでしまい、指を動かす気にもなれない。濡れた子犬の様縮こまって震えていた。二人を乗せた龍は、そのまましばらく青く燃え盛る海を進んでいった。岸からはもうずいぶん遠く離れてしまったが、青く燃える海はどこまでも果てしなく広がっている。

すると、岩男は徐々に自分の視界が下がっているのに気が付き、慌てて女の顔を窺った。

「あれ?・・・下がってる」

岩男がそう呟いたが、女は何も反応してこない。言葉を投げかけるのもおつくうになつていたが、岩男は何とか体を奮い起こして、首だけ外に出してみた。

すると、確かに龍が海の中に体を沈めていくではないか!

状況の深刻さに気がついた岩男は、恐怖の色を浮かべながら女に振り返ったが、彼女は涼しい顔を崩さない。

青い火の海はもう目前まで迫っている。

「た、助けてくれ!燃えちまう!」

岩男は叫び声を上げた。その瞬間、岩男の頭の中は、地獄の業火で灰になってしまう自分のイメージで埋め尽くされた。

しだいに、熱が岩男の頬を撫でる。

この女はここで俺を燃やそうと言うのか!

岩男は恐怖でパニックになり、隣にいる女を泣きそうな目線を送った。そして、確実にちびっていた。

すると、意外な事が起きた。仁王立ちしていた女が、岩男を強く抱きしめてきたのだ。

「行きますよ」

女は冷静な声でそう言うと、暴れそうな岩男に体を密着させ自分と龍との間に岩男を挟み込むと、両手で鬘を握りしめた。途端に女の花の香りの様な体臭が、岩男を包み込む。
行く？どこに？まさか、火の中に？！

岩男は暴れる事も出来ずに、ただその様子を目で追った。

もうすぐ青い火が迫っている。しかし、龍は止まりもしないでその中に入り込んでいく。

全てがスローモーションの世界だ。

今や龍の体はすっかり燃え盛る青い炎に飲み込まれている。

そして、数秒後には炎が目前に迫ってきた。

もう駄目だ……。

岩男は諦めたかのように目をつむり、体を震わせながら龍の鬘を握りしめると、声も出せぬままその青い火に飲み込まれた。

すると、不思議な事が起こった。

緑の目は水の中に！(前書き)

もしかしてそこはパラダイスなのでは・・・。

緑の目は水の中に！

岩男達はゆっくりとその炎の海の中に入っていったのだが、水面にたどり着くや否や、足の先からその青い火に包まれて靴が燃えだした。やがて、その炎はズボン、上着と燃え移り、気がつくと、岩男は下着も履いていない真っ裸になっていた。

ただ、痛くもかゆくもない。やけどもない。燃えたのは服だけだ。不思議はそれだけでは無い。

水面に入ると、いつの間にか上下が逆になっており、自分が入っていると思っっているのに、いつの間にか頭を水面に突き出しているのだ。前のめりで沈んでいると思っっていたのに、進行方向とは逆に顔を出している。屈折しているみたいなのだ。

それに、そこは水の中ではなく、違う世界が広がっていた。

さっきいたところの重苦しい空気とはまるで違う、穏やかな空気が岩男を取り巻いたし、まず明るかった。顔を出した途端に柔らかな明かりが照らされて、思わず目をつぶってしまったほどだ。

しかし、目が慣れてくると、辺りの様子がよく分かった。

そこは、まるで原色の世界だ。明るさと生命力で溢れていて、強張った岩男の心を一気に解放させた。

水面を境にして、あまりにも違う世界が広がっているだなんて。

岩男は驚きに目を見張り、興奮して思わず叫びそうになった。

さっきまで死を感じていた自分が嘘のようだ。

しかし、一番驚いたのは女の様子である。

彼女は気がつくと、岩男にびったり身を寄せて、まるで、長年連れ添っていた恋人のごとくしなだれかかっていたのだ。それに、さっきみたいに彼女の手に触れられていても、冷たくも痛くも感じない。それどころか、人肌程度の熱を放っていて、それが心地よく感じられた。岩男は裸なのである。しかも、完全に反応していた。

しかし、その女は表情一つ崩しもしなくて、岩男の傍にいるのが心

地よいかのように目を閉じていた。一つ気になるのは、その女の肌の感触がまるつきり陶器の様であるという事だ。最高級の白磁はくじで出来たマネキンみたいで、やや光沢があり、驚くほど滑らかなのだ。それに、ナイロンの様な質感の髪の毛は、艶々（つやつや）と輝きながら彼女の臍へそあたりまで伸びていた。

向こうの世界では、全体を舞妓さんの様にアップさせ、外側だけ内巻きにカールさせ肩口まで垂らした様な、見た事無いような不思議なヘアスタイルをしていたのに、いつの間にか滑らかなストレートヘアになっていて。まるで、乙女のようなのだ。

向うの世界の男達は粘土みたいであつたし、この女は陶器の様な体である。それを、岩男には全く理解できなかったし、どうしてこんな人間が存在しているのか知る由もなかった。

ただ、岩男はそれを受け入れた。理由は簡単だ。あまりにも彼女が魅力的だったからだ。

岩男は自分の胸の中で、子猫のように丸まっている、陶器の女なひやに囁ささいた。

「ここは？」

そう声を出すと、女はクスクスと笑いながら、さつきとは明らかに違う声色で答えてきた。

「ここは女の都よ。アヒハフバタクリン 緑の（ー）眼カスム」

女の都？緑の眼？いったい何の事だ？

それに、この女の、まるで、離れ離れになっていた恋人に会えて嬉しいような表情は何なのだろう。当たり前のように自分に向けている。勘違いしてしまいそうだ。

岩男は慣れない状況に戸惑い、女の艶なまめかしい香りに溶けそうになりながら、だらしなく口を緩ませた。

「緑の目？」

岩男がその口になると、女は細く白い指を、彼の胸に悪戯あくせうっぽく突き立てた。

「あなたの事よ」

女はまたクスクスと笑うと、突き立てた指先で自分の髪の毛を弄もてあそんだ。そして、また岩男に甘えるように身を寄せてきた。心臓の鼓動こころうごうが自分でも分かる。

緑の眼をした人って、・・・俺の事か？

なるほど、そう言えば、昨日から緑のカラーコンタクトをしたままではないか。今の今まで忘れていた。

あの爺さんが言っていた事は嘘ではなかった。本当に違う世界に来てしまったんだ！

自分の想像の枠を超えた出来事が、現実起きてしまった。まさか、こんな事が起きるなんて。違う世界に行きたいと思っていたけど、本当に来てしまうなんて。なんて事だ。

岩男は状況をうつすらと感じて、額に汗を滲にじませた。冷たい汗だ。ただ、驚いてばかりもいられない。

そうと分かれば、少しは考える事も出来る。

岩男は若干の冷静さを取り戻すと、また女に話しかけた。
「さっきのところは？」

女は岩男の顔を覗き込みながら、当たり前のように答えた。

「男の都アビハフチ」

男の都……。確かに男だらけだったけど、都って何なのだろう？女と男の都……。それがこの世界なのだろうか？

「君は？」

岩男は女の顔をまじまじと見た。

「女よアビハフイタ。緑の眼」

岩男は首を振った。

「いや、名前だよ。なんて言う名前なんだい？」

すると、女は裸になっている岩男の腹をゆっくりと指先でなぞりながら、甘えた様な声を出してきた。

「名前って何？それより、これを飲んで」

女はそう言ったてがみて岩男から体を離すと、龍の鬘たてがみの中を探りだし、深い白い毛の中から、紫色の液体が入った小さなクリスタルの小瓶を

出てきた。

何だ、それは？岩男は目を細めた。

すると、女は岩男の懐に入りながら、それをゆっくりと彼の鼻先で揺らした。岩男が女の表情を窺うと、彼女はうっとりした眼をその瓶に向けて、口元をゆるましている。大切なものでも見るかのようだ。岩男が同じようにその紫の瓶を見ると、いつの間にか女が潤んだ目で見つめていた。

「これは何だい？」

岩男が尋ねると、女は熱い息を吐き出した。

「小瓶よ」

岩男は首を振った。

「いや、中身の方だよ」

すると、女は艶めかしく体をよじらした。

「梵よ」

女はそう言つて、岩男の瞳を覗いてきた。

岩男は視線を投げ返す。二人はしばらく見つめ合った。

女性とこんな距離で見つめ合うのは何年振りだろうか？

白磁の肌は滑らかで皺もない。この女も男の都では冷たくて、硬くて、近寄りがたい感じだったのに、今はまるで逆だ。むしろ、完全に自分に惚れており、子猫の様に身を寄せて甘えている。

女の世界に戻ったからだろうか？

「梵？」

岩男は、興奮を隠しきれない様子でそう口にすると、鼻を膨らませた。すると、女は生暖かな息を、岩男の胸に吹きかけてきた。

「そうよ、梵よ。緑の目」

女はそう言つて、また紫色の小瓶を振った。それは、岩男の聞いた事のない飲み物であったが、警戒心は女の声にかき消され、好奇心と興奮が間欠泉のように噴出してくる。岩男のお粗末な代物はすっかり舞い上がっており、中身の事などどうでもよくなっていた。女の瞳は、岩男の言葉を導き出す。

「これを飲めばいいのか？」

岩男がそう口にする、女は身をよじらして、瞳を潤ませながら口を開いた。

「そうよ。美しいもの」

女は勿体ぶった手つきで、その紫の小瓶を岩男に渡してきた。彼女の手に触れると、すっかり熱を帯びている。

岩男の興奮は高まり、百円ライターほどの自分自身を為すがままにしながら、その小瓶を受け取ると、女がゆっくりと蓋を開けた。甘い匂いが漂ってくる。

「飲んで」

女の促すような声に、岩男は視線を彼女に映した。相変わらず子猫の様に甘えた笑顔のまま、その悩ましげな体全体で飲むように促してくる。岩男は思わず目じりを下げて口元を緩ませながら、もう一度、紫色に光る液体を見つめた。確かに美しい液体だ。光に翳すと、紫の光が岩男の顔を照らした。

岩男は一つ息を呑んだ。

「さあ、飲んで。緑の眼」

女に促されて、岩男は覚悟を決めた。そして、眼を瞑って天を仰ぐと、一気に喉にその液体を流し込んだ。

喉を微かに刺激しながら、その液体は体に入り込み、胃の中でシュワシュワと弾けると、アツといく間に体中にしみわたった。

岩男は思わず息を吐き出しと、目尻に涙を滲ませながら女を見た。すると、どうだろう！

体中が熱を帯びて来て、いたるところから力が漲ってきた。瞬く間に岩男の細い軟弱な体に隆々とした筋肉が盛り上がり、均整のとれた体つきになってきた。まるで雑誌のモデルの様である。

そして驚くべき事に、岩男のお粗末だった代物は、まるでびっくり映像のごとく天高くそそり立っていた。２リットルのペットボトルほどもあるだろうか。

岩男は驚愕の眼差しを女に向けたが、女の表情には驚きもなかつ

たし、岩男の股間にも目を向けてもいない。ただ、岩男がその液体を飲んだのを確認すると、穏やかにほほ笑みながら岩男に背を向けた。そして、龍に何やら呟くと、女は前方を指差して「見て」

と言って岩男にそちらを見るように促した。

男の楽園（前書き）

こんなところだったとは……。知らなかった！

行きたくなってしまうかも……

男の楽園

岩男が言われるままに辺りを見渡すと、いつの間にか辺りに霞かすみがかかっていて、その中心に島の様な陸地が見えた。

太平洋のサンゴ礁の様な平らなその陸地には、砂浜などは見え無かったのだが、波打ち際には真つ赤なものがふさふさと風に揺れているのが見えた。近くづくに連れて、その赤いものが大きなマツバギクの様な赤い草である事が見て取れ、徐々に陸地の遠くの方にまで視界が開けていった。

すると、赤い草原の中に、女性らしき人影が何十人も立っているのが見えた。岩男達を乗せた龍は、岸までたどり着くと、さつきみに首を伸ばして二人を陸地に降ろそうとした。

「着いたわよ。皆が待ってるわ」

女はそう言うと、岩男の手を取ってほほ笑んできた。

「彼女達は？」

女は口元を押さえて、恥ずかしそうに笑った。

「私と同じ女よ。アンピハファイタあなたの相手」

岩男は首をかしげた。

「俺の相手？」

どういう意味だ？岩男がそう口にする、女は明確に答えてくれた。

「快樂の果実リフティよ、緑の目。私達は、あなたの快樂の果実」

女はそう言って、顔を赤らめた。触れている部分から、彼女の熱い体温を感じる。

快樂！？もしかして、そう言う意味！？

岩男がそんな目線を女に送ると、彼女はいやらしく一つだけ頷いて、悩ましげな目を向けると、また体を岩男に密着させてきた。

岩男は悟った。興奮で目の前が真つ白になりそうだ。

全く女に相手にされてなかった俺を、何十人も女が待っているだ

なんて！しかも、遠目から見ても彼女の様な美人が揃っているみたいだ。信じられないけど、確実に歓迎されている。

岩男は震えた。

無論、恐怖からでは無い。少し前の岩男だったら、こんな状況でも勘ぐり、卑屈になり、ある種の恐怖を伴っていたのだろうが、今は違う。隅々まで力が漲り、みなぎ惚れ惚れする様な筋肉を纏った自信を携え、男性シンボルが見た事もなく隆起した今となっては、何も怖いものはない。どんとこいだ！

岩男は女に導かれるままに島に降り立つと、陸地一面を覆っている赤い草を踏みつけた。その草は肉厚で、柔らかく、潰れるとピンク色のジェルの様な滑り気の体液を出してきた。地面を全て覆っているから踏まずにはいられないが、滑ってしまいそうである。しかし、女は器用な足取りで、その上を上手に歩いた。

「早く来て！」

女はそう言ってきたきゃつきゃつと笑ったが、岩男はおずおずと、転ばないように足元を窺いながら足を運んだ。今から何十人も美女をお相手しなくちゃならない、選ばれた男の登場シーンとしては格好が悪いけど、滑って転ぶよりはましだ。

しかし、いい眺めである。

皆が自分の事を待ちわびている。あんなに女がいるけど、皆若くて美人そうだし、プロポーシヨンも最高だ。ほとんど裸みたいな恰好は、興奮をさらに高めてくる。

朝比奈楓よりもずっといいかも・・・。

「あつ！」

そこで、岩男は初めて彼女の事を思い出した。岩男は先導する女に、すかさず声をかけた。

「ところで、ここに、若い女が来なかったか？」

岩男が唐突にそう訊くと、女は急に立ち止り、今までとは打って変わった寂しそうな雰囲気ですく首を頂垂れた。

「来たわよ」

その言葉に岩男は激しく反応した。

「いつ?ど、どこにいるんだい?」

岩男は驚きのあまり、彼女に駆け寄り寄りとしたが、赤い草のぬめに足を取られて大胆に滑って転んだ。強く腰を打ち付けたが痛みは無く、そのまま岩男は女を見上げた。

女はそれを一部始終見ていたが、笑うでも無く言葉を続けてきた。

「あなたを向かいに行く前に来て、そして、・・・今彼女の迎えが来ている頃だと思っわ」

岩男は状況がよく飲み込めなかった。だから、転がったまま彼女に声を出した。

「彼女の迎え?彼女はどこに行くんだい?」

「男の都」

女がそうぼそつと言うので、岩男は慌てて立ち上がり、彼女に詰め寄った。

「何!?男の都だつて!?なんで行くんだ?いったい、彼女はどんなの?」

すると、女は口を開いた。

「あなたと同じ。男の相手をする」

女はそう冷静に言ってきたのだが、岩男はびっくりして大声を上げた。そんな馬鹿な!

「何だつて!」

そう叫んで女に掴みかからんばかりに前に進んだが、すぐ草のぬめりに足をとられて、つんのめると女の足元に転がった。

「い、今彼女はどこにいるんだ!案内してくれ!」

転ぶのにもめげずに、岩男が女の足元に縋りつくようにそう叫ぶと、彼女は岩男の頭に両手をそえた。

「今、彼女の迎えが来ている。もう、行ってしまっわ」

そう言つて、女は島のすぐ近くの海を指差した。

岩男がそちらに目を向けると、確かに朝比奈楓らしき人影が見えた。ピカピカに光っているジェル状の海の上を、あの粘土色の肌をした

男と共に、大きな角の牛に乗っておきにむかっている。

こうしてはいられない！

岩男は出来るだけ早く体を動かすと、何度も転びながら、楓の所に近づいて行った。赤い草はその度に、潰れて粘着質の透明な液体を飛ばしては、岩男の体を覆っていった。

「朝比奈！」

岩男が大声で叫ぶと、彼女もそれに気がついたようだ。こちらに振り返り、声の主を探しているかのように首を振っている。

その表情は少し笑っているようにも見えたが、必死な岩男には彼女が無理やり連れていかけるとしか思えなかった。

「朝比奈！行くな！」

岩男は何度も彼女の名前を叫んだ。何度転んでも、いくら赤い草を潰しても、楓のいる前を向き、それはもう死にも狂いで追いかけた。一緒にやってきた女と、待ち受けていた何十人の女は、驚きの表情を浮かべながら、自分達からそれて、左の浜辺へ向かう岩男の様子を目で追っていた。

ただ、本人は必死だ。岩男は息を切らせて、体中べとべとになるのもかまいもしないで突き進んだ。

しかし、追いつく事が出来ずに彼女と粘土色の肌の男を乗せた牛は、ゆっくりときらめく海を進んでいき、やがて体その中に沈めていった。たちまち、きらめく海に朝比奈がゆっくりと飲み込まれていく。そして、岩男が浜辺にたどり着く頃には、もうすっかり楓達の姿は無かった。

岩男はがっくりと項垂れると、紅い草原とジェル状の海との境目で膝をつくくと、悔しさで赤い草を拳で何度も叩いた。

くそ！男達の所に連れてかれてしまった！朝比奈が、あの粘土人達に。きつと、あんなことや、おこなことをされてしまうんだ！

ああ、なんて言う事だ！

自分が彼女を巻き込んでしまったと言う、やり切れなさや心苦しさを、目の前が崩れてしまいそうなほどだ。どうしていいのか分から

ない。岩男は力無くその場にうずくまった。

すると、いつの間にか、岩男の周りを陶器の女達を取り囲んでいた。その中から一人の女が岩男の傍に寄って来て、声をかけてきた。

「緑の目・・・」

龍に乗って岩男をここに連れてきた女だ。

「こつちに來なさい」

女はそう言つて、ゆっくりと岩男の肩に触れた。

すると、赤い草の滑りけで覆われた岩男の肩に、女の熱が伝わり、透明なぬめり気がその熱で湯気立ち始めた。

岩男は驚きで口をあけながら、女を見た。

なんだ、この熱さは！

一瞬の出来事に目を見開いたが、次にそこから悩ましげな香りが放ち始めたので、途端に目が虜になってしまった。赤い草の粘着質が熱で蒸発された匂いを嗅ぐと、岩男はたちまち体をふるわせはじめ、ついに立ち上がった。

「わーお!!!」

岩男は思わずそう叫んでしまった。

体中に興奮の衝撃が走り、絶え間ない衝動が駆け巡った。目が血走り、感じた事のないほどの感情が頭を埋め尽くしてくる。それは、絶え間なく押し寄せる、本能的な性の衝動である。

岩男の周りには、数え切れないほどの美女達。

岩男は裸でいきり立ってる。

彼女達は陶器のよう。

岩男は野獣のよう。

岩男が一番近くにいた、さっきの女の腕を掴んだ。

「どうすればいいんだ」

「私達を壊して」

女は身をよじさせて、そう答えた。

「何?」

「めっちゃめっちゃにして!」

女はそれだけ口にした。興奮状態の岩男には彼女が何を言っているのかよく分からない。ただ、突き上げてくるような衝動に身を任せただけだ。すると、女が岩男に抱きついてきて、体全体を密着させてきた。体全体が熱い。そして、女が触れた部分から赤い草の蒸気が噴き出し、一気にそれが二人を包んだ。どうやら、女もそれで興奮しているようである。

岩男はたまらず叫び出した。

「俺はどうすればいいんだ！」
すると、女は

「もう、それ以上言わせないで！」

と言つて、岩男に尻を向けると、艶めかしくそれを擦りつけてきた。そして、岩男の岩男たる部分に手を添えると、すっかり準備の出来ている彼女の秘めたところに誘った。

「きて！」

女がそう言つと、あつという間に、岩男は彼女に抱きついて、本能の為すがままに後ろから突き上げた。ぬめぬめとした粘着質に覆われているからか、女の陶器の様な肌もそれほど気にはならない。むしろ、良かった。しかし、岩男の中でまだ蟠りがあるのは否めなかった。今抱いている女には無い。この娘は最高だ。

ヒロインか目の前の美女か（前書き）

難しい選択なのか？いや、答えはひとつなのだ。

突き進むしかない！さあ。突け！いや突き進め！

ヒロインか目の前の美女か

岩男の頭に浮かんでいたのは、もちろん朝比奈楓の事である。

「彼女はどうなるんだ！」

女を抱きしめながら、岩男はそう叫んだ。ずいぶんと失礼な話ではあるが、彼女の事がどうしても気になって仕方無い。それがある限り、完全に楽しめそうもないのだ。ほんのいっかけだが、岩男の理性が残っていた。しかし、女の方はそれどころではないようで、一行に返事をしてこない。唸り声をあげてくるだけだ。岩男はもう一度声を上げた。

「彼女は向こうで何されるんだ！」

すると、女は呼吸するのも大変なほど悶えながらも、息をもらしながらそれに答えた。

「分からない！分からない！」

女はそう言つて、また悶え始めた。快樂におぼれて、それどころではない様子だ。声にならない声を発している。

岩男はさらに女に叫んだ。

「どうすれば彼女に会える?!」

すると、女は体を震えさせながら、
「堪忍してえ」

と言つたので、岩男は首を振つた。

「もっと、もっと！」

女はそう言ってきた。

「やめるぞ。言わないと止めるぞ」

岩男は動きを止めた。すると、女は首だけ振り返り、岩男に懇願するよつに、声を出した。

「私達を壊して。全て壊して！」

「い、意味が分からん！」

「とにかく壊して！そうすれば会えるかもしれない」

そう言うと、女は自分から体を動かさし始めたので、岩男はそれを見下ろしながら、彼女の両手首を掴んだ。とにかく壊れる事がお望みらしい。

岩男は体中の力を振り絞って、これ以上無いほど体を動かした。激しい動きに、女は断末魔の声を上げ出し、やがて岩男の掴んでいた両腕にひびが入り始めた。細い亀裂が岩男の持つている所から無数に走り出して、その指が彼女の体にめり込んだ。岩男はそんなこと気にもしないで動き続けていたが、力を込め続けると、その拍子で両手が大きく取れてしまった。岩男は体を後ろにそらせてひっくり返りそうになって、慌てて彼女の残っている両腕を掴んだ。

びっくりして、声を出しそうになったが、それ以上に快楽が岩男を取り巻いた。さらに腕を掴んで、体を動かすと、今度はその腕もまるで陶器の様に粉々に砕け散っていった。

女は両腕が無い状態である。しかし、それでも尚彼女は下半身を岩男に突き上げてきたので、岩男はこれでもくらえ！と腰の部分を持ち、さらに激しく体を動かした。

「きて、きて！」

「おりゃ、いくぞ！」

岩男はそう言つて、ギアを六速に入れた。すると、女は言葉にもならないような金切り声を上げ、それと同じくして、顔や体のいたるところに亀裂が入りだした。岩男はまた驚きながらも、自身の快楽におぼれてしまい、動かす事を止められない。むしろ激しさを増し、どんだん力を込めて言った。

「壊れる（トウタナー）！」

女がそう叫ぶと、女の体は粉々に砕け散り、後にはかがんだ状態の岩男だけが取り残された。心臓の音だけがバクバクと波打っていたが、岩男はまだ途中なのであつて、本当の意味で取り残されてしまった。本当に砕けちまったのか。周りには彼女の破片が散らばっており、やがてそれは砂となって大地に吸収されてしまった。

岩男がそれを見届け、情けないような顔で周りを囲んでいた女達を

見た。すると、一人の女が辛抱出来ない様子で岩男に駆け寄ってきて、岩男を赤い草の上に押し倒した。その衝撃で、岩男とその女はすっかりピンクの粘着質まみれになってしまった。

女は岩男に馬乗りになると、いきり立ったままの岩男自身を手にもった。彼女の手は、砕け散った女より少し熱い。粘着質がまた蒸発して、岩男も女も体をくねらせた。

「私も壊して！」

女はそう言うなり、勝手に体を動かし始めた。岩男は寝ころんだまま、まったく楽なものである。自分の上で体を動かす女をじつくりと眺めると、草の効果もあつてかとても心地が良かった。興奮がとめどなく体を突き上げ、いても経つてもいらなくなる。

それに、女はまったくの完璧であり、理想の形だ。これで、体の感触が柔らかくて、表情があつたならもう文句のつけようがない。

しかし、彼女はどうか考えても、陶器の人形その物なのだ。

それに……。

「壊れる(トウタナー)うーう！」

女はそう言つて、岩男の上で砕け散つてしまった。岩男の顔にその破片が当たり、すぐに砂になつてしまった。

そう、こつやつて砕けてしまうのだ。

自分と寝た女が砕けてしまうなんて、これほど後味の悪いものは無い。しかも、もつとも残念な事に……いや、それが分かるのももう少し先の事だ。

そんな岩男の心境など察してもくれないで、女達は次々に岩男に飛び乗ってきた。さまざまな体形の、さまざまな表情の陶器の女達は、赤い花を岩男の口に詰め込んでまで、その行為を繰り返しては、次々に絶頂を迎えて砕け散つていった。

そして、残念な事に、岩男はまだ一回も果ててはいないのだ。当然のことながら、こんな事岩男は初めての経験である。以前なら、塩の一つまみほども考えられなかった事だ。むしろ望んでいた位だ。しかし、いざそうなつて見たら、これは、快楽を伴った地獄と言つ

てもいいものを感じた。しかし、悲しいかな、いつまでも股間はいきり立ったままだし、衝動も収まる事はない。

ただ、そうして女達を砕け散らしていく度に、岩男の中で一つの決意が揺ぎ無いものになっていた。

朝比奈楓を救わねば！

岩男の中でその思いは積もっていき、三十人ほど砕け散ったところで岩男は立ち上がると、自分から女達に襲いかかっていった。

こうなれば一刻でも早く、朝比奈の所に向かわなくては！

あの女は言っていた。全ての女を壊せば、向こうの世界に行く事が出来ると。なら、ここに居る全ての女を壊してやる。

岩男は眼を血走らせると、手当たり次第に陶器の女達を抱いて行つては、上へ下へと砕け散らした。もう数など数えてられなくて、ただ、ひたすらに砕け散るまで体を動かし続けては、次々と果てさせて、彼女達を昇天させて行つた。

そこら辺にある紅い草が皆潰れて、その地がカラカラになると、今度は場所を移して女達をもて遊んだ。

ここまで来ると、まったく楽しくなくて、まさに仕事になってしまふ。ただ、壊すという行為だ。

しかし、本当に悲しい事に、そこまでいっても岩男自身はいきり立ったままだし、常に強制的とも思えるほどの衝動を伴っていた。赤い草もどれほど食べさせられたか分からない。それに、女達もそれをいい事に、勝手に求めてくるから岩男にもどうしようもなかった。されるがままで。

しかし、そんな中でも朝比奈の事だけは頭の中にしっかりとあった。朝比奈に会うために、彼女達を全員昇天させなければ。

だから、岩男は頑張った。これまでにないほど頑張った。

そして、ついに、残り最後の女を目の前にしていた。

再び闇の中に！（前書き）

大切な人のためには、ばあさんも抱かなきゃならんです！
乗り越えて大きくなるのだ！岸本ばあさんか！っての！

さあ、再び水面に戻っていきますよ！

再び闇の中に！

その女は、見た目は完全に老婆だった。他の女達は皆砕け散り、陸地の奥に座っていた彼女だけが取り残されたのだ。肌は素焼きのようにならざらざらとしており、腰も曲がって明らかによれよれとして足元もおぼつかない様子だ。八十歳は超えているだろうか？

明らかに、現役を退いてきた感じではあるが、しっかりと化粧を施されており、その眼はやる気満々である。

ただ、岩男はそれでもいきり立っていた。

彼は、そんな自分自身に呆れながらも、一つ呼吸をおいて、老婆に話しかけた。

「あんたで何人目だ？」

息を荒げながら岩男が訊くと、老婆がゆっくりと答えた。

「そんな前置きしなくても、わしや準備できとるで」

「いいから答える！」

「何や、はよせんか！」

流石に疲労もあり、苛立ちが募った。

「俺は何人目なのか聞いてるんだ！」

すると老婆は、もじもじしながら口を開いた。

「いけずやな、緑の眼は。百八人目でっせ！」

百八……。もう、百七人も壊してきたのか、この俺が！

信じられないけど、実感は十分にあつた。ギネスもびっくりだ。

岩男は何だか、可笑しくなって笑いそうになったが、肝心な事を聞くのを忘れなかった。

「どうやったら、男の都に行けるんだ」

すると、老婆は寝ころびながら足を開いて、岩男を股越しに手招きしてきた。

「とにかくきんしゃい！」

岩男は頭が痛くなつて、頭を掻いた。なんで最後にこんな事にな

るんだ。この人までずっと若い美人が続いていたのに。しかし、ここまで来て諦める訳にはいかない。もうどうにでもなれだ！

岩男は仕方なく老婆に覆いかぶさると、自分の衰えを見せない精力に呆れながらも、大きく息を吐き出した。

「久しぶりの男じゃあ」

老婆は悶えたが、岩男は面倒くさそうに口を開いた。

「男の都に行くにはどうすればいいんだ？」

「行く、行く」

老婆がそう言ったので、岩男は慌てて動きを止めた。気がつけば老婆の体から砂埃すなほこりが立っている。砕け散ってしまったのは、聞きたい事が訊けない。それでは楓を助には行けない。

岩男は焦った。

「どうしたらいいんだ？砕ける前に言ってくれよ！」

「私の事を、世界で一番綺麗とお言い」

岩男は頭に来て少し力んだが、老婆の体に亀裂が走ったので、慌ててそれに従った。

「世界で一番綺麗です」

すると、老婆がうつとりして嬉しそうな顔をしたので、岩男はたまたま老婆の腕を握り砕いてしまった。

あまりにも脆い。

老婆は驚いた様子もなく岩男の上に乗ると、岩男を見下ろしながらもぞもぞと口を開いた。

「岬に立って、龍を呼べばいい。あの子の名前を呼ぶのじゃ。ウラーガと」

岩男は音を出さずに「ウラーガ」と呟くと、上で揺れ動く老婆に一気に力を加えた。すると、老婆は声も上げられずに、激しく崩れ出して、あつという間に砕けて砂になってしまった。

ふうう、やり切った。

岩男は一つ息を吐きだすと、ゆっくりと立ち上がって腰を押さえながら歩き出した。股間を覗くと、信じられないが、まだ果てもして

なかったし、その勢力も保ったままだ。なんだか、虚しさすら感じてしまい、不完全燃焼感も漂ったが、肝心な事は忘れてはいなかった。岩男は顔を上げた。

気がつくのと、さっきまで赤くふさふさとしていた草は紫色に変わっており、甘酸っぱい匂いを発している。岩男は頭がくらくらとしながらも、男の都にいるだろう楓の事を思い浮かべて、走り出さずにはいらなかった。

あの子が向こうの世界であんなことやこんな事、自分がこっちの世界で女達にしてきた事をあの粘土人達にやられていると思うと、気がでは無かったし、勝手に嫉妬しつとしてしまう。

ただ、今彼女を救えるのは自分一人しかないのだ。それが、岩男を突き動かしていた。

こんな訳の分からない世界で、きつと彼女は困惑して、恐怖に駆られているだろう。そんな彼女を守り、慰める事が出来るのは、この世界で自分しかないのだ。ただ、一人、自分だけ。

岩男の中で、今まで感じた事の無い揺るがない決意が、熱い熱を持ちながら煮えたぎった。それは、見違えるようなに変わった筋肉質の身体と、陶器の女を続けざまに百八人も壊してきた自信と相まって、臆病で卑屈な自分を忘れさせ、代わりに勇気をもたらした。

「ウラーガ！ウラーガ！」

岩男は岬にまだ差し掛かってもないのに、駆け出しながら声を張り上げた。紫色の草はもうすっかり粘着性を失っており、空もさつきまで眩しいくらいに明るかったのに、いつの間にか薄暗くなっている。世界が変わっていくようだ。嫌な予感もする。

岬に着くと、海は波もなく穏やかではあったが、前の様に透明度は無く、うっすらと濁っているように見える。

「ウラーガ！出て来い！ウラーガ！」

岩男が力の限り海に叫ぶと、不意に生暖かい風が岩男の頬を揺らし、前方の海の中に白い大きな影が見えだした。やがてそれは大きな白い盛り上がりとなり高い波を作ると、岩男の所までジェル状の

飛沫を飛ばした。

すると、立ちすくむ岩男の目の前に、あの龍は姿を現した。

龍はここに連れてこられた時のように、のっぺりとした顔に大きな黒い眼を瞬かせながら、海から首を高々と突き出していた。その黒い瞳は、まっすぐに岩男に向けられていた。向き合ってみると、五階建てのビルくらいのおおきさである龍はかなりの迫力があり、人なごきで吹き飛ばされてしまいそう。

しかし、岩男は恐怖も感じないまま、龍に声をかけた。

「ウラーガ、俺を男の（ー）都デスに連れて行ってくれ」

岩男がそう言うと、龍の低いうなり声が響いた。

「アビバフィット デス」

生臭い息が、岩男の頬を撫でる。それを腕でふさぎながら、岩男は大きく頷いて、もう一度声を張り上げた。

「そうだ。そこに俺を連れてってくれ」

すると、龍は首を大きくもたげ、大きな黒い瞳を岩男に真っ直ぐに向けたかと思うと、ゆっくりと頭を岩男の傍に運んできた。そして、頭の上に乗れ、と言わんばかりに近づいてきたので、岩男はその頭の上にある白い鬘たてかみを掴んで、龍の上に乗り込んだ。そして、来た時と同じように、しっかりとまたがると、岩男は龍に聞こえるように声を出した。

「さあ、急いで行ってくれ！」

すると龍は「アヤ クシユダ」と低い声を出すと、岩男を乗せたまま首を起こし、ゆっくりと反転すると沖に進んでいった。

岩男が乗り慣れていないせいか、龍は頭をゆらゆらと揺らしたので、乗り心地はそこまで良くなかったが、確実に楓の元に進んでいるのは間違いない。この海の中は、またあの、粘土人の世界つなに繋がっているのだろつ。

そこに楓はいる。

かなり時間が経ってしまっではいるけど、楓が無事である事を祈るしかない。心配だけど、とにかく今は向こうに行くことだけを考え

よう。どんな事が待ち受けていようと、そこに向かうのは自分の使命だ。きつと、彼女だつてそれを願っているはずだ。

岩男はそう思いながら龍にしがみつくと、自分の体に目を配った。そして、急に冷静になった。

今の自分は丸裸なのだ。

あの女がくれた飲み物のせい、筋肉が隆々としたままだったし、何より一向に収まりのきかない一部分は、未だその勢力を保ったままである。こんな姿で彼女の前に出ていったら、いったい何を言われるか分かったものじゃない。何より、丸裸なんて、これからヒロインを助に行く格好じゃない。

ターザンだつて腰巻くらいしているのに！

岩男は龍の頭の上で、右往左往しながらどうしようかと思案を巡らせていたが、そんな事をしているうちに龍は徐々に海の中に潜っていき出した。なので、岩男は龍の頭の上から「ちょ、ちょっとま、ちょっと待つて」と声を出したが、龍には届いていないようで、あつという間に海は岩男にまで迫ってきてしまった。

間に合わない！

岩男は観念したかのように龍の鬣にしがみつくと、そのまま一緒に海の中に入っていった。

前と同じように、不思議な感覚に陥り、岩男は入っているのにもかかわらず、それとは反対の角度で出ていった。

顔を出してみると、前は青く燃えていた海も、今はもうすっかり燃えてはいないようだ。灰色のジェルの海が静かに広がっている。オレンジに光るウラーガの眼だけが唯一の光源だ。

しかし、しばらく進んでいると、真っ暗で何も見えなかった景色の彼方に小さな明かりが灯されているのが目に入り、それは龍の進む速さに合わせて、徐々に大きくはつきりと岩男の眼に捉えられた。

その明かりは、女の都に行く前に砂の中から突き出た、あの四つの塔の上で灯っていた。何が燃やされているのか分からないが、めらめらとオレンジ色の炎が立ち上がっている。砂丘の向こうまでは見

る事は出来ないのです、その下の様子は分からないが、あそこに楓がいるのは間違いない。

岩男は目を凝らしてその明かりの方を見たが、分かるのはそれくらいだ。気だけは焦り、体がうずうずとして、まったく落ち着かないなのに、龍はマイペースにゆっくりと進むだけだ。

「もっと早く進んでくれ！」

岩男はたまらずそう叫んだ。もたもたしていたら、楓の身にさらに危害が及ぶはずだ。ただ、龍の反応は鈍いみたいだ。岩男が頭の上で何度も叫んでいるのは聞こえているのか、龍は低い声でそれに何かを返してはいるのだけど、一向にスピードを上げる様子はなかった。それがどうにもじれったくて、岩男はいらいらしてしまう。

「おい、聞いてんのか？早くしろって言うてんだ！」

岩男はそう言うのと、我慢しきれなくなつて龍の頭を叩きだした。

弾力のある肌は中々叩きがいがあつて、しかも、銅鑼どらの様な音がした。岩男はそれもあつて、どンドン叩いていったのだが、不意に龍がその動きを止めると、岩男も叩くのをやめた。

なんだ？

岩男がそう思つて龍の顔を覗き込むと、龍は「ハピダ！」と唸りを上げた瞬間、大きく首を振り回して、体をのけぞらした。二十メートルはあるだろう首は岩男を乗せたまま勢い良く後ろにしなり、一瞬力をためるかのように動きを止めた。

「ま、待て！」

岩男は叫んだ。しかし、遅すぎた。龍はそれを合図にしたかのように首を動かすと、鬣げにしっかりと捕まっていた岩男を空高く吹き飛ばした。

「うわああーあーあー！」

岩男はあまりの事に叫び声しか上げられないで、天高く宙に舞いあがると、その勢いのまま前に飛んで行った。

クルクルと回転しながらも、岩男の視界にはあの四つの明かりが目に入ってくる。それは瞬くまに近づいてきて、一瞬だけその周り

にいる男たちの姿が目に入ったかと思うと、ちょうどその場所に飛んでいった。真っ直ぐに姿勢をただした岩男は、地面にぶつかり何度もバウンドしたかと思うと、そのまま大きな音を立てて砂地にめり込んだ。

女王再び（前書き）

男達はヒロインを崇拜しているのか？
主人公の入る余地はあるのか？

今、男の戦いが始まる！

女王再び

そこにいた男達は突然の出来事に、何が起こったか分からないまま反射的に岩男の傍に寄ってきた。そろそろと、何十人も粘土色の男達が岩男を取り囲むと、その中心で地面にめり込んでいた足がびくびくと動いた。そして、落下物はゆっくりと全体的に動き出すと、その全容を露わにした。

岩男が地面から這い上がってくると、粘土の肌をした男達は一斉に体をのけぞらせて、警戒するかのように距離を取った。驚きと不安の入り混じった目が、四つの明かりに照らし出されているのがはっきりと分かる。まさか、こんななものが降ってくるなんて思ってもみなかったのだろうか。

それは、岩男も同じである。まさか、ここまで飛ばされるだなんて！あの龍め、しつげがなっていない！飼い主出てこいや！

いや、龍の飼い主は全部壊しちゃったな、くそ！

岩男はゆっくりと体をもたげた。全体的に打ち身はしているが、痛みはそれほどでもない。骨が折れているかも、なんて思ったが意外にもこの砂が柔らかくて、クッションになってくれたようだ。立ち上がって自分の体をよく見てみると、すっかり全身砂まみれになっている。あの赤い花の粘着質が体中を取り巻いていたせいか、それと砂が肌の上で混ぜ合わされて、コンクリートみたいな感じで固まってしまうていた。顔も目と鼻と口以外全部そんな感じだ。それに、あろうことが、股間には大それたコンクリートの塊がぶら下がっている。

これでは、岩男もまるでこの世界の男みたいではないか。粘土色に似た自分の姿を思い浮かべて、岩男は笑い出しそうになったが、周りの男達は少しも笑ってはいなかった。

なので、気を取り直して男達の前で仁王立ちすると、威勢よく声を張り上げた。

「彼女はどこだ！」

岩男がそう叫ぶと、男達が言葉も発しないまま一斉に道を開けたので、砂から盛り上がり上がってきたあの玉座の所まで一気に視界が開けた。岩男は体をビクリと震わせたが、彼らが何もしてこない事を確認すると玉座に視線を移した。

そこには、朝比奈楓が座っていた。

その岩で作られたような硬い玉座に、彼女はまるで女王様のごとく座って、気分良さそうに寛いでいた。そして、岩男に気がつくとき、一瞬顔色を曇らせたが、岩男が手を振ると、笑顔になって高飛車な態度で手を振り返してきた。

「朝比奈！」

岩男がそう言って、少し重たくなった体を懸命に動かしながら走っていくと、彼女は急に不機嫌に顔をして、偉そうに足を組み直した。そして、近づいてくる岩男に横顔を向けて、片手でこれ以上近寄らないかのように制してきた。

「誰？私を呼び捨てにするなんて」

すっかり女王様の口ぶりだ。岩男は懸命に自分の顔に着いた泥を剥がし落とすと、十段ほどの階段を上り、彼女が座る玉座の近くに手をついた。まるで、楓の足に縋りつかんばかりである。

「俺だよ！一緒に雪にダイブした、下田だよ！」

息も絶え絶えにそう口にする岩男に、楓は分かり切った事を聞くかのように、つまらなそうな声を出した。

「ああ、あなた。生きてたのね？すっかり変わってるから分からなかったわ」

「こうなるまでには深い訳が……。いや、それより大丈夫なの？」
岩男が慌てたように楓に近づこうとすると、彼女はそれを拒むかのように顰面すると、岩男に手の平を向けて必死で振った。

「何、私は大丈夫よ！何も問題ない。それより、あなた少し変な匂いするわよ。近づかないで！」

岩男はきょとんとしながら、自分の体を見て、鼻を近づけた。

そんなに臭いか？あの、赤い草の粘着質の甘酸っぱい匂いなのだろうか？そんなに臭うか、俺？

岩男は首を捻ったが、すぐに顔色を変えた。

いや、問題はそんな事じゃない。それよりもこの女は自分がこんなに心配しているのに、この態度はどういう事だろう。納得が出来ない。もう少し、いたわる様な事を口に出るのだろうか？

岩男の表情を察知したのか、楓から先に口を開いた。

「それに、呼び捨てにするなんて。私はここの女王様なんだから、口のきき方に気をつけるのね。いい？分かった？」

そう言つて、高飛車に見下ろしてくる楓を見ながら、岩男はあつげにとられてしまった。

自分で女王様だなんて言つちやつてる！顔が真面目だ。完全になり切つてるじゃないか！なんて言う事だ。意味が分からない。

「どういう事？」

岩男にはそう口にするのが精いっぱいだ。

「だから、この人達は、皆、一人残らず私の僕なの」

僕？性の奴隷にされているのじゃなくて？向うで女が口にしたのはその様な意味だと捉えていたのに、違うの？女王様と性の奴隷とはまるで意味が違う。真逆ではないか！

「え？変な事されなかつた？性の奴隷になつたんじゃないの？」

驚き交じりの顔をしながら、岩男がすつとんきよな声を出すと、楓はあからさまに嫌な顔を向けてきた。

「せつ・・・！何バカなこと言つてるのよ！そんな事される訳がないじゃない！頭おかしくなつたんじゃないの！ばか！」

軽蔑と侮蔑を混ぜこぜにした様な感情を一気に放出され、岩男は面喰らつて尻もち付きそうになつた。

そこまで言わなくても・・・いや、それより自分が彼女の事を心配して、あそこまで頑張つた意味などまるでなかつたのだ。自分の努力と苦勞が意味がなくなつてしまい、目の前が真っ暗になる。おりゃ、婆さんとまで・・・、何のために！くそ！

岩男はすっかり力を落として、ついにその場に膝をついてしまった。すると、そんな岩男を見下ろしながら楓は高笑った。

「あなたも僕になりたかったら、なつてもいいわよ。ここは、甘いものと、お酒が無いのが難点だけど、まあ、勘弁してあげる」

僕にだど!? 俺はそんなにはならん! 断じてならん! 岩男は彼女に対する憤りで、胸のあたりがむかむかど沸き立つのを感じた。確かに、一方通行の思い込みから自分は行動した。しかし、心配している自分に投げ返す言葉が「僕にしてもいい」は無いだらう。考えられない!

岩男は自分の顔についた泥をすっかり剥ぎ落とすと立ち上がって、楓に近づこうとした。

すると、楓の隣に立っていた二人の粘土人男が、それを遮った。二人とも岩男より背が高く、スタイルも良くて、表情は全く変わらず固まったままだけど、どこからどう見ても美男子だ。

楓は男達の間から、岩男に声をかけてきた。

「彼らは私のボディガードよ。私が任命したの。ここに連れてきた人が何でも言う事聞くなって言うから、そうしてるのよ。私が踊れって言ったら踊ったのよ、皆が。私を楽しませてって言ったら、皆で私を崇拜してくれて、踊り出したのよ」

楓は感情の高ぶった様な声を出して、玉座の上から高らかに腕を上げた。全てが自分に従っているという優越感に酔いしれているようだ。粘土人達も彼女に跪いて、完全に服従している様子で、完全に女王のそれである。

しかし、岩男はすっかり気持ちが悪えていた。

楓はすっかりご機嫌なじゃないか。あんなに心配したのも完全に無意味じゃないか。道化もいいところだ。そりゃあ、自分も楽しんだけど、楓の事があったから、自分は人形女達を壊し続けたのに。最後は婆さんまで粉々にしたのに。

岩男は、完全に自分の感情のはけ口を見失ってしまった。

その時である!

突然周りを取り囲む柱の炎が十メートルほど噴き上がり、にわか
地面が盛り上がってきた。すさまじい振動と共に、玉座と、岩男と
楓、そして、男達全員がいる辺りが空高くせり出して来て、まるで
アリゾナの砂漠でよく見られるメサみたいに、空高く地面が盛り上
がってきたのだ。訳の分からない状況に、岩男は床にへばりつき、
楓は金切声かなきりこえを上げながら眼を瞑って、玉座の背もたれにしがみつ
いた。粘土人達は頭を大地にすりつけたままだ。

四十メートルほどせり上がったところで、大地の揺れは弱まり、や
がてそれは止んだ。崖は九十度を超えるほど切り立っており、とて
も素人が道具なしには下には降りれない感じた。振動が止んだので、
岩男が顔を上げながら楓の様子を窺うと、彼女は泣きそうな顔をし
ていて震えていた。こんな事が起きるとは、まるで予期してはいな
かったようだ。岩男は慌てて楓の傍に駆け寄った。

気がつくのと、粘土人達は玉座の前に綺麗に整列しており、誰もが玉
座に向けて跪つひいていた。柱から噴き上げる炎が、空気を吹き上げる
音だけが響いている。楓は不安そうな顔で岩男を見上げてきた。

「どうしたの？」

楓の小さな声が、やっと岩男の耳に届く。彼女は震えていて、す
っかり縮こまっている。玉座の傍には岩男しかいなくて、いつの間
にかあの二人のボディガードも、玉座に続く階段の下で跪いてい
る。岩男は辺りの様子を窺いながら、玉座の背に手をかけると、首
を振りながら言葉を吐き出した。

「分からない」

「今からどうなるのかしら？」

楓は声を揺らした。恐怖で表情が歪んでいる。

岩男は噛み砕く様に言葉を発した。

「それは・・・分からないけど、様子を見るしかないよ」

「今から何が始まるの？」

「分からないよー！」

「もう！何が起こってるのよー！」

楓はそうヒステリックに声を張り上げると、玉座から立ち上がるうとした。なので、岩男が彼女に手を差し伸べようとすると、楓はそれを拒否した。

「触らないでよ。変な匂いが付くじゃない！」

「今そんな事言ってる場合かよ！」

それでも楓は首を振った。

「嫌なものは嫌なの！」

楓のその言葉を聞いた時、岩男は困惑を通り越して瞬間沸騰した。頭に来る！

何なんだ、この女の我が儘わがままさは！

俺がどんな思いをして、ここまで来たと思ってるんだ！

「触らないで!?!」ふざけんよ！俺は助けに来たのに！

「嫌なものは嫌?!」状況を考えるよ！

大体、お前がああ雪に飛びおりよう！なんて言ってきたからこんな事になったんじゃないか！そうじゃなきゃ、ここで裸みたいな姿になる事もなかったし、こんな訳の分からない事に巻き込まれる事もなかったんだ！顔がいいからって許されると思ってるのか!?!

岩男は楓を睨みつけた。そして、それらの罵詈雑言を寸でのところ
で口から出しそうになった。いや、岩男の気持ちとしては、すでに
口から出ていた。

迫る戦い！（前書き）

男達の祭りが今始まる！

求めるのは美女一人！

さあ、主人公はどうするのだ！

迫る戦い！

しかし、それと同じくして、粘土色の男達の一斉唱和がそこら中に響いたため、岩男の言葉はそれに飲み込まれ、かき消されてしまった。岩男と楓は、反射手に粘土人達の方に顔を向けた。

粘土人達が言っていたのはこんな内容だった。

「時は来た。女王は玉座を占め、気分を良くしてる。

時は満ちた。女王はその身をささげ、我らを導かん。

我らは男。男は僕。

選ばれし僕、今、女王の片割れにならん。

選ばれし僕、今、女王と結ばれん。

選ぶは女王。女王が選ぶ。

女王に選ばれし、男。それは誉。

その者、女王と永遠の契ちぎりを交わし、今世界の父とならん。

我らは一つ。一人の為に。

今、女王に選ばれん」

彼らは歌い終わると、一斉に立ち上がった。そして、一番前にいた一人の老人が玉座の前に歩み出て来て、二人の前で立ち止まった。

すると、老人の合図で、皆一様に粘土人達は立膝を付いて、玉座に首を垂れた。まるで戦いに行く戦士の様だ。

その老人は、膝を曲げて丁寧にお辞儀をした後、震えるような声を出してきた。

「時は来ました。さあ、お選びください」

老人は、明らかに楓だけを見て、言葉を発していた。岩男の事は見えないかのようにふるまっている。

楓は岩男に助けを求めるような視線を送ってきたが、岩男にも自体

は呑み込めなかったので首を振るしかなかった。

しかし、楓が眉間に皺しわを寄せて、身振り手振りで促してきたので、岩男は仕方なく老人に向けて声をかけた。

「どういう意味ですか？選ぶって？」

しかし、老人はぴくりとも反応しなかった。他の男達もそうである。岩男は辺りを見回したが、ちっとも返事が返ってくる様子が無いので、肩をすくませて楓を見た。彼女は明らかに頭に來ており、「使えない奴」なんて悪態が飛んできそうな目線をしていたが、老人に向き直ると今度は自分で同じ質問をした。

「それはどういう意味なの？言つて御覽なさい」

まるで本物の女王様のような口ぶりだ。老人は深々と頭を下げた後、礼儀正しい口ぶりでゆっくりとそれに答えてきた。

「契りを結ぶ相手を一人、選んでいただくのです」

「契りつて？」

岩男が口を挟んで「やるつて事だよ」と言うと、楓はびっくりしたような顔をして、眼と口を大きく開いて見返してきた。彼女はここで、ようやく事態を飲み込もうとしていた。

一方、老人は岩男の事などいない顔のように、また深くお辞儀をした後、楓に向かつて恭やうやうしく答えた。

「交わつていただき、また新しき命を宿していただきます。ここに
いる我々はそうやって、ここに生を受けております」

「私が・・・選ぶの？」

楓は目を細めながら口を開いた。すると、老人は頷いた。

「そつでございませす」

「一人だけ？」

「その通りでございます」

楓は少し考えを巡らした後、もう一度老人に訪ねた。

「他の人はどうなるの？」

「皆、この崖から身を投げます」

「え？」

楓と岩男は顔を見合わせた。そして、玉座のすぐ後ろに広がる切り立った崖に、同時に視線を映した。眼下には暗闇が広がっていて、崖の下は全く見えない。岩男は顔を青くして、冷たい汗を流した。とんでもない事態になってしまった。一人を残して、皆が死んでしまつと言つ事か？要するに、楓と楓の選んだ男との、二人の世界が出来上がると言つ事になる。エデンの園だ。選ばれた者は生き残れるのだからけど、臭つて近寄るのも嫌がられる様な人間はまず論外だろう。生き残れないと言つわけだ。

じゃあ、いったいどうなるんだ、俺は！粘土人はそれで迷い無く崖から飛び降りるのかもしれないけど、俺はこの女に選ばれなかったというだけで死ぬわけにはいかない。大体、そんな気持ちになれない。なれるわけがない！

だいたい、選ばれなかったからと言って、皆が死んでしまうなんてそんな権利を、あんな傲慢ごうまんで、気分屋の女に握らせてしまうなんて、どうにも考えられやしない。俺はそんなんでは死んでも死にきれんぞ！

岩男はそう思うと、眼を血走らせながら楓を見た。すると、彼女は事の成り行きに全く付いていけない感じの、困惑した表情を浮かべていた。しかし、何とか自分を保っているのか、瞬きもしないで、老人に問いかけた。

「誰も助からないの？その、私が選んだ、・・・一人を除いては」
すると老人は、また恭しく頷いた。

「そうでございます。席は一つだけありますので。そうして、選ばれた男と新しい世界を作ってもらつ事になります」

その言葉を聞いて、茜は慌てて声を出した。

「もしかして、まさかだけど」茜はそこで、一つ息を呑んだ。

「今いる人は、そうやってここにいるわけ」

すると、老人は素早く返答した。

「そうでございます。私を除き、皆母みなは同じでございます」

老人が答えると同時に、茜は声を張り上げた。

「まさか、一人の人が生むの？こんなに！？」

「その通りでございます。女王は、百七の命を生み出したのち、その姿を石となし、光り輝きます。あそこにある水晶のように」

老人がそう言うと、二人は中心にある、すっかり割れて輝きを失っている水晶の塊に目をやった。要するに、百八人も子供を産んだ後に、死んで石になると言う事なのだろう。彼らを生んだ母がどんな人物か知らないが、あんなに綺麗で大きな水晶になっているのだから相当な女だったのだろう。どんな状況で選ばれたのかは知らないが、しつかりと百七人の粘土人を生んだのだから、それだけでも相当な事だ。

ただ、今回の該当者^{がいつい}はそうは思っていないようだった。

自分の置かれている状況を理解し始めた楓は、恐怖のあまり顔をひきつけて今にも泣き出しそうだった。

それを見て、岩男は思わず楓に叫んでいた。

「朝比奈！俺を選べ！そうすれば、全ては丸く収まる！」

すると、楓はすぐに首を振った。

「いやよ！私、好きな人じゃないと体なんて許さないんだから！」

岩男は慌てて首を振った。

「いや、そんな事言ってる場合じゃないだろう！とにかく時間を稼がなきゃ！」

しかし、パニックになっている楓は、訊^きく耳を持ちはしなかった。

もう涙をぼろぼろと落としていて、可愛い顔が赤らんでいた。

「あなたと二人きりになったら、あなたの子供百八人も産まなくちゃならないのよ！そんなの、絶対嫌だ！絶対選べないよ！」

楓の表情は必死だ。ただ、それゆえ岩男は自分が情けなくて仕方無くなった。こんな場面で、こんなにも拒否されるなんて。

じゃあ、こんな粘土みたいな人間と交わりたくいでも言うのだろうか？岩男は恐る恐る窺うように、楓に言葉を投げかけた。

「お前、こんな奴らと関係出来るのか？」

岩男にそう言われて、楓は嗚咽を漏らして、涙を拭き、鼻を齧る

と、少し考えを巡らした。そして、「格好良ければ・・・」と口にして、岩男をがっかりさせた。

何だと！俺は粘土人間よりも劣ると言うのか！そんな岩男の失望をよそに、楓は言葉をまき散らしてきた。

「顔が良ければ、なんとか我慢できるかもしれないけど、問題はそんな事じゃないよ！百七人よ、百七人！百七人も子供産まなくちゃならないなんてありえない！何なのよ！こんな事なら、女王になるなんて言わなきゃよかった！キャンセル！キャンセル！」

「今更無理だろう！」

岩男がそう言うと、楓は顔を歪ませながら大声を上げた。

「あんた、どうにかしてよ！」

楓はすっかり混乱しているようだ。岩男にどうにか出来る問題じゃないことぐらい、いつもの彼女なら分かりそうなものなのに。

岩男が頭を抱えて答えあぐねていると、楓はさらにまくし立ててきた。

「それに、最後にあんな水晶になるなんていやよ！」

「まだ分からないだろ！」

岩男は彼女を落ち着かせようとそう言ったが、彼女の考えている事は違った。

「あんな水晶は嫌！なるんなら、ルビーかサファイヤがいい、それが私にふさわしいのに！」

岩男はどんな言葉をかけていいか分からなかった。彼女の思考は今やバラバラになっている。手がつけれない。

すると、その様子を見てか、老人がゆっくりと顔を上げると、二人の方に震えた声を出してきた。

「もしお選びいただけられないようでしたら、別の手段でその者を選び出す事になります」

「別の手段？」

岩男と楓の声が揃った。すると、老人は大きく頷いた。

「そうでございます。実は、もう時間があまりありません。今一度

柱火が吹き上がるまでに決めていただけ無ければ・・・、その手段によって一人を決める事になります。どうしても決める事が出来ない場合、それは自動的に取り行う事になっています」
意味が分からない茜は首を捻った。

「どうやって決めるの？」

「はい。サングラーマです」

「サングラーマ・・・」

「そうです。合戦サングラーマによって決めます」

老人はそう言うと、眼を妖しく光らせた。その瞬間、岩男のこめかみに冷たい汗が流れた。そして、眼が血走る。

合戦をするだつて！？要するに、殺し合いをして決めるのか。

それはただ事ではない！

岩男は俄かに高ぶる心を露わにして楓を見た。すると、彼女は顔を真っ白にさせながら、言葉をなくした様子で、どこに視線を合わせなくてもなく眼を見開いていた。

「お、おい！どうするんだ！」

岩男は楓に声を張り上げた。すると、彼女は耳を両手でふさぎ、眼を閉じた。

「黙っててよ！」

「お、おい、状況が分かってるのか？！早く選ばないと、ここにいる皆が殺し合うんだぞ！」

「分かってる！」

すっかり恐怖に包まれた楓は、体を玉座の上に縮こませながら、声を震わせていた。岩男は状況切迫さに興奮して、いても経ってもいられなくなった。勢い、楓を怒鳴ってしまう。

「分かってるなら早く決めろよ！俺を指名するんだ！」

彼女は首を強く振った。

「出来ない！」

「しろよ！時間が無いぞ！」

「なんで、私がそんな事決めなきゃならないのよ！」

「早く決めろって！」

「皆で話し合って決めてよ！民主主義でしょ！話し合って一人に決めてって！」

「そんなのここで通用する訳ないだろう！頼むよ、早くしてくれ！俺にしてくれたら二人は助かるんだ！」

岩男は必至に懇願した。しかし、楓はそれを却下した。

「ああー！うるさいわよ！決められない！決められない！決められない！そんな、一人になんて決めれないよ！」

楓がそう言っつて、眼を見開いて拳を振り上げた時、ちょうど、四つの柱から暗闇を裂く様な高い火柱が上がった。岩男は反射的にそちらに顔を向け、楓は驚き蹲すくった。すると、火柱が上がったのを合図に、立膝を付いていた粘土人達は一齐に立ち上がり、オレンジ色の炎がその無数の顔を照らし出した。

サングラーマ!

二人に近くにいた老人の横顔もオレンジ色の炎が照らし出し、その不気味な顔を二人の前に浮かばせた。

「時は来たり!」

老人はそう呟くと、皆の方を振り向いて、大きく雄たけびを上げた。

「サングラーマ!」

すると、男達が次々と同じ言葉を口にし出し、辺りはその声で埋め尽くされていった。また、一斉唱和である。

岩男と楓はそれに圧倒されてなす術がなかったが、急に四本の柱から火の玉が空に上がり、ちょうど皆のいる真上で四つの火の玉がち合い、大きく弾けて火花を散らした尺玉の花火の様である。

すると、それを合図にして、二人の目の前にいる粘土色の肌をした男達が次々に殴り合いを始めていった。さっきまで大人しくて従順であった粘土色の肌をしていた男達は、鬼の仮面みたいな表情を顔に張り付けて、奇声を上げながら、素手でお互いを殴りあいはじめた。粘土人達は立派な体躯をしているからか、力が凄まじいらしく、頭を潰される者や、腕を引きちぎられる者、そして、崖の外に投げ出される者もいた。

岩男と楓は、しばらくあっけにとられて動く事も出来ずに、ただそれを眺めていた。しかし、さっきとは雰囲気の違い、かなり興奮した様子の老人が、拳を構えながら岩男ににじり寄ってきたので、岩男は身構えて玉座の後ろに飛びのいた。

こいつはやる気だ!

岩男は身構えながら、玉座の上で足を抱えて体を縮こまらせている楓を挟んで、眼をすっかり戦闘モードに切り替えている老人と睨みあった。勿論、岩男は喧嘩の経験などない。人を殴った事もなければ、命をやり取りするような状況に陥った事もなかった。

しかし、今老人を目の前にして、自分がその瞬間に立ち会っている事を感じざるを得なくて、岩男は俄かに吐き気を催した。込み上げてくる恐怖の感情とそれを助長する脳内物質で、興奮の頂点に達しながら岩男の目も血走り、瞬時に体が熱くなってきた。

何を根拠に自信を持っているのかは分からないが、岩男はそこから逃げ出したり、降参してその場へたり込むよりも、老人と向き合い叫ぶ事を選んだ

「うをおおー！」

威嚇すると言うよりは、叫ばなくては、自分を保ってられない。

この時点で、恐怖の為か、楓の事はすっかり頭から無くなっていった。「くそー！かかってこいや！」

弱い犬ほどよく叫ぶ、とはよく言ったもので、威勢はいいのは岩男の方で、老人は何も言い返しても気やしなかった。随分場数をこなしているのか。老人は落ち着いた興奮状態を保ったような動きで、玉座を中心に園を描くように、ゆっくりと足を動かしてきた。同じようにして、岩男も老人と距離を取る。

中心にいる楓は恐怖からか、声も出せずに眼だけ二人を追っていた。逃げ出す事も出来ずに、ただ恐怖に染まっていたのだ。

玉座から少し離れているせいか、他の男達が岩男と老人を無視しているから、誰かが背後から襲ってくる様子は無かったが、岩男からして見たら老人を相手にするのも十分重荷である。他の男達からして、老人との争いは避けているような節すらあるのだから、尚更、老人の実力を感じて額に流れる汗も増える。少しでも隙を見せたらやられそうだ。一体、ここまで緊張を強いられたのはいつの事だろうか。もしかしたら、初めてかもしれない。

二人が一周ほど対峙すると、ふいに老人が低い声を出した。

「若い。わしとお前さんとの実力の差ははつきりしてる。お前さんの恐怖は手に取るように伝わってくるぞな」

老人はそう言うと、にやりと口元を歪ませたように見えた。正確には、彼の表情は仮面のように変わらない。

しかし、岩男にははつきりと、自分の実力が見透かされているのが分かって、ちつとも声も出ない。

すると、老人は何度も頷きながら口を開いてきた。

「初めての戦いか？怖いのも無理はない。じゃがな、これはサングラーマじゃ、手加減は出来ん。だから、お前さんに二つの道を選ばせてやるう！」

老人はそう言つて、指を二つ突き立ててきた。岩男は喉をカラカラにしなから、瞬きもしないで耳をそばだてた。

「いいか、よく聞け！わしや行く度の戦いを勝ち抜いてきた。だが、お前さんの命を取るのには、五秒とからんじやろ。もつとも、もがき苦しみながら殺す事も出来るがな！」

岩男は完全にちびつていた。しかし、老人は顔を歪ませながら、言葉を吐き出してきた。

「正々堂々とわしと向き合い殺されるか？潔く後ろの崖に飛び込むか？どちらを望む！」

どつちも嫌だ！死にたくない！しかし、話し合いに応じてくれる様子は微塵みじんもなさそうだ。

岩男は首を振りながら、直後ろの断崖絶壁に視線を送ると、すぐに老人に振り返つた。そして、逃げ出すかのように老人の右側に走りだそうとした。

しかし、老人の方が一枚上手だ。すかさず老人は岩男の正面に飛び出してきて、岩男を崖の方に追い詰めてきた。

岩男は行く手を遮られ慌てて足を止めると、拳を握りしめながら老人と向き直つた。もう逃げる余裕はない。後ろは崖、前は古兵ふるつわもの。絶体絶命である。これを使い切るだけのプランは無かつた。

すると、老人は腰を低く構えながら、手に持っていた杖を振りかぶつて距離を詰めてきた。太い木の棒はしっかりと老人に握られている。それは、この世界で考えられるだけの、唯一の武器と言つていいかもしれない。

岩男は興奮して、息を呑みこむのも苦しくなつて、足もぶるぶると

震えたが何とか持ちこたえて、やっとの力で老人を睨みつけた。冷たい汗がこめかみを伝って、肌がピリピリと際立つと、岩男は熱が引いていくような恐怖を感じた。

老人はじりじりと近づいてきて、恐怖で体を強張らせている岩男を、獲物を狙う獣のように狙いを定めた。その皺の刻まれた仮面の様な粘土色の顔は、殺気だった感情を岩男にダイレクトにぶつけてくると、「行くぞ！」と低い声をもらして駆けてきた。

岩男はなんでこんな事になるんだ！と覚悟も決められないままであったが、今にも飛び掛かってくる老人の恐怖に耐えられなくなって、張られた糸を切られたかのように動き出していた。

もちろん、老人とは反対側にである。

しかし、行く手は断崖絶壁、すぐに老人に追い詰められ、彼がすごい勢いで杖を振りかぶりながら近づいて来ると、玉座の背もたれから楓が震えながら顔を出しているのが、同時に目に入った。彼女は腰が抜けているのか、助けようとする様子が見られないし、逆に岩男に恐怖が伝わってきてますます気持ちが悪くなってしまふ。

一瞬の出来事だ。

老人は素早く岩男の前に立ちはだかると、獲物をしとめるかのよう

に大きく杖を振りかぶってきた。

もうだめだ！やられる！

岩男はそう思いながら、眼を瞑ると、老人の振りおろしてくる杖に合わせて、反射的に手で払いのけようとして、それを防ごうと動かし

すると、鈍い衝撃が岩男の腕に走った。

「うん？」

何が起こったんだ！

戦いは続く！（前書き）

男は戦いの中に自己を見出すんだ！

逃げるな！立ち向かうんだ！

そこに障害がある限り！

戦いは続く！

岩男が恐る恐る目を見開くと、そこには両腕を肘のところから無くして、腕を振りおろした状態で体を固まらせている老人がいた。自分でもびっくりしているのか、岩男のすぐ近くで無くなっていて自分の手首を見ている。すると、岩男のすぐ後ろを、杖を手にもったままの老人の両手が回転しながら落ちているのが見え、すぐに奈落の底に落ちて消えてなくなった。

岩男は眼を見開いてびっくりしながら、それと、自分の体とを見比べたが、一番信じられない顔をしていたのは老人の方だ。

彼はたった今目の前で起きた出来事が、どうにも受け入れられない様子で、無くなった両手をおろおろしながら見ては、岩男の視線を送っている。

驚くのも無理はない。

彼こそが、前の合戦も勝ちぬき女王と結ばれた存在でもあり、今ここで争っている男達の父親である、男の都で一番強い男であったのだから。彼の予想では、下で争っている息子達の中で勝ち抜いてきた者と自分とが、最後の決着をつけるものだと思っていたわけで、その時の為の言葉も色々と考えてきた訳である。だからこそ女王の傍にいても、彼には他の誰も戦いを仕掛けてこなかったのだし、それはその世界の暗黙の了解みtainなものだったのだ。

しかし、訳の分からない奴がいきなり現れた。ちびで薄灰色をした体の男だ。見た事は無かったが、すぐに戦いに慣れてないと思った。明らかにとても弱そうだったから、息子と戦う前に一丁腕慣らしでもするかと、安心して戦いを仕掛けてみたにも関わらず、思いもよらぬ事にこんな状況になってしまったのだ。

彼は現状を全く理解出来ないまま、きょつがく驚愕の表情を浮かべて岩男に向き直っていた。

一方、岩男はその感触で、全てを理解していた。

この世界の男の体は、見たまんま粘土細工みたいに脆い！まったく痛くも痒くもないじゃないか。

そうと分かれば、もう迷いはない！

今岩男には、自分の中には無いと思っていた動物的な本能が覚醒しており、今までに全く感じた事のない自信が漲っていった。

岩男は勝ち誇ったような笑みを浮かべながら、ゆっくりと老人に歩みを向けた。あの赤い草の粘液とこちらの砂とが反応して、岩男の体の表面はコンクリートの様に硬くなっていたが、動き出す度に関節でそれが削れ、関節部だけはむき出しになっていた。だが、岩男が動くにはそれほど支障はない。どうやら、この堅くなった砂が、プロテクトアーマーとなっているようで、衝撃を和らげ破壊力を増しているようだ。勝利の女神は、岩男に力の風を吹かした。

今度逃げるのは老人の方だ。彼は必至で、腕を振り上げて逃げ出した。

なので、岩男も走り出すと、背中を向けた老人に追いつき、懸命に殴りかかった。すると、左の肩に右ストレートがあたり、そこが拳の形にめり込むと、老人は足元から崩れ落ちた。すぐさま、前のめりになり、彼の体は砂にめり込む。

それを見て、岩男のこめかみに汗が流れおちたが、今度はずっと熱い汗だ。岩男の中の闘争心は冷静さを欠いており、むしろ恐怖の反動から積極性を生み出していた。

俺はすごいパワーを持っているんじゃないか！

信じられないけど、実際そうじゃないか！

そう思い、岩男は老人を捕まえると、ヒーローが悪人を投げ飛ばすかのように持ち上げようと、両手に力を込めた。

しかし、持ち上げようと思っても持ちあがらない。力が増した訳ではなさそうだ。

岩男は拍子抜けして息を吐き出した。すると、その隙に老人は岩男の両手を振りほどくと、息を切らせながら彼に向き直った。

「くらえー！」

老人はそう言つて、岩男めがけて突進してきた。彼は前のめりになりながら、全速力で向かつてきたが、岩男は紙一重のところをそれをよけると、横に転がった。すると、老人はそのまま足を纏れさせ、手もつけないものだからバランスを崩して、あつと言う間に崖に落ちてしまった。

断末魔の叫び声が聞こえてくる。岩男は恐る恐る下を覗いたが、老人の姿はもうそこには無かった。

「あなた強いじゃない!？」

後ろから楓の上ずった高い声が聞こえたが、岩男は崖から視線をそちらに向けると、力無く首を振った。ただ、興奮で息を切らせながら、今自分に漲る自信と力をひしひしと感じて、掌を広げてそれを握りしめた。まさか、自分にこんな力があつただなんて。

しかし、俺はあの老人を・・・殺してしまった。

今になって、冷静さも戻ってくる。

そんな岩男の姿を見て、楓が玉座から降りて来て、彼の傍に近寄ろうとすると、今まで殴りあっていた男達が一斉に動きを止めて二人の方に顔を向けてきた。

すでに半数以上に減ってはいるが、それでもかなりの数の男達がいる。それが二人を興奮したように睨みつけている。楓は慌てて玉座に戻り、男達の様子を窺いつつも、岩男にも視線を送った。岩男は彼女の視線を感じながらも、そちらには目もくれずに、ゆっくりと彼女の方に歩み寄った。

何故か、自然に今から自分に何が降りかかるか、そして何をすべきか分かる。戦いが始まるのだ。

粘土色の肌をした男達も、それを感じたようだ。

彼らは、傷ついた者も、無傷な者も、同じように憎しみに燃えたような表情を岩男に向けると、じりじりと歩み寄ってきた。そして、階段の中腹にいる岩男と、粘土人達の先頭との距離が五メートルほどに迫った時、彼らは足を止めた。

その場所に一瞬の静寂が訪れ、張り詰めた様な緊張が漲った。

玉座からそれを見ていた楓は、あまりの恐怖に黙ったまま、ただ岩男と彼らの様子を交互に目で追った。腰が抜けたように、それしか出来ないのだ。

一方、岩男は階段の上で落ち着かせるように息を吐き出し、粘土人達を見下ろした。どれほどの人数がいるだろうか？どう考えても、一人で相手をする数では無い。しかし、やらなければ！

次の瞬間、岩男と男達は同時に駆け出し、ぶつかりあった。

玉座のすぐ目の前で最初の戦いが起こったのだ。

岩男は先頭にたどり着くなり、そこにいた小柄な粘土男にとび蹴りをくらわした。今まで一度もそんな事をした事は無かったけど、頭の中でそれがイメージ出来たし、出来るとも思ったから体がそう動いた。すると、そのとび蹴りは全くイメージ通りその男に決まり、岩男はその小柄の男の腹を真つ二つに蹴り割ると、そのまま地面に着地した。男は腰を蹴り破られてすぐに地面に崩れ、声もあげずにその場に動かなくなった。

それを合図に、次々に男達が岩男に襲いかかってきた。

右から襲いかかってくる粘土男の腕を交わして、腹を力一杯打ち付けると、左わき腹が大きく吹き飛び、岩男の顔に粘土色の肉片が飛び散ってきた。相手はすぐに崩れ去る。だが、攻撃の手は留まる事を知らない。一人が岩男の右足を抑え込んだ。まだ、子供みたいな体をした奴だ。しかし、岩男は躊躇する事無く、その男の頭に拳をくらわして叩き潰した。拳を取り巻いている、砂のプロテクターが効果を發揮している。

岩男は一瞬息をついた。そして、周りを見た。

誰もが素手であったが、ここまで勝ち残ってきただけあって体格のいい面子ばかりで、岩男よりも皆背が高かった。しかし、かなわないう相手ではない。むしろ、自分の方が力的には優位なのだ。しかし、粘土人達は休むことなくもう一度岩男に襲いかかってきた。彼らの攻撃パターンが単調で、一騎討ちを好むせい、岩男はそれを何とかしのぐ事が出来た。今の岩男なら、彼ら相手にタイムマンで負ける

事はないのだ。

だから、岩男は無我夢中で向かってくる粘土人達を、ひたすら殴り、何度も蹴って、幾度となく彼らをなぎ倒した。粘土の様に柔らかい彼らの体は、その度に吹き飛ばされ、簡単に体を貫かれ、辺りに肉片を飛び散らせながら頭を潰された。もちろん、中には岩男に届く拳もあつたが、岩男に当たるや否や拳から潰れていき、まったくダメージを与える事が出来ないうた。赤い草の粘着質と、この世界の砂が混ぜ合わされて硬くなったプロテクターで、体中が覆われていたからである。

だが、彼らに攻撃を受ける度に岩男の体を覆っていた硬いプロテクターは剥がれていき、徐々に肌が露出してきた。そして、それは丈夫を誇っていた岩男の拳も同じで、殴る度にどんどん剥がれてゆき、十人ほど倒したところで両方の拳はすっかり砕けて、露わあらになつていた。体は何とか守られているが、腕や足はもうぼろぼろな状態だ。それでも、岩男自体にそれほどダメージは響いていなかった。ただ、流石に疲労は隠せようもない。

まあ、それは粘土人達も同じであり、二十人ほどになつた粘土人達は円になつて岩男を取り囲み距離をとりつつ、仲間達の無残な亡骸を見ながら、肩を揺らして息を荒げていた。

岩男も肩で大きく息を吐いて、止めどなく流れる汗を拭くと、周りを取り囲む彼らを睨みつけてた。

彼らが武器を持っていないのが幸いだ。老人の持っていたような木の棒も、ここには無い。刃物もない。飛び道具もない。

素手だけが武器である。いや、岩男の身につけているプロテクターは、粘土人にとってかなりの脅威である事は間違いない。

偶然がもたらしたものとは言え、岩男は自分の運の強さに少し自信を持ち、それは内から満ちてくる力へと変わっていった。

その勢いのまま、岩男は首を振りながら三百六十度見渡すと、楓の座る玉座とは反対側に駆け出した。そして、粘土男達の包囲の輪を破るように、一番手前にいた男を一撃でなぎ倒すと、そのまま男達

の囲みを突破して、少しだけ広くなっている広場に向かった。いくらなんでも、囲まれたら終いだ。

振り返ると、後ろからは男達が体を震わしながら追いかけて来て、その迫力たるやまるで小鹿を襲う狼の群れである。

彼らは誰も声も出しはしなくて、岩男を威嚇する様なしぐさや、叫び声すら上げないのが逆に不気味で、力に歴然とした差があるにも関わらず岩男には響いた。淡々と攻めてきて、その度に壊されていく粘土人達に、岩男は攻撃されているにも関わらず、少なからず心が痛みだし、さすがに心苦しくもなった。

しかし、完全に火がついた闘争心と本能は、衰えも見せないでメラメラと熱い炎となって燃え盛っている。これは今更抑えようもない自分が死ぬか、向こうを殺すか、二つに一つの世界なのだ。

そこから駆けだした岩男は、先の争いで敗れた粘土色の軀を避けながら崖ぎりぎりまで来ると、不意に振り返った。

目の前には、男達が攻撃の姿勢を構えながら、じりじりと距離を詰めるように迫っている。岩男も拳を振り上げて、男達を迎え撃った。

背水の陣だ！

さらに戦いは続く！（前書き）

何を守るのか？

何の為に命を使うのか？

何が出来るのか？

自分と向き合い、そして相手と向き合う。

絶対負けられない戦いがそこにあるのだ！

さらに戦いは続く！

粘土人達は、一人ひとり岩男に向かってきた。なので、岩男は個別に彼らの体を受け流して、次々と崖の上に投げ落して行った。柔道なんて中学生の時にしか習った事無いけど、そのような体の動かし方で何人かを足にかけて、投げ落したのだ。

しばらくして、かなわないと思ったのか、男達は向かって来るのをやめて、様子を見ていた。怖がっている様子も、死を恐れている様子もなかったが、圧倒的な力を前にしてどうしようか攻めあぐねているようだ。その中には、楓がボディガードとして選んだ二人もいる。彼らは彫刻の様な均等が取れた素晴らし体を、戦闘の興奮からか気持ちが高ぶっているかのように、上下させていた。

岩男も息を整えながら、次をどうしようか考えていると、不意に彼らが岩男とは反対側に戻っていった。

引いたのか……。助かった。

岩男は張り詰めている筋肉を解すかのように深く息を吐き出し、これで彼らと闘わなくて済むのかと一瞬だけ頭に思い浮かべたが、すぐにそれが誤りであると分かった。

岩男の目の前で、粘土色の肌をした男達は円陣を組み、岩男に聞き取れない言葉を大声で叫びながら、足踏みをしていた。反対側にいる楓が玉座にしがみつきながら、恐怖の色を浮かべて震えているのが見える。そんな楓の様子を見て、岩男は今のうちに彼女の近くに行こうと思いい、男達を遠巻きに見ながらじりじりと足を進めた。この広くて平らな足場は、ちょうど円形にそり立っているので、崖沿いに進めば楓の所には必ずたどり着ける。それに、中心付近にいる男達とも距離をとれるので都合がいい。岩男はなるべく音をたてないように、でも、出来るだけ急いで彼女の所に向かおうとした。

しかし、半分まで来ないうちに、十人ほどの男達は円陣を解き、二組に分かれて岩男を取り囲もうと動きだした。その動きはさっきと

は違つて、統制がとれているかのようにスムーズだ。ばらばらに攻めかかってくるのではなく、彼らが連携を取ろうとしているのは岩男にも分かった。

男達は岩男を挟み込むかのように距離を縮めてくると、表情の変わらない粘土色の顔を興奮しているのか、大きく揺らしてまた威勢のいい言葉を吐き出してきた。

脳味噌が覚醒して本能を漲らせた岩男は、瞬時に二組の間の隙間を狙つて、迷いもせず一目散に駆け出した。

一瞬の間である。

近くに迫つてきた一人の粘土人の腕を吹き飛ばして、岩男は包囲網をかいくぐると、中心の広い所で男達と向き直ろうとした。勢いで彼らが一人づつ攻めてきたら、こつちのものである。一人だったらさっきの様に個別に倒していけばいいのだから、その分勝機は見える。その刹那に岩男の中でその筋書きが頭に浮かんだが、そうは問屋が卸さないようだ。

粘土人達も馬鹿では無い。岩男が彼らに振り返つた時、彼らは慌てる様子もなく、岩男を中心にして間隔を空けながら取り巻いてきた。すつかり取り囲まれていて、距離はあるものの徐々に縮まってくるのだから、岩男にもここで一抹の不安が頭をよぎつた。

自分の体を覆つていたセメント質の殻も、相続く戦闘のせいですつかり剥がれていて、今や腹の部分と、腰回り、太ももの半分ほどしか残つておらず、後はほとんど体が剥き出しになっている。それでも、あの飲み物の効力が訊いているのか、まだ筋肉は盛り上がつて、力を漲らせているのが救いだ。

ただ、状況が好転する兆しは見えない。粘土人達はさらに距離を詰めてきた。いくら相手が粘土とは言え、十体も倒してまったくダメージが残らない筈はないだろう。岩男は円を狭めてくる粘土人達を、自分の体をゆつくりと回転させながら睨みつけた。見るからに隙はなさそうだし、連携を取りだしているから、一人に組みかかっても一気に囲まれてしまふそうだ。そびえたつ四本の柱から燃え盛る炎

が作る男達の影が、岩男の足元まで伸びてくると、岩男はいよいよ覚悟を決めた。

そして、不意に笑みを浮かべた。

「ふふふ」

思えば笑ってしまったが、今自分はエキサイトしている。

死を間近に感じて、どうしようもない感情を抱いている自分に、岩男は口元を緩めた。自分の死がもうあと少しで迫っているのにも拘らず、沸き起こってくる高揚感を感じて、自分の中の見えていなかった側面を見た気がした。

俺は戦えるのか……。いや、闘っているのか！

不思議な感情だが、今まで過ごしてきた日常の生活が、まるでモノクロの遠い思い出の様に感じられて、今ここで死に直面している今の方がよりリアルを感じてしまっている。自分が死ぬと言う事なんて、未だに全く理解していないのにも拘らず、闘っている自分に酔いしれているのだろうか？本能を感じて戦う事に目覚めてしまったのか？向うの世界では全く感じられなかったのに、死を意識してようやく感じるだなんて。

それに、もう自分に助かる道はなさそうだ。

岩男は大声を上げながら、目の前に迫ってくる男前のボディーガードを見つめて、狂ったように笑った。

「おら、一気に来いよ！」

岩男はそう叫んだ。一思いにやってほしかったのだ。

すると、遠くで自分を呼ぶ声が聞こえて、岩男はその声の方に顔を向けた。

「岩男！頑張れ！」

見ると楓が玉座に仁王立ちして、声を張り上げていた。

彼女は岩男に向って、両手を口に添えて、力の限り、声を振り絞って何度もそう繰り返してきたのだ。

岩男の眼が、再び熱に揺れた。

自分が応援されている。

しかも、楓に。あの、美人に！

岩男は怒号の様な唸り声をあげると、寸でのところで一齐に飛びかかって来た男達の体を吹き飛ばして、その隙について駆け出した。すぐに、小柄な男が岩男の腰にタツクルをかまして来て、その衝撃で腹の殻が砕け散り、岩男にも相当の衝撃を与えたが、岩男はよるめきながらも倒れず、逆にその男の胸を薙ぎ払って、真つ二つにした。その男は胸から上だけになりながらも、必死に岩男にしがみついていたが、岩男は気にする事もなく走り続け、残りの男達をひきつれて、火の付いている柱に向かった。

それは計画していた訳ではなく、本能的であつたが、岩男は直観的にその柱を登っていった。男達は何もできない様子で上る岩男を見上げていたが、やがて意を決した一人がその後を追ってきた。

あのボディガードの一人である。

屈強な体つきをした彼は、岩男にも負けないスピードでそのごつごつとした岩肌の柱を上った。

一方、岩男は柱をのぼりながら、腰でしがみついている男に目をやると、まだ力を緩めそうにないので、片方の拳で頭を潰した。粘土色の肉片が、岩男の顔や体に飛び散る。すると、彼はだらりと力無く腰から落ちそうになつたが、何を思ったのか岩男はそれを受け止めて腕を掴むと、その腕の反対側を柱の頂上で火柱を上げている炎に投げ込んだ。

すると、その体は勢いよく燃えだして、みるみる大きな火の塊になつた。粘土人の体が燃えだしたので。それはごうごうと音を立て、その熱が岩男の頬を撫でた。

岩男はそれをすぐ近くまで迫っていたあのボディガードの粘土男に投げつけると、それはうまい具合にその男の背中当たつた。すると、その炎は彼に燃え移つて、あつという間に火が体を舐めつくし、瞬間に火ダルマになつてしまった。

そして、燃えだした彼は、柱の頂上付近からまっさかさまに地面に落ち、丁度下にいた仲間の頭上に落ちた。すると、瞬間に火は下

にいた男達にも燃え移り、何人もが火だるまになった。彼らは二秒もしないうちに火ダルマになると、熱さからか飛び上るように四方に駆け出し、全体に広がっていった。

戦いの後に（前書き）

女を守る男。男に守られる女。

そこに何があるのか？

愛か？憎しみか？それとも……。

戦いの後に

岩男はそれを上から見下ろしながら、脂っこい肌をしていたから燃えるかと思っただけど、こんなにも燃えやすいだなんて思ってもみなかったな、と思いつながら、しばらく彼らが燃えていく様子を眺めていた。自分で引き起こした事とは言え、まったく地獄絵図だ。

男達を燃やした炎は、彼らが火だるまになりながら走り出した為、すでに倒れていた仲間にも燃え移っていった。なので、広場はすっかり火に包まれ、煙りこそ出なかったが真っ赤な炎で、辺りは昼間の様に明るくなっている。さっき火に飲み込まれなかった粘土人も燃え広がってしまった後に何人か飲み込まれてしまったようだ。まだ玉座にいる楓の様子を窺うと、びっくりしているようだ。岩男の存在に気が付いているらしく、心配そうな目を向けていた。

岩男が手を振ると、彼女も手を振りかけたが、すぐに視線を下に向けた。岩男がその視線の先を目で追うと、もう一人のボディガードの男が、彼女に向かって駆けているのが目に入った。

上手に燃えさかる火をよけながら、ジグザグに前に進んでいる。岩男はいても立つてもいられず、柱の上から勢いよく飛びおけると、両手について地面に降り立った。その衝撃で体中がしびれ、体を覆っていたからもすっかり砕け落ち、梵シヤマの力も使い果たしたのか、隆々としていた筋肉もその張りが衰えて、すっかり普段の岩男の体に戻ってしまった。

しかし、岩男はそんなこと気にもしないで、全速力で楓の元に向かった。燃え盛る炎に体をあぶられて、うっすらと体毛が焦げる匂いがしても、噴き出す汗が目に入ってきてても、岩男は足を動かすのを止めなかった。

考えるよりも早く、体が動いているのだ。

「彼女に近づくな！」

岩男はボディガードが楓にたどり着く前に、二人の間に立ちほだ

かると、両手を広げてゆく手を遮った。さっきの筋肉質だった体は見る影もなく、ひよろりとしてきゃしゃな体で大の字を作って行くのを遮る岩男に、目の前にいる彼は立ち止り、悠々と岩男を見下ろしてきた。背が十五センチほどは違うだろうか、体のつくりも見た目は彼の方が頑丈そうである。それに、あるうことが岩男は真っ裸であり、股間にぶら下がっているものも、今やすっかり小さく縮こまってしまうって、後ろにいる楓にも判別がつかないありさまだった。

しかし、岩男の顔つきだけは、しっかりと威勢を放っていた。目の前にいる粘土ハンサム男を睨めつけながら口をくいしばっているのが、周りに燃え盛る炎がオレンジ色に照らし出しているので、まるで閻魔大王の様な迫力を放っている。

それに、圧倒されているのか、ボディガードの男は構えこそすれ、勢いを殺され攻めあぐねている。

岩男はゆっくりと、息を整えると、顔だけ楓に向けた。

「大丈夫か？」

すると、楓は大きく首を縦に振り、岩男の傍に駆け寄ろうとした。その時、その隙について、男が岩男に飛びかかってきた。岩男は楓の顔の変化でそれに気が付き、とっさに顔を彼に向けると、反射的に右ストレートを前に繰り出した。

渾身の一撃である。

粘土色の肌をしたハンサム男の顔は、そのパンチを受けて大きくひしゃげ、首をねじらすと、岩男の拳が顔にめり込んで、くの字型に折れ曲がった。そして、その場で一瞬動きを止めると、二・三歩ふらふらと足を動かしたかと思うと、その場に体が崩れ落ちた。

岩男は息を切らせながらも、殴った方の拳を押さえながら、男の崩れた体に視線を落とした。すると、男は顔がつぶれたままそれでも起き上がり、もう一度岩男に突進してきて、拳を突き立ててきた。

「うりゃ！」

岩男もそれに反応して、二つの拳は楓の目の前でぶつかりあった。楓の金切り声が響くと同時に、粘土人の拳は瞬く間に吹き飛び、辺

りに飛び散ると、岩男の拳はそのまま粘土人の体を貫き、完全に沈黙させた。

岩男はドキドキと脈打つ心臓を鳴らしっぱなしにして、ただ、殴り切った格好のまま息を吐き出した。

俺がやったのか！生身の俺が！俺の実力だ！

岩男は自分の拳をしばらく見つめると、涙を流しそうになった。なぜか泣けてきたのだ。

しかし、涙は流さなかった。楓の存在に気がついたからだ。

岩男は周りを見渡し、もう粘土人達がないことを確認すると、安心したかのように肩の力を抜いた。

皆、燃えてしまっている。

「岩男！」

楓がその声をかけてきたので、岩男はゆっくりと振り返った。

まるで、ヒーローの気分である。

いや、今、彼女にとつて自分は間違いなくヒーローではないか！自分は迫りくる脅威を一掃させたのだから！

なので、岩男は余裕の笑みを浮かべながら、彼女が抱きついて来るのを待ち構えた。すると、彼女は勢いよく玉座から飛び降りると、炎をよけながら岩男の元に駆け寄ってきた。

その顔は喜びに満ちているように見えるし、興奮に突き動かされているようにも見える。

岩男は彼女は自分を祝福して、感謝してくると思い、一瞬冷静に心の高ぶりを抑えながらも、顔には万弁の笑みを誇らしく浮かべて、両手を広げて彼女を迎え入れた。

「楓！」

しかし、近づいてくると、彼女は岩男の前で一瞬立ち止まり、あからさまに嫌な顔をした。そして、頭を抱えたかと思うと、胸に手を当てて大きく息を吐いて、弱く握りしめた右手を軽く自分の頭に添えて、三回ほど叩くふりをした。自分を窘めている様である。

そんな胸をなでおろしている楓の様子に、岩男は一瞬虚をつかれて

しまつて、言葉を発する機会を奪われてしまつた。なんだもう少
で抱きつけるところだつたのに。

そんな岩男に、楓が自分の羽織つていたストールを投げてよこして
きたので、それを受け止めた。

「前くらい隠しなさいよ」

冷たくそう言つてくる楓に、岩男ははつとして自分の股間をそれ
で隠した。さつきからモロ出しの代物は、戦闘のおかげで見るも無
残なありさまであつたのだ。

体中を締め付けるほどの恥ずかしさと、言葉に出来ない悔しさとや
るせなさが一緒に沸き起こつてきたので、岩男はあたふたとしなが
ら、ストールをスカートみたい腰に巻き付けた。
とんだヒーローである。

すっかり縮こまつている股間が、行き場のない感情を風に揺れるま
まにしていたので、岩男はその場にいるのも耐えられなくなった。

しかし、楓はそんな岩男を見ながら、さつき震えていた女と同一人
物とは思えないような声を出して、片手で彼の腕を強く掴んだ。

「ちよつと来てよ！いいから。早く！」

楓はそう言つて、目も合わせないで、頭を真つ白にさせている岩
男を引つ張ると、ずかずかと火の間を縫つて歩き出した。

「なんだよ、離せよ！」

力無くそう口にした岩男だったが、もうどうにでもなれという気
持ちで、楓のなすがままにした。

一体、自分は何の為に戦つたのだろうか？

自分の為？楓の為？

どちらにしても・・・空しい。

さすがに、ここまでしたのに、彼女が全く褒めも、感謝もしてくれ
ないだなんて思いもしなかつた。なので、思い知らせてやろうとも
思い浮かべたが、正直なところ、打ちひしがれすぎて、彼女に抵抗
する気力も体力もないのだ。

そんな岩男に、彼女は目も合わせないで言葉をかけてきた。

「遅いわよ！」

なんて、女だ！^{おな}勞えよ！

岩男が大きく溜息をつくとき、楓は大きな黒い瞳で岩男を睨みつけてきた。

「なんか言った？」

「何でもないよ。言っていない」

岩男はそうぶつきら棒に答えながら、ある種の違和感に陥った。

あれ、何かおかしいぞ！？

なんだろう？

岩男がそう考えながら頭をひねっていると、楓が不意に立ち止まった。

「どうした？」

岩男がそう言って、楓の前に視線を送ると、そこは広場の中心で、ぱっくりと割れた大きな水晶の前にやってきていた。楓はその水晶の傍に膝を折ってしゃがむと、その中に手を伸ばした。いったい何がしたいんだ？

岩男がそう思って声を掛けようかとしたら、楓が小さく声を上げて、岩男に両手を差し出してきた。岩男はそれを覗き込んだ。

彼女の手には、二つの長方形のケースが握られていて、そのケースの中には、透明な二つの球体が入っているみたいだ。

彼女は黒い瞳を岩男に向けながら、白い歯を覗かせた。

「あの老人が言っていた通り、ここにあったわ」

岩男は彼女の言っている意味が分からなかったが、次に彼女が取った行動には驚かされた。

彼女は自分の瞳に指をあて、眼をまさぐったのだ。そして、コンタクトレンズを取り出した。

色の付いていない、まったく透明のコンタクトレンズを。

「それは・・・」

岩男が思わずそう漏らすと、彼女はもう片方のコンタクトを取りだしながら口を開いた。

「路地裏でおばあさんの行商人にもらったのよ。違う世界が見れるからって。ただで」

その言葉に、岩男も唾を吐きだしながら、嘔き出すように声を出した。

「お、俺も貰ったよ、コンタクト。新宿の路地裏で、あやしい爺さんに！ほら！」

岩男はそう言いながら自分のカラーコンタクトを取り外したが、驚く事に指先のコンタクトレンズは、緑色では無く透明になっていた。すっかり色が飛んでしまっている。

驚いて、楓の顔を見ると、大きく頷いている。

「貰った時は緑だったのに・・・」

「私のもよ」

「そんな、どうして・・・」

「それよりもこれを見てよ」

楓はそう言って、さっきのケースを岩男に差し出した。そこには、さっきはただの透明な球体だけしか見えなかったのに、今はそこに金色に輝くカラーコンタクトがはめられているのが分かった。

「これは？」

不思議そうな顔をする岩男に、楓はケースを開けながら答えた。

「あなたが来る前に、さっきの、あなたがつき落とした老人に話を聞いたの。老人達には理解できないものらしいけど、とにかく神聖視してたから。あやしいと思ったのよ」

楓がそう言って、前まではめていたコンタクトをそこらに放り投げ、新しい金色のコンタクトを指に取るのを見て、岩男は慌てて口を開いた。

「お、おい、まさか、それ付けるんじゃないだろな！」

岩男が口を開くよりも早く、彼女は頷くと、少しほほ笑みながら、一つを片目に付けた。そして、もう一つあるケースを岩男に渡した。同じような金色のカラーコンタクトが入っている。

「まさか、俺にも付けろって？」

楓は無言で頷いた。金色の片目が真っ直ぐに岩男を貫く。その眼で見られると弱いんだ。それに、もう岩男に断る気力は無かった。

終りの後は何故か切なくて（前書き）

そこに何かを見出したなら、ずっと信じてみよう！

そこに何も無くても、あなたは何かを見つけ出すはず！

そう、あなた自身の何かを！

そして、新しい世界をまた、見つけ出すのだろう！

頑張っていきましょう！

終りの後は何故か切なくて

だから、仕方なくケースを開けると、二つ並んだ金色のカラーコンタクトを覗き込むと、ごくりと唾を飲み込んだ。

本当に付けていいのか？

前の緑の奴も話に乗せられて付けたばかりに、今自分はこんな世界に放り込まれてしまったんじゃないか！今度これをつけたら、いたいどうなってしまうか、まったく予想がつかない。

今やすっかり興奮も醒めていたので、再び危険をとまなう事への不安も無くはない。きつと、楓が自分を受け入れてくれさえしていたら、全然違った展開になっていたかも・・・。
なんて思っていると、すかさず楓の怒号が飛んだ。

「あなた、早くしなよ！」

体を震えさせながらも、さっきは名前で呼んでくれたのになんて思いながら、岩男はしぶしぶコンタクトを付けた。楓はすっかり両目がゴールドになっており、急かすように岩男を睨みつけている。

「どっつ？」

そう言われて、両目にコンタクトを付けた岩男が辺りを見渡すと、すぐに驚いて尻もちを付いてしまった。

「うわああー！」

楓はよくこんな場所に立つてられる！

岩男の目の前に広がっているのは、白く波打っているは青い海だったのだ。その海が眼下に広がっていて、岩男と楓は二畳ほどの岩場にいる。二人は四十メートルほど切り立った崖の頂点におり、後は見渡す限り、荒れ狂うように波立つ海ばかりだ。

要するに、二人はマツチ棒みたいに海に突き立てられた島の上にいるのだ。

岩男が尻もちをつくのも無理はない。危うく、楓の足に縋りつこうとしたいのを寸でのところどころらえて、ゆっくりと起き上がると、

涼しい顔をしている楓に向き直った。

「今度はなんだろう？」

震えた声で岩男がそう口にする、楓は遠くを見ながら首を振った。吹きつける風で、ライトブラウンの長い髪が靡いている。

「分からないわ。でも・・・」

「でも？」

前に見た顔で、楓は口元をゆるませた。

「なんだかわくわくするわ。私、海好きだし！」

何で嬉しそうなんだ、この女は！岩男は首を振って答えた。

「そう言う問題？」

楓は澄ました顔で、こくりと頷いた。

「また、新しい物語が始まるかも」

やけに嬉しそうにそう答える楓に、岩男は呆れて大きく溜息をついた。一体、これから何が始まるって言うんだよ？こんな断崖絶壁の孤島の上で？呆れてものが言えない。

しかし・・・。風に靡く髪の毛と、白い肌の彼女の横顔はあまりに美しかった。ゴールドに光る瞳が、水平線から昇りかけている日の光に照らされて、眩しく輝いている。

まさに、ビーナスそのものだった。

岩男はゆっくりと、彼女に肩に手を回そうとした。

先の戦闘は、岩男の中に積極性とある種の自信を持たせたようだ。攻撃こそ最大の防御なり。

岩男は今まさに攻撃を仕掛けようとしていた。

しかし、またしても先制攻撃されてしまった。

「あれを見て！」

楓が足元の海を指差した。口を開く切っ掛けを奪われ、伸ばした手もかわされた岩男は、言われるがままに彼女の指先に視線を移した。そして、息を呑んだ。

そこには、直径百メートルはあるであろう大きな渦が、物凄い勢いで波しぶきを立てながら、辺りに爆音を轟かせて回転していたの

だ。螺旋状に蠢くその海流の中心は、海面より十メートルほど下がっており、全てを飲み込む口の様にその存在を露わにしていた。怪物そのものだ。

岩男が口を半分開けながら隣にいる楓を窺うと、楓はいつか見た様なキラキラとした目で岩男に微笑返してきた。

そして、無言の訴えをしている。岩男は素早く反応した。

「いやだよ！」

岩男は激しく首を振りながら楓を見たが、彼女はただじっとゴールドの瞳を向けてきた。そして、可愛さをまんべんなく使って、口を開いた。

甘えるような声と共に、岩男の顔に言葉の棘が刺さる。

「怖いのか？」

この女にそう言われたら、岩男に断れるわけがない。

岩男は歯を食いしばり、涙目になりながらも、もう一度崖の下に広がる、途方もない大きさの渦に目を向けた。

絶対死ぬ。ただ事ではない。信じられない光景だ。

でも、隣で目を輝かせている人は、そんな事露ほども感じてない様子だ。

「私、小さい頃よく海に飛び込んだのよ！すごい高い所から」

雪国の生まれじゃあ無かったのか？岩男の疑問は、すぐ楓の言葉にかき消されていった。

「高い所から飛ばれなきゃ、近所の子供達から・・・」

「バカにされんדר？」

岩男はそう言っで、口元を緩めた。

「そう言う事」

楓はそう言っで、岩男の手を握った。

「あの時、格好良かったよ」

「え？」

岩男は眼を広げて、楓の横顔を見た。楓は遠くを見ている。

「私を守ってくれたでしょ？最後の最後まで」

この女は・・・やっぱり分かってきていたのか。岩男は嬉しさ
と興奮で顔を真っ赤にしながら、楓の手を強く握り返した。そして、
空いている方の手で楓の肩を抱き寄せようとした。

「当たり前のことしたまでさ」

歯の浮くようなセリフも、今の岩男にははつきりと言い切る事が
出来た。何しろ、自分はやることをやり切ったのだから。眩しい日
の光が、岩男の頼りなげな頬を照らした。

「私、本当は最後まであなたがやられちゃうんじゃないかと思った
のよ」

楓が頬を桃色に染めてそう言って来るのを、岩男は無言で受け止め
た。確かに途中は危なかった。

「でも、あなたは勝ち残った。私の為、そうでしょ？」

楓はそう言っつて、岩男の顔を覗き込んできた。陶器の女達よりもき
め細やかな頬と、ぷっくりとした唇が岩男のすぐそばで揺れている。
岩男は鼻息を荒げた。

「そつだよ」

自分のことで精いっぱいであったことなど今や昔。とにかく自分は
勝ち抜いてきたのだ。自分の恐怖を知る粘土人達ももういない。

すると、楓がその場に坐り、岩男も隣に座る隣に誘った。

「こつちに来て」

岩男は導かれるままに隣に座った。自然と胸が高鳴ってくる。彼女
から漂う少し汗交じりの、自然な香りにすっかり心が参ってしまう。
そんな岩男に火を注ぐかのように、楓はピッタリと体を寄せてきた。

「私、強い人好き」

岩男は自然と楓の肩に手を廻した。すると、驚く事に楓は拒否しな
かった。陶器の女とは違う柔らかい感触を指先に感じて、岩男は恥
ずかしさと共に、そこに楓がいる実感を心に刻みつけた。楓の髪の毛
がサラサラと鼻先に舞い、岩男は鼻息を荒げた。

「朝比奈さん！」

すると、楓はうつとりとした顔をしながら、岩男を見つめてきた。

「楓って呼んで」

それは、もう、とろけるような声である。二人は息を吹きかければ感じるほどの距離でみつめあっており、すでに岩男の両腕は彼女の背中に回っていた。岩男は全ての事を忘れて、ただ楓の事だけを見ていた。聞こえるのはただ、渦が波を切り裂く音だけ。金色に輝く二人の瞳。楓のピンクの唇。二人の荒い息使い。

岩男はたまらず、楓の顔に言葉を吹きかけた。

「楓」

その時である。

あろうことが、尻からガスが噴き出る音がした。それもとびきりの奴である。

巖は楓の顔を覗き込んだ。緊張が緩んだのだから仕方がない。タイミングを考えないのが閉まりの悪いところだ。

岩男はどうしていいか分からず言葉も出ないが、二人の間を漂うその頭を揺さぶる様な臭気は、おのずと答えを導いてしまったようだ。屁の音が悪いのか、その匂いが悪いのか、あるいはその両方か。

楓は何も言わずに崖に歩きだすと、何か声を掛けたそうな岩男に構わず、岩場の縁^へまで進んでいった。

むろんその表情は岩男に窺えない。怖くて見れたものではない。そうは言っても、岩男もつられてそこまで進んで行った。

「楓？」

岩男の呼びかけに、彼女は答えなかった。

「あの、その、なんて言うか・・・ごめん」

岩男が情けないような声を出して、彼女に近づこうとすると、彼女は海の方を見たまま、二本の指で岩男を呼び寄せた。

岩男はすぐさま隣に並んだ。直立不動である。

「落ちて」

剣のある楓の声が、岩男の耳に飛び込んできた。

「え？」

「ここから、あの渦に落ちて」

岩男は下を覗き込んだ。とてもじゃないが怖くてどうしようもない。「俺から？」

楓は頷いた。

「当たり前でしょ！」

岩男は体を縮こまらせて、恐る恐る楓の横顔を窺った。

「そんな、俺……」

「うるさい！」

楓は取りつく島がないようだ。おならぐらい誰だつてするじゃないか。岩男はそう思ったが、彼女には通じないようだ。どうにも納得できないらしい。

「その、そんな事もあるよ」

巖がそう言うと、楓は真っ赤な顔をしながら、彼を睨みつけてきた。岩男は驚いて顔を引き攣らしたが、おずおずと彼女の傍に歩み寄った。

「誰にも言わないで！」

楓がそう言うてきたので、岩男は頷いた。

「言わないよ。楓が屁をこいたなんて」

岩男がそう言うと、彼女は彼の両腕を掴んで、崖に突き落とそうとした。足元から、小石がじゃらりと音を立てて落ちていった。

「絶対に言わないでね！」

「わ、分かったよ！絶対に言わない！誰にも言わない！約束するから！だから、落さないでくれ！」

岩男が慌ててそう懇願すると、楓は彼を崖のへりから自分の方に引き寄せた。そして、顔を岩男に近づけると、咳くようにその顔に息を吹きかけた。

「絶対言わない？」

目が真剣だ。岩男は何度も頷いた。

「絶対言わない！」

「約束する？」

その金色の瞳は、岩男のピュアなところまで届いた。

「約束する！」

岩男がそう言うと、彼女は岩男の背中に手を回して、その唇に口づけをしてきた。思いもよらぬ事に岩男はびっくりして体を硬直させた。楓が止めるつもりがなさそうだと分かると、自分も彼女の背中に手を廻した。激しい接吻である。

二人はお互いに唇を離れた。そして、しばらく見つめ合った後、おもむろに楓が口を開いた。

「行くわよ」

行く？どこに？

「え？」

楓は下を見下ろした。

「行くわよ」

楓の言葉を理解した岩男は慌てて口を開いた。

「その、やっぱやめない。これから、その、あれだ。二人の思い出を……」

岩男が恐怖と期待の入り混じった顔でそう言うのを遮ると、楓は首を横に振った。

「行くわよ！」

「無理！無理！だって……」

岩男が首を振って拒否して、つないでいた手を離すと、彼が話し終わる前に楓は飛び込んで行った。

「うわあああ！！！」

思わず叫び声をあげて下を覗き込むと、楓は真っ直ぐに渦に中心に落ちている。

岩男は天を仰ぐと「まっ、仕方ねえや！」と言って、同じように崖から飛び込んで行った。二人はきりもみしながらも、導かれる様に渦の中心に飛び込んで行った。

楓はなにもかも忘れる様な嬉しそうな顔で、眼を見開きながら。

岩男は今までの行いに後悔して、顔を引き攣らせながら。

二人の物語が、今始まるうとしている。

さて、ここから始まる物語は、また二人の退屈を上手に刺激して、満足させるのだろうか？岩男はもう懲りているようだが、楓はどうなのだろうか？すぐ知りたいと思う。現状を当たり前と感じない世界に行くと、現状が異常にすら感じられて、もとの世界には戻れないと言う。異常が正常に、正常が異常に。どちらの世界を歩き来するのも、本人の意思次第なのだろう。楓はそれを選んだ。

では、岩男は？

それを望んだのだろうか？ただ流されただけ？いや、彼はちゃんと、自分の意志を持っていたと思いたい。

なぜなら、正常の中で自分の異常に気が付き、異常の中で自分の正常に気がついた彼が、一番欲していたものに向かう事が出来たのは、彼の決断に他ならない。

何かを欲すと言うこと自体が、それに対して決断していると言う事なのだから。

人は何かを欲しなくてはならない。

そして、何かを決断するのだろう。

それが何かは、岩男の様に異常に生き、正常に気がつく事で見えてくるのかもしれない。

もしかしたら。

たぶん。

いつの日か。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3391i/>

見えない雪が積もる時

2011年1月1日14時53分発行